

ゆかり



目次

目次

「ゆかり」巻頭言	小仲信孝	3
地域交流活動の新たな展開の模索 ―2023年度跡見学園女子大学の地域交流活動の概況― ..	土居洋平	4
特別寄稿 埼玉県富士見市 跡見学園女子大学の学生に期待すること	星野光弘	7
特別寄稿 菊坂町会と跡見学園女子大学との地域連携活動報告と、今後の連携活動に期待すること ..	川口伸久	10
特別寄稿 跡見学園女子大学との取り組みと、跡見生に期待すること	盛田元博	14
跡見学園女子大学におけるTJUPの取り組みについて ―TJUP(埼玉東上地域大学教育プラットフォーム)活動報告―	照沼 愛	18
跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について ―アフターコロナにおける現状分析― ..	川副早央里	23
特集 アフターコロナにおける地域交流活動	跡見学園女子大学地域交流センター	31
「バナナうんちで元気な子!～生活リズムを整えよう～」2023年度 食育活動	石渡尚子	32
文京Happyベジタブルフェスタ2023への出展	石渡尚子	34
未来の健康を作る食育プロジェクト2023	石渡尚子	36
食品スーパーマーケットとの産学連携による商品開発プロジェクト(第1弾)	石渡尚子	39
「トラベルライティングアワード新座賞」2022の結果報告と2023の活動状況 ―2024に向けての検討課題―	臺 純子	43
「地域振興事業を学ぶインターンシップ」 ―新座市商工会での学外実習 成果報告―	臺 純子	45
文京区学生と創るアグリノベーション事業の取り組みについて	篠崎健司	47
在日グルド人向け日本語教室での学生ボランティア実践	斎藤敬太	50
熱海における宿泊施設の需要創出のための課題発見:大学生の感性を言葉で伝える	小関孝子	53
インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究 ―障害児と健常児の交流イベント実施報告―	赤松瑞枝	56
防災フェスタにおける研究報告 ―ブース出展による効果的な啓発活動を目指して―	赤松瑞枝	59
実践ゼミ B-Rサーティワン アイスクリーム株式会社(東京都品川区)とのコラボレーション 新商品企画提案PBL ..	細川 淳	62
新潟県胎内市での観光による地域活性化の取組視察と提案	守屋邦彦	66
吉野秀雄心忌世話人会 ―歌人を通しての地域交流と文化の継承―	鈴木芳明	69
令和5年度「市内3大学学生と新座市長との懇談会」についての報告	松浦雅子・大崎真夢・轟木さくら・猪狩美羽・浅見怜花	71
大井沢地域活性化協議会 活動計画策定事業 協力報告	土居洋平	74
2023年度 B-ぐる映像制作プロジェクト 活動報告	土居洋平	77
みんなのわこらぼまつり2023・和光市市民活動紹介冊子制作への協力について	土居洋平	80
2023年「文京まちたいわフェス」への協力・本学での実施について	土居洋平	83
「菊坂謎解きマップ」制作―フィールドワークと研究の成果を活かして	川副早央里	86
銭湯から繋がる地域の輪	古澤実怜	89
菊坂跡見塾七夕まつり	水村美穂・川副早央里・黒木真悠・関鈴菜	92
時代まつりin文京における成果報告	小玉采奈・川副早央里・磯田みずき・黒木 真悠・関鈴菜・山下真由子	94

第4回「 ^{ふみ みやこ} 文の京書道展」開催報告	横田恭三	97
菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(4)		
..... 川副早央里・山上真由子・新垣夢乃・磯田みずき・大屋恵実子・黒木真悠・小玉采奈・鈴木みづき・関鈴菜・中川大資・長根旭美・弘真生・渡邊菜月		103
質屋の記録 ～見えてくる昭和初期の暮らし～ 企画展開催記録		
..... 黒木真悠・川副早央里・新垣夢乃・関鈴菜・渡邊菜月・磯田みずき・小山凧咲・長根旭美・弘真生・小玉采奈・鈴木みづき・大屋恵実子・中川大資・渡辺恵未		109
菊坂子ども歴史探検隊「発見されたうつわの破片は何時代のもの!?」報告		
..... 川副早央里・新垣夢乃・磯田みずき・黒木真悠・長根旭美・弘真生		117
菊坂子ども歴史探検隊「どうやって質屋を守る!? 防災の秘密を探してみよう!」報告		
..... 小山凧咲・川副早央里・大屋恵実子・磯田みずき・水村美穂・山上真由子・渡邊菜月		120
旧伊勢屋質店パンフレット制作活動	長根旭美・梅原菜摘・川副早央里	123
2023年度の地域交流関連活動記録	地域交流センター	126
跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程		148

【表紙】

- ・文京区：今年度の跡見「学芸員」in菊坂の集合写真(右上)
- ・新座市：「市内3大学学生と市長との懇談会」に参加した学生たち、新座市長、教育長(右下)
- ・文京区：傳通院で開催された「時代まつりin文京」参加メンバーの集合写真(左)

「ゆかり」巻頭言

学長 小仲信孝

アフターコロナの地域連携活動はどうあるべきか。コロナ感染が終息に向かい、人々の活動が活発化しつつある今、思うところを述べてみたい。

個人的な経験から記すことをお許し願いたい。私は半世紀以上、生まれ育った土地で暮らしている。その間、周辺の風景は様変わりした。畑や田んぼに囲まれていた近隣は住宅地化し、かつての面影を留めるところはほとんどなくなった。それと同時に、近隣住民との関係性も変わった。一言にいえば疎遠になった。子どもの頃は顔見知りの住民ばかり、その家族構成はおろかプライベートな事情まで地域内で「情報共有」されていた。成長とともに、そうした濃密な関係性の鬱陶しさに反発を覚えはじめたものの、良かれ悪しかれ、コミュニティとはそのようなものだとな納得した上で、曲がりなりにも地域に根を張って生きてきた。

しかるに現在はというと、地域とのつながりは、ほぼない。地域とつながらなくても生きていけるからである。私にとっての日常のコミュニティは地元にはなく、職場を中心とする外の世界にある。地縁はもとより地元の人的ネットワークに依存しない暮らしを続けて久しい。東京という場所の特殊性はあるかもしれないが、似たような現象は全国に広がっているのではなからうか。

一方で、東日本大震災（2011年3月）をきっかけに、さまざまなレベルでの絆の重要性が再認識され、被災地に限らず、地域共同体の活性化、再構築の必要性が今日的な社会課題として大きく浮上している。本学では2015年、新たな社会課題解決に寄与することを目的とする観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科を新設し、各地の自治体と連携しながら、人と人とのつながりを創出すべく学生たちが活動を展開している。

絆、言い換えれば地域社会における相互扶助システムの構築の必要性が高まっている現在、その実現に向けて壁の一つになるのは、プライバシーの問題ではないだろうか。共同性を求めていく中で、どこまで個の領域に入り込んでいくことが許されるのか。個の尊重が重視されている現代社会で、共同性を最優先させることはむずかしいだろう。個と全体の共存をどう図るのか、簡単な課題ではない。

かつての地域社会では、特別な仕掛けを作らなくても、近所同士の助け合いが日常的に実践されていた。一方、住民同士のつながりが希薄になっている今日では、外部から何らかの仕掛けを施す必要がある。コミュニティデザイン学科では、その仕掛けづくりを教育研究テーマとしているわけだが、学生たちに忘れてほしくないことがある。それは、地域社会の絆や助け合いは、理論だけで根付くものではない、ということである。仕掛けづくりがきっかけになることは間違いないが、最後は日々の暮らしを通して育まれていくものである。私はそう考えている。

地域交流活動の新たな展開の模索

—2023年度跡見学園女子大学の地域交流活動の概況—

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに

既に昨年度から多くの活動が再開してきた地域交流活動であるが、今年度は、その流れがさらに加速し、多くの活動でコロナ禍前の形態で実施するようになってきた。具体的には、昨年度までは制限されていた参加人数や飲食などの制限がなくなり、大規模な集客イベント、そしてイベントでの飲食ブースの出店も再開していったのである。ウィズコロナが模索された昨年度の状況から、コロナを意識することが少なくなったアフターコロナの段階へと移行したと捉えることもできるだろう。

実際、今年の本冊子においても昨年度と同じく数多くの活動の様子が紹介されているが、その多くの活動で、コロナ禍以前のような「通常どおり」の形でのイベントの実施できたことが報告されている。また、活動の再開や新たな展開を受けて、今回の本冊子には富士見市長よりご寄稿を頂いたほか、跡見学園が平成27年に取得し本学地域交流センターで活用事業を展開している菊坂跡見塾（旧 伊勢屋質店）の立地する菊坂町会長、また、菊坂跡見塾での資料調査等で連携を深めているテイケイトレード株式会社からご寄稿を頂くことができた。この場を借りて、ご寄稿頂いた皆様に厚く御礼を申し上げたい。

もちろん、現在も実際にはコロナ禍は収束したわけではなく、この原稿を書いている2024年1月現在も第10波が懸念される状況であり、また、社会全体での感染対策意識が低下したことと関係か、数年ぶりにインフルエンザが激しく流行しており、その点も心配されるところである。アフターコロナとはいえ、完全に元通りというわけでもなく、また、形態としてはコロナ禍前のやり方でイベント等が行われるようになったとはいえ、各活動の状況を踏まえると単にコロナ禍前のものが戻ったとも言い切れず、コロナ禍前からの課題が顕在化するなどして以前とは異なる形で活動が展開している側面もある。

本稿においては、アフターコロナにおける地域交流活動の特徴について、今年度の本学の地域交流活動に触れながら考えていきたい。

2. 2023年度の跡見学園女子大学の地域交流活動への対応と活動概況

まず、2023年度の本学の地域交流活動へのスタンスであるが、全体としては2021年度に策定した「跡見学園女子大学教室外の活動に関わる指針」（以下、「指針」と略す）に沿って活動の実施を判断してきた。この指針は、授業形態レベルに合わせて教室外の活動のできる範囲等が定められている。また、2022年度の秋学期以降、授業形態レベルは「0.5」と定められ、2023年度は一貫して「0.5」が継続した。この授業形態レベルに対応した地域交流活動は、遠隔地での地域交流活動についても、ほぼコロナ禍前と同じような形態での実施を認めるものとなっており、2022年度秋学期から継続して、2023年度はほぼ制限がない形で地域交流活動を実施することができた。

地域交流センターが直接関わる活動でも、5月28日に開催された「みんなのわこらぼまつり2023」（埼玉県和光市）では飲食ブースも復活し、コロナ禍前の賑わいを取り戻していた。また、本学観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科が協力の形態で6月10日に本学文京キャンパスM2301で開催された「下町サミット」には約150名の参加者があり、文京区をはじめとする23区の中小企業の経営者、地域活動関係者、大学生、高校生など多彩な人々が交流を深め、終了後は近隣の飲食店で交流会も行われている。また、7月8日には、地域交流センター主催シンポジウム「地方を盛り上げ隊！～文京区学生による盛岡アグリイノベーション」が開催され、盛岡市関係者やプロジェクトに参加する拓殖大学、東京大学からも教職員と学生を含め約100名が文京キャンパスブロッサムホールに集った。シンポジウム開始前には、プロジェクトに関わる学生同士の交流ワークショップや登壇者の昼食会も開催され、食堂では盛岡の食材を使った特別メニューが提供された。7月23日・24日に文京区の傳通院で開催された「文京朝顔・ほおずき市」も、今年度は飲食ブースも復活し多くの来場者に恵まれ、朝顔・ほおずきともに早々に完売となっていた。

遠方での活動も引き続き展開しており、筆者の関わるところでは、山形県西川町大井沢をフィールドにしたゼミでの地域活動は、今年度は農林水産省の農山漁村イノベーション補助事業の一環として行い、本学学生が大井沢での地域活動計画の策定に関わり、地域住民や関係者とのワークショップを重ねながら、これからの大井沢での地域づくり事業への提案等を行っている。

秋学期も、引き続き地域交流活動はコロナ禍以前のような展開を見せている。今年度は、20年振りに「全国藩校サミット」が文京区で開催されることから、11月3日に「時代まつりin文京」が開催された。徳川宗家当主をはじめとする関係者や公募で集まった小学生200人が着物姿でパレードを行ったほか、メイン会場となった傳通院では、近隣の町会および本学観光デザイン学科川副ゼミと「跡見「学芸員」in菊坂」のメンバーが共同で子供向けの缶バッチ制作等のブースを出店し、多くの家族連れで賑わっていた。11月5日には、例年同様朗読コンテストが開催され、340名の応募のなかから選出された16名が本学部協キャンパスブロッサムホールで開催される本選に臨み、100名以上の観覧者のなかで朗読を披露した。今年は文京区と盛岡市が友好都市提携締結5周年にあたることから、宮沢賢治の作品が朗読の題材に選ばれ、一般の部の最優秀賞も盛岡市在住の田邊カツ子さんが受賞している。なお、青少年の部では本学心理学部4年生の長井祐香さんが優秀賞を受賞している。今後も、今年度中の2月18日～24日にかけて、菊坂跡見塾において「跡見「学芸員」in菊坂」の企画による企画展「質屋の記録～見えてくる昭和初期の暮らし～」(同時開催：2023年度 文の京 地域文化インタープリター養成講座成果パネル展)の開催も予定されている。

このように、2023年度の地域交流活動は、規模や活動形態からすると、コロナ禍前の水準に戻ったといえるだろう。

3. アフターコロナにおける地域交流活動の特徴

一方で、それぞれの活動の中身を見てみると、コロナ以前とは異なる課題を抱えているものもある。

まず、このことは昨年度の本誌でも指摘しているが、コロナ禍でのイベント中止を受けて運営ノウハウの継承が途切れてしまっており、活動が再開する際に一から検討をし直す必要があることである。特

に、大学での活動の場合、2-3年での活動の断絶が先輩から後輩へと長らく継承されてきた様々な運営ノウハウを失わせてしまっているようである。実際、イベントの出店時も、多くの団体で苦労してコロナ禍前の資料などを確認しながら、実際には一から手法などを作り上げることが多かった。

ただし、このことは悪いことばかりではない。これは、コロナ禍前には継承されるなかで、前例が手法の前提として存在することで何故そうしているのか等についてまで考えが及ぶことなく、実際には状況の変化で必要がないようなことも継続して行っているものが、コロナ禍の断絶により一新され、現在の状況に合わせて一から検討できるようになったということもできる。実際、課題を感じながらも前年度までの活動実績を踏まえて同じように行っていたことが、コロナ禍の断絶を経て、課題として提示され、見直されることもあるようになった。運営ノウハウの断絶は、惰性で行われていたことを見直し、現状に合わせて新しい形にするチャンスでもあるのだ。

また、コロナ禍を経てキャンパス近隣での活動を模索するなかで、本学の地域交流活動は新たな展開をしつつある。具体的には、文京キャンパス近隣における町会との関係の深まりである。これまで、本学の地域交流活動は区や地域活動センターとの連携、企業や有志の地域団体との連携は多くあったものの、町会との直接連携した活動は、ごく一部を除いてあまり行われていなかった。それが、コロナ禍を経て近隣での活動を模索するなかで、これまで直接の関係の深かった小石川表町会や菊坂町会に加えて、氷川下町会、大塚仲町町会、茗荷谷町会、文京中央町会などの町会での活動についても学生が関わるようになってきている。中には、同じ町会のイベントに何度も参加し、その町会を第二の故郷のように感じるような学生もでてきている。

こうした町会との連携が深まっている背景には、近隣の小学校との連携の影響もある。コロナ前の大塚小学校との連携に加えて、今年度からは小日向台町小学校や第一中学校との連携した活動も出てきた。具体的には、小学校の放課後学習支援や中学校での授業TA活動に学生が参加し、それをきっかけにPTAや青少年健全育成会の行う地域活動にも学生が参加するようになり、そのつながりを経て町会との関係が形成されつつあるのだ。

大塚小学校との連携は、氷川下つゆくさ荘での活動を経て地元町会長から紹介を受けたものである。そして、その大塚小学校のPTA会長から小日向台町小学校のPTA会長が紹介され、現在の連携活動につながっている。また、小日向大町小学校の活動の関係から第一中学校の活動が紹介されと、地域交流活動を継続するなかで着実にキャンパス近隣地域での関係が広がっているのである。

4. おわりに

以上、2023年度の本学の地域交流活動の展開と特徴を概観した。そこからは、今年度はコロナ禍前と同じ規模・形式での活動ができるようになった一方で、単に活動が再開しただけではなく、仕切り直ししながら現状に合わせた活動が模索されていることが提示された。また、コロナ禍以前にはなかったキャンパス近隣の個別町会との連携の広がりも確認できた。

特に、近隣町会との連携は、これまでの地域交流活動の蓄積の上に展開している。これからも、これまでの地域交流活動の資産のうえに更に連携のすそ野を広げ、学生が学内で学んだ知識を実践的に活用し新たな経験を得る場を広げるとともに、それによる地域貢献の可能性を模索していきたい。

特別寄稿

埼玉県富士見市 跡見学園女子大学の学生に期待すること

富士見市長 星野光弘

1. 富士見市の概要

富士見市は、埼玉県の南東部に位置し、東は荒川をへだててさいたま市に、北は川越市・ふじみ野市に、西は三芳町に、南は志木市にそれぞれ接しています。

跡見学園女子大学新座キャンパスから、富士見市役所まで直線距離で5km圏内に位置しており、東武東上線のみずほ台駅、鶴瀬駅、ふじみ野駅の3駅を有しています。

市内には、エリア最大級の大型商業施設や各地域には特色ある商店街があり、生活しやすい環境が整っています。また、池袋まで30分以内（写真1）とアクセスに優れる一方、市内には多くの自然が残っており、生活に適したベッドタウンとして、人口が増え続けています。

しかしながら、将来的には全国的な少子高齢化を背景に人口減少が見込まれています。こうした中、一人でも多くの方々に富士見市を知っていただき、「選ばれるまち富士見市」として移住・定住につなげていくため、シティプロモーション活動に積極的に取り組んでいます。

2. 連携・協力までの経緯

貴校とは、令和3年度に不登校生徒への支援における研修会への講師派遣など、教育相談分野において、連携が始まりました。

令和5年4月6日には、地域社会及び学術研究の発展並びに施策の充実のため相互に協力し、地域の活性化と人材の育成に寄与することを目的とした包括連携協定を締結しました（写真2）



写真1：富士見市の立地的な優位性を表す「富士見市W30(ダブルさんじゅう)!!!」(池袋まで30分以内、首都30km圏内)を合言葉に、アクセスの良さや住みよいまちであることを発信しています。

この包括連携協定の締結を契機として、富士見市と貴校が有する人材や資源を活用し、学校教育や社会福祉、商業等の分野において、相互に発展するための連携・協力を図っていきたいと考えています。

3. 富士見市との連携・協力内容

(1) インターンシップ

インターンシップ実習として、令和5年度から実習生の受け入れを開始し、開始初年度の今年度は、実習生3名の受け入れ(写真3)を行い、危機管理部門における避難所開設訓練や、水子貝塚公園におけるイベント(星空シアター)の事業運営、教育支援センター等における不登校児童生徒への支援など、市役所の多岐にわたる業務を体験していただきました。

公務員インターンシップは、公務員の仕事を体験できるだけではなく、市民や職員との触れ合いを通じ、公務員の本質を感じることで、改めて志望動機の深堀ができるなど、多くの経験を積み重ねることができます。この経験は、今後の採用試験において、大きな糧となり得るものと思っています。

公務員を目指す方におかれては、業界研究の一環としてインターンシップに参加していただき、その経験を積み重ねていただければと思います。

(2) 児童向け知能検査

貴校の心理学部や心理教育相談所と連携し、今年度から富士見市における不登校児童生徒へ支援する取組を強化しています。具体的には、これまで富士見市教育相談室で行っていた児童向け知能検査を貴校心理教育相談所と連携することにより、検査回数の増加を実現しました。この取組の検査結果を基に、学校や家庭で一人ひとりの児童生徒が、より力を発揮できるよう、その特性に応じた教育形態や学習方法の確立など、今後の進展に期待をしているところです。

(3) スチューデントサポーター

心身の不調や不登校傾向のある児童の中には、校内の相談室や別室において、教職員等の支援を受けている子もいます。こうした児童にとって、支援者の共感的な姿勢により、安心できる環境で、自らの思いを文字や言葉などで表現することは、自尊感情を高め、生活や学習への意欲を喚起する原動力となります。

そこで、貴校の心理学部の学生をスチューデントサポーターとして小学校へ派遣させていただき、この



写真2：協定締結式



写真3：インターンシップ(危機管理部門)

ような児童へのご支援を実施していただいています。心理学を専攻していることや、教職員に比べ、児童との年齢が近いことから、子どもの目線に合わせた支援を期待して本事業を開始しました。

すでに、スチューデントサポーターが支援した児童が、授業に積極的に参加するようになったという大変嬉しい声も小学校からいただいています。

将来、スクールカウンセラー等を志している学生の支援により、児童が力を発揮しやすい環境が整うとともに、小学校での支援を通じ、学生自身の学びにもつながることを期待しています。



写真4：SDGsワークショップ

(4) SDGsワークショップ (写真4)

富士見市では、第6次基本構想で掲げた理想の“未来”である『充実した日々』を実現し、将来に向けた持続可能なまちづくりを目指しています。そのためには、少子高齢化の進行と人口減少社会の到来に対応し、誰もが自分らしく暮らすことのできる、活力のあるまちを維持していく必要があります。

そこで富士見市は、ビジョンや取り組むべき方向性を共有し、市民、事業者、大学、金融機関、市が一丸となって、持続可能なまちづくりのさらなる推進を図っていくことを目指しています。

その先駆けとして、令和5年11月には、富士見市の理想の“未来”の実現に向けた取組を事業者や市民などと一緒に検討するSDGsワークショップを開催しました。このワークショップには、貴校の学生にも参加をいただき、学生の視点から有意義な意見を頂戴することができました。

SDGsの推進を図るためには、「誰一人取り残さない」という理念に基づき、多様なステークホルダーから多くの意見をもらい、議論しながら取組を進めていく必要があります。

令和6年度以降も、富士見市では、意見交換や取組検討の機会を設けていく予定でいますので、ぜひ、柔軟な発想を持った学生の皆さんの参画を期待しています。

4. 学生に期待すること

先述したとおり、全国的に少子高齢化の進行と人口減少社会が到来しています。富士見市も例外ではなく、今後は人口が減少に転じる推計となっています。人口減少社会に対応した持続可能なまちづくりを実現するためには、富士見市職員の力だけではなく、多様なステークホルダーと連携し、商業や地域コミュニティなど、様々な分野において地域を共に盛り上げていくことが重要です。

この度、包括協定を締結した貴校との連携を強化していくことは、富士見市が目指す持続可能なまちづくりに資するものであり、学生の皆さんにとっても、普段の学生生活では経験することのない貴重な経験をとおして、人としての成長が期待できるものです。

富士見市にお住まいの方に限らず、富士見市外にお住まいの方も、より良いまちづくりのために、ともに考え、行動をしてくれる学生の皆さんのご協力を期待しています。

特別寄稿

菊坂町会と跡見学園女子大学との地域連携活動報告と、今後の連携活動に期待すること

菊坂町会 青年部長 川口伸久

この度、菊坂町会と跡見学園女子大学との地域連携について、2年間の活動の報告をさせていただける機会をいただき、厚く御礼申し上げます。

また、町会区域内の旧伊勢屋質店につきまして、2015年（平成27年）に学校法人跡見学園が旧伊勢屋質店を取得いただき、建物の保存や管理、一般公開、質屋に現存する歴史的品々の調査研究を行っていただいていることは、菊坂町会としても感謝の念に堪えません。誠にありがとうございます。

そして日頃より町会行事と一緒に活動をしていただいております、ご担当の先生そして学生の皆様、大変にありがとうございます。



写真1：旧伊勢屋質店

1. 菊坂町会について

菊坂町会は、地下鉄本郷三丁目駅や春日駅から徒歩圏内にある町会です。町会内には、樋口一葉をしのばせる井戸や、一葉が苦しい家計をやりくりした旧伊勢屋質店、宮沢賢治の旧居跡、多数の文化人等が滞在したことで知られる菊富士ホテル跡があります。また、町会周辺地域には石川啄木、坪内逍遙、正岡子規旧居跡があり、想像ではありますが、きっと明治期の文豪達は菊坂を往来したのではないかと考えております。さらに歴史をひも解けば、この辺一帯には菊畑があり菊の花を作る人が多く住んでいたようで、江戸幕府が編纂した江戸の地誌「御府内備考」（ごふないびこう）には「菊坂」「菊坂町」という名称記載が既にあります。

2. 連携までの経緯

菊坂町会では、少子高齢化の昨今、町会の活性化と、地域伝統・文化を大事にするため、様々な地域活動をしてまいりました。その中でも、地域の未来を託すのは子供たちなので、子どもたちを中心にすることによりファミリーや地域住民のつながりも強くなると考えました。子どもたちも自分たちが住んでいる地域町会を知る・体験することが、将来的にも重要であるとの考えから、菊坂子ども歴史探検隊⁽¹⁾を発足しました。

また、菊坂町会は、旧伊勢屋質店を管理・運営をする跡見学園女子大学「菊坂跡見塾」とは、塾の立ち上げ時からそして文京一葉会「文学散歩」でも逐次連携をもってきましたが、菊坂子ども歴史探検隊の

発足を機に「子どもや町会住民が旧伊勢屋質店にもっと気軽に立ち寄れるようにしよう!」「跡見塾と更に連携して企画行事を行っていきましょう!」と、2022年6月菊坂跡見塾との連携企画打合せを開始しました。

毎回の連携企画では、跡見塾の学生さんに、子どもたちへ地域の歴史特色をわかりやすく楽しく語っていただき、大変好評です。また、学生の皆さんは、学芸員を目指す方や、観光コミュニティの勉強をされている方がいらっしやるので、菊坂町会というフィールドワークを通じて、少しでも学びや成果につながるとうれしく思っています。

3. 連携活動報告 (2022年8月～2023年10月)

下記は、現在まで実行開催した報告です。

・第1回連携企画 (2022年8月20日)

「夏休み企画 菊坂ってな～に?」として、子ども版歴史街歩きを開催しました。始めに町会員より菊坂地域の歴史を簡単に話し、その後旧伊勢屋質店見学を行い、学生さんによる子供向けの解説をしていただきました。一葉ゆかりの井戸の見学、おみやげには、「菊坂」にかけて「菊の苗」をプレゼントをしました。ふりかえりとして子どもに対して適切な情報量のはかり方、飽きないように楽しくわかりやすく解説することへの難しさを感じました。跡見塾5名、先生のご協力のもと、子ども8名とご父母の皆さんの参加にて、和やかに開催することができました。

・第2回連携企画 (2022年10月29日)

ハロウィンイベント「菊坂のハロウィン」として、町会の古い街並みや旧伊勢屋質店の和のイメージをとり入れ日本の妖怪のかぶり物を使い、スタンプラリー制で菊坂町会内の史跡をめぐるしました。旧伊勢屋質店の受付や地域各所では、かぶり物を着た跡見塾の学生さんにご協力をいただき、約40名以上のお子さんの参加でにぎやかに開催することができました。

・第3回連携企画 (2023年1月7日)

「新春かるた・百人一首大会」を旧伊勢屋質店にて開催 (写真2)。町会の小学生から高校生までが参加し、跡見塾の学生さんと跡見学園女子大学かるた部の皆さんの協力をいただき、百人一首の歴史、コツや楽しみ方のレクチャーをいただくとともに、競技かるたのデモンストレーションを披露していただくなど、皆その速さにびっくりいたしました。最後に希望者2名に競技用のはかまを着せていただくなど、新春らしい体験の場となりました。

・第4回連携企画 (2023年3月7日)

「跡見塾と菊坂町会のコラボはっぴ」完成。各種連携イベントに活用をすべくかねてより共同制作企画として進めてまいりました。跡見塾の学生さんにデザインをお願いし、跡見学園女子大学の「桜」のロゴと、菊坂の「菊」の模様が、うまく調和した素晴らしいデザインとなりました (写真3)。折々の連携企画で着用しております。



写真2：「新春かるた・百人一首大会」の様子



写真3：跡見塾と菊坂町会のコラボはっぴ

第5回連携企画（2023年7月29日）

新型コロナウイルス感染症が「5類感染症」に位置づけられたことから、町会として4年ぶりに納涼イベントを開催。例年は大人中心のビアガーデンを行ってきましたが、今回は「親子・ファミリー親睦会」として、飲食の提供や子どもビンゴ大会、先着希望者へメダカの配布、縁日ゲームコーナー（輪投げ、ヨーヨー釣り等）の実施を行い、跡見塾の学生さんにも縁日ゲームコーナーの担当をして盛り上げていただきました（写真4）。町会・周辺地域から行列ができる程多くの参加をいただく中、大盛況に終わることができました。町会・周辺地域に、子どもやファミリーがこんなにもたくさんいるのかと希望を感じました。



写真4：「親子・ファミリー親睦会」の様子

・第6回連携企画(2023年8月20日)

跡見塾が主体となり「発見されたうつわの破片は何時代のもの!？」と題して、夏休みの宿題にも活用できるように、子どもや親子を対象に実施(写真5)。文京区内の遺跡発掘作業や、旧伊勢屋質店の研究調査に携わる文化財研究の専門家のお話しを実物土器に触れながらお聞きするとともに、日頃跡見塾の学生さんが行っている歴史的品々の識別調査を、学生さんのレクチャーのもと体験。日頃学生の皆さんが研究の成果を出すために、このような研究の積み重ねを行っているのだと感じることができました。



写真5：「発見されたうつわの破片は何時代のもの!？」の様子

・第7回連携企画(2023年10月23日)

ハロウィンイベント「菊坂のハロウィン」。内容は2022年開催と同内容。

4. 今後の連携活動に期待すること

手探りではありますが着実に連携実績を積むことができております。菊坂町会は歴史史実には事欠きませんので、これからも地域の宝である旧伊勢屋質店を中心に子どもと学生さんと共に、様々な企画を開催してまいりたいと思っております。また、いずれは周辺地域とも連携し、本郷地域としてつながりを持てばうれしく思います。

企画の中では、跡見学園女子大学に入りたいという子どもたちの声も聞かれました。跡見塾の皆さんは、町会の大切な一員と思っております。共に住みよい街づくりに向け、これからもご協力をよろしくお願いいたします。

注

(1) 菊坂子ども歴史探検隊について

2022年6月に菊坂町会として「菊坂子ども歴史探検隊」を発足いたしました。目的理念としては「子ども企画を通じ、大人を含めた地域住民全体として、SDGs(国連で定めた持続可能な開発目標)の「目標11住み続けられるまちづくり」を目指し、よき世界市民、文京区民、菊坂町会住民として、持続可能な地域住民どうしの和を育み、豊かな下町文化を守り続けるものとします」としました。対象は、小学生を対象としますが、現在は幅広い年代層にまで拡大し、ご父母や地域の皆さん、そして跡見塾の皆さんのバックアップをいただき、地域全体の取り組みへと発展しております。

特別寄稿

跡見学園女子大学との取り組みと、跡見生に期待すること

テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部次長 盛田元博

1. 連携・協力までの経緯

令和2年(2020)7月から11月にかけて、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部では、文京区教育委員会の支援業務として、小石川において柳町遺跡の発掘調査を行いました。この遺跡は、明治21年(1888)から昭和8年(1933)まで、跡見学園の前身である跡見女学校が存在していた場所です。

11月、偶然その前を通りかかった新垣夢乃先生(観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科助教:当時)と当社の現場担当調査員がお話したことがきっかけで、跡見学園女子大学と当社とのかかわりが生まれました。

2. 連携・協力の内容

(1) 柳町遺跡関係

新垣先生の働きかけにより、11月には柳町小学校出身の跡見学園中学校生徒さんと、学園理事長(当時)の山崎一穎先生と理事会の方々が発掘調査現場の見学に訪れました。学祖の跡見花蹊が実際に見たり触ったりしたであろう遺構や遺物を興味深く見ていただけました。

また現場終了時には、出土した跡見女学校の古い基礎杭や煉瓦などについて、文京区の許可を得て一部を跡見側に移管しました。この杭を使って、学内の授業として紙漉きや木製ボールペンを作成したと伺っています。

発掘調査報告書の作成期間(令和2年12月～令和4年3月)も、跡見側と情報を共有していきました。花蹊記念資料館で所蔵されている当時の貴重な古写真や学校の図面をお借りして、遺跡から実際に出土した古い建物跡や池跡についての検討を進め、報告書を刊行することができました。(写真1「柳町遺跡報告書」)

報告書刊行後の令和4年8月、新座キャンパス内に現存する跡見花蹊ゆかりの建物「不言亭」と、周辺に置かれた景石群が柳町遺跡由来の可

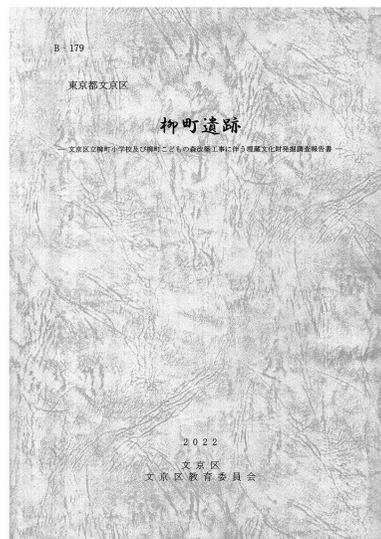


写真1：柳町遺跡報告書



写真2：不言亭調査の様子

能力があるとの事で、2度にわたり大学と共同で調査を行いました。(写真2「不言亭調査の様子」)

(2) シンポジウム関係

令和4年7月、跡見側より柳町遺跡で確認された学園ゆかりの貴重な考古学・歴史学的な成果を公開したいとの趣旨で、シンポジウム「文京歴史探訪～柳町から発掘された文京の歴史～」のお話をいただきました。

この企画は、10月22日に文京区と跡見学園女子大学地域交流センターの共同開催、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部の協力という産学官連携で実現し、多くの来場者を集めました。(写真3「シンポジウムの様子」)

これに先立つ8月からは、学芸員課程を学びながら、旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)を中心に活動する「学芸員in菊坂」の学生5名を当社の小平整理室にインターンシップとして受け入れ、考古学の出土遺物の取り扱いを学んでもらいました。この学生さん達が主軸となって、シンポジウムと並行して企画された柳町遺跡の出土遺物とパネルの展示に結実させました。(写真4「遺物展示の様子」)

(3) インターンシップと当社における採用

小平整理室でのインターンシップの学生受け入れと並行して、当社で行っている清瀬市や文京区内での発掘調査現場の見学も実施しました。これらの取り組みは現在も継続中であります。

また、「文化財調査の最前線を学ぶ」というテーマで、跡見学園女子大学の主に文学部人文学科学芸員課程の学生さんを中心に、令和5年3月と8月に小平整理室の見学会を開催しました。(写真5「小平整理室見学会の様子」)。

こうした連携を続ける中で、当社で文化財の仕事がしたいと申し出た学生1名について、令和5年4月新卒入社文化財調査員として採用しました。

(4) 旧伊勢屋質店での活動

令和5年3月、旧伊勢屋質店に所蔵されている昭和初期の質物台帳群のうち、昭和12年(1937)の台帳の撮影を請け負いました。台帳は300頁におよぶ大部のもので、質入れをした人の住所氏名、品物、貸した金額などがびっしりと書き込まれています。現物は文化財なので持ち歩くわけにはいかない



写真3：シンポジウムの様子



写真4：遺物展示の様子



写真5：小平整理室見学の様子



写真6：台帳撮影の様子



写真7：菊坂子ども歴史探検隊の様子



写真8：文の京地域文化インタープリター養成講座の様子

ため、全頁をデジタルデータ化した上で研究・活用に使用します。(写真6「台帳撮影の様子」)

このデータを基に「学芸員in菊坂」のメンバーを中心に一部を翻刻し、令和6年2月に旧伊勢屋においてパネル展示を行うことになりました。昭和の文書とはいえ、難解なペン字で書かれていることから、当社に在籍する古文書の専門家を派遣して、学生達と共に解説を行いました。

8月には、地域交流センター主催の「菊坂子ども歴史探検隊」の企画、「考古学者のお話を聞いてみよう」と、「伊勢屋の台帳を読んでみよう」に協力しました。当社で所蔵している考古学の遺物（行政からの預かり物ではなく、社内研修用の遺物）の貸出と、解説員として文化財調査員を派遣。台帳を読む参加者へのコーチ役としては古文書の専門家を派遣しています。(写真7「菊坂子ども歴史探検隊の様子」)

(5) 講座

令和5年10月開講の公益財団法人文京アカデミーと跡見学園女子大学が主催する「文の京地域文化インタープリター養成講座」のうち、3コマ分の講座を委託受注しました。「文京区の考古学」と「伊勢屋質店の台帳を使用したグループ演習」として、文化財調査員と古文書の専門家を派遣し、ティーチングアシスタントの学生さん達と協力しながら講座を担当しました。(写真8「文の京地域文化インタープリター養成講座の様子」)。

3. 跡見生に期待すること

以上のように、多岐にわたる産学連携を行ってきました。令和5年度に新卒採用した卒業生は、既に

10月から始まった柳町遺跡の第2次発掘調査に調査員として配置され、「跡見出身者が跡見を発掘する」という輝かしい栄誉を背負って活躍しております。

小平整理室でのインターンシップの学生受け入れも継続しており、現在人文学科の5名が出土遺物の整理やデータ管理などを行っています。

我々文化財に携わる民間企業の使命として、コロナ禍で活動自粛を余儀なくされ、社会経験や職業体験を積む機会を逸した学生達への支援という役割も考えなければなりません。

行政以外でも、文化財を仕事として取得した学芸員資格を活かせる業界があるということ、多くの学生に周知する必要もあるでしょう。そして、これは私共の業界の裾野を広げるのみならず、中・長期的には日本の歴史を紡いでいく人材を育てるという事でもあります。

こうした中で、産学や産学官の連携についても、ますますの重要性を持っていくことは疑い有りません。

跡見生の皆さんは、卒業後に産学官のいずれに進んだとしても、当社で学んだ文化財や歴史に対する知識や経験を存分に活かして欲しいと思います。

跡見学園女子大学におけるTJUPの取組みについて

—TJUP (埼玉東上地域大学教育プラットフォーム) 活動報告—

地域交流課 照沼 愛

TJUP (埼玉東上地域大学教育プラットフォーム) は、地域活性化のために埼玉県の東武東上線沿線および西武池袋線沿線の地域の大学・短期大学・自治体および企業が連携し、協働事業を展開するプラットフォームである。「地元で学び、地元で生きていく若い世代への支援」というビジョンのもと、現在23の自治体会員、20の大学・短期大学が加盟しているほか、地域の企業等が事業者等会員として参加している。



【TJUPのWEBサイト】

跡見学園女子大学はこのTJUPに2020年12月に加入して以来、地域の一員として様々な活動に参加し、地域活性化および地域貢献に努めている。

1. 2023年1月から2023年12月までの活動報告

日付	活動名	学内参加者・対応者	活動内容その他
1月20日	TJUP 単位互換担当者ワーキンググループ打合せ	綿貫職員 (教務課)	(オンライン)
1月26日	第32回 TJUP 教育連携委員会	中村課長 (地域交流課) 福島主任 (教務課) 綿貫職員 (教務課)	教育連携委員会事業計画兼予算申請書について (オンライン会議)
1月27日	第41回 TJUP 運営協議会	中村課長 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
2月6日～ 2月14日	共同IRグループ「大学のインスティテューショナル・リサーチ (IR)に関するアンケート」	渡辺課長代理 (IR・大学資料室)	共同IRグループによるアンケート調査 (TJUP 会員校18校)
2月18日	和光市 家庭教育支援事業 「親と子の絵本読み聞かせ教室」	中村課長 (地域交流課)	家庭教育支援事業の実施 講師：文学部 コミュニケーション文化学科 渡部英美教授
2月24日	第42回 TJUP 運営協議会	土居センター長 中村課長 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
3月7日	共同FDSD【IRer養成講座 (初級)】 「IRのススム! 今日からデータ人材になるためのノウハウ公開!」	中村課長 (地域交流課) 渡辺課長代理 (IR・大学資料室)	TJUPにおける「IRer養成講座」
3月24日	第43回 TJUP 運営協議会	土居センター長 中村課長 (地域交流課) 小又主事 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)
4月12日	第33回 TJUP 教育連携委員会	中村課長 (地域交流課)	今季委員長校選出他 (オンライン)
4月21日	第34回 TJUP 教育連携委員会	中村課長 (地域交流課)	履修証明プログラムについて (オンライン)
4月28日	第44回 TJUP 運営協議会	障子次長 (入試部) 中村課長 (地域交流課)	定例会議 (オンライン)

5月10日	第35回 TJUP教育連携委員会	中村課長(地域交流課) 綿貫職員(教務課)	TJUP教育支援文化講座「音楽を楽しもう」実施計画他(オンライン)
5月19日	第45回 TJUP運営協議会	中村課長(地域交流課) 吉川課長(事務局庶務課)	定例会議(オンライン)
5月29日	海外SD研修プロジェクトチーム 2022年度活動成果報告会	中村課長(地域交流課) 渡部職員(教務課)	2022年度の活動報告他(オンライン)
6月3日	埼玉で学ぼう! 埼玉県内大学・短期大学 合同オンライン入試説明会@Zoom	木川課長代理(入試課) 小町主任(入試課)	大学入試動向についての講演、各大学・ 短期大学別の説明会他
6月6日	TJUP令和5年度SNSグループ第1回打 合せ	障子次長(入試部) 笹井職員(事務局庶務課) 加藤職員(入試課) 木下職員(学生課)	令和5年度SNSワーキンググループの 活動について、代表者選出等(オンラ イン)
6月2日・ 9日・16日	社会人対象教育プログラム2023～空気 圧・制御工学セミナー	中村課長(地域交流課)	特定地域の社会人を対象とした専門 キャリアアップ講座
6月3日	埼玉西武ライオンズ・新座市・十文字学 園女子大学・TJUP主催「親子野球体験 イベント」	永吉主任(入試課)	ボールに親しみ野球を親子で楽しく体 験できる産官学連携イベント
6月8日	第36回 TJUP教育連携委員会	中村課長(地域交流課) 福島主任(教務課) 綿貫職員(教務課)	「外国籍児童生徒支援プログラム」「音 楽を楽しもう2023」「共同FD/SD講座」 等の事業計画について(オンライン)
6月8日	2023年度第1回 TJUPホームページグ ループ打ち合せ	房前職員(事務局庶務課) 橋本職員(図書課)	2023年度役割分担および活動計画に ついて(オンライン)
6月21日	共同FDSD「TJUP会員校における履修 証明プログラム開講事例を知る」	中村課長(地域交流課) 福島主任(教務課) 田平職員(教務課) 綿貫職員(教務課)	「TJUP会員校における履修証明プログ ラム開講事例を知る」をテーマとした 勉強会
6月23日	TJUPキャリア支援委員会 第6回業界セ ミナー「オンライン合同企業説明会」	今村課長(就職課)	オンラインによる合同企業説明会
6月24日	TJUP地域交流委員会オンライン公開講座 誰一人置き去りにしない ～子どもたちの より良い生活環境のためにできること～	中村課長(地域交流課)	SDGsが提唱する「誰一人取り残さな い社会」をテーマとした講座。(オンラ イン)
6月30日	第46回 TJUP運営協議会	障子次長(入試部) 中村課長(地域交流課) 吉川課長(庶務課)	定例会議(オンライン)
7月4日	第13回 TJUP共同IR責任者会議	渡辺課長代理(IR・大学資料室)	2023年度グループの役割分担及び活 動について(オンライン)
7月7日	TJUPキャリア支援委員会 共同SD「Z世代とキャリア支援」	中村課長(地域交流課)	Z世代の就業観や取り巻く環境をデー タを用いて解説し理解を深める(オン ライン)
7月7日	TJUPキャリア支援委員会 グループディスカッション講座 「Let'sみんなでディスカッション!」	今村課長(就職課)	会員校の学生同士が学年・大学を横断 してグループディスカッションを実施。 就職課今村課長がファシリテーターと して参加
7月8日	TJUP公開講座「武蔵国の19校を通じて 埼玉を知る2023/災害にソナエル-専門 家があなたに知識を伝授!-」	中村課長(地域交流課) 渡部職員(地域交流課)	「災害時も誰ひとり取り残さない地域社 会を目指して」 講師: 観光コミュニティ学部 コミュニ ティデザイン学科 鍵屋 一教授
7月14日	第1回 2023年度TJUP Annual Report グループ打合せ	中村課長(地域交流課)	リーダー選出、今後の活動について(オ ンライン)

7月25日 ～8月25日	「鶴っ子サマースクール×大学生WIN-WIN事業」	本学の学性ボランティア	鶴ヶ島市内小中学校を実施会場として夏季休業中の自主学習をする小中学生に対し大学生が学習指導補助員として学習支援を行う。
7月28日	第47回 TJUP運営協議会	土居地域交流センター長 障子次長（入試部） 中村課長（地域交流課） 吉川課長（庶務課）	定例会議（オンライン）
7月28日 ～8月22日	TJUP共同IRグループ 調査	渡辺課長代理（IR・大学資料室）	共同IRグループによる「地域人口の増加」「教育の質の向上」についての調査
8月25日	第48回 TJUP運営協議会	土居地域交流センター長 中村課長（地域交流課） 吉川課長（庶務課）	定例会議（オンライン）
9月8日	TJUP教育支援講座「発達障害への理解と支援」[TJUP内共同FDSD]	塩月副学長 渡邊事務局長 他教職員15名	TJUP活性化対象地域の小中学校教職員や会員校教職員等を対象とした共同FD・SD。 講師：心理学部臨床心理学科 小栗貴弘准教授
9月9日	TJUP公開講座「武蔵国の19校を通じて埼玉を知る2023/埼玉のスゴ偉人」	中村課長（地域交流課） 渡部職員（地域交流課） 照沼課長代理（人事課）	「埼玉が生んだ大哲学者 田中王堂」 講師：文学部人文学科 松井慎一郎教授
9月22日	第49回 TJUP運営協議会	土居地域交流センター長 障子次長（入試部） 中村課長（地域交流課） 吉川課長（庶務課） 照沼課長代理（人事課）	定例会議（オンライン）
9月28日	TJUP共同FD・SD 認証評価における教育職員と事務職員の意識の改革	小野主任（庶務課）	認証評価における教育職員と事務職員の意識の改革について（オンライン）
9月29日	第14回 TJUP共同IR責任者会議	渡辺課長代理（IR・大学資料室）	2023年度共同IR調査の集計・分析について他（オンライン）
10月27日	第50回 TJUP運営協議会	土居地域交流センター長 障子次長（入試部） 照沼課長（地域交流課）	定例会議（オンライン）
10月28日	TJUP教育支援文化講座「音楽を楽しもう2023」 ～弦楽器が奏でる調べ♪ヴァイオリンとギターの魅力を知ろう～	照沼課長（地域交流課）	TJUP特定地域内の中学生を主対象とした教育支援企画として、坂戸市文化施設オルモにて音楽会を開催
10月28日	日本スリーデーマーチに向けた「東松山市クリーン活動2023」	学生ボランティア2名	東松山市で開催される国際的ウォーキング大会「日本スリーデーマーチ」のコース上のクリーン活動（ゴミ拾い）とウォーキング。
11月7日	TJUP教育連携懇談会【TJUP教育連携フォーラム2023】	照沼課長（地域交流課）	各教育委員会からの支援要望をふまえて今年度TJUPとして検討・連携した事業や取り組みをテーマに二部構成で開催。
11月24日	第51回 TJUP運営協議会	大坂次長（事務局） 照沼課長（地域交流課）	定例会議（オンライン）
12月22日	第52回 TJUP運営協議会	障子次長（入試部） 照沼課長（地域交流課）	定例会議（オンライン）

2. 本学が運営責任校となった活動の報告

1) 事業名：和光市 家庭教育支援事業 「親と子の絵本読み聞かせ教室」

子供の心の成長や学力向上への効果を期待する家庭教育支援事業として、保護者へ絵本を読み聞かせる際の効果的な方法について講義を行った後、親子で読み聞かせを实践する。アンケートの結果から「プロの読み聞かせのコツを知ることができてよかった」「朗読と読み聞かせの違いが面白い」「自分自身が楽しめた」という声が聞かれた。

実施日時：2023年2月18日(土) 10:00～11:30

実施場所：和光市南公民館

運営責任校：跡見学園女子大学

運営校：城西大学、城西短期大学、東京家政大学、東京電機大学、駿河台大学、明海大学

講師：跡見学園女子大学 文学部 コミュニケーション文化学科 渡部英美教授

参加者：33名(大人18名、子供15名)

2) 事業名：TJUP 公開講座「武蔵国の19校を通じて埼玉を知る2023」

TJUP会員校19校が、それぞれの専門性を活かし、特定地域を中心とした埼玉県内の地域住民に向けリレー形式での講座を開催した。災害に対して事前に備えておくという知識・災害発生時の正しい行動・被災時により良い生活を送るための知識をテーマとする「災害にソナエル」と、今昔関わらず埼玉県にゆかりのある偉人やスゴい人にスポットを当てる「埼玉のスゴ偉人」という2つのテーマを設定し、本学でも各テーマにつき1講座を企画、実施した。

①災害にソナエル ―専門家があなたに知識を伝授！―

「災害時も誰ひとり取り残さない地域社会を目指して」

実施日時：2023年7月8日(土) 15:00～16:30

実施場所：跡見学園女子大学 新座キャンパス 3号館 3156教室

運営担当校：跡見学園女子大学

運営スタッフ：跡見学園女子大学 5名、TJUP会員校(城西大学)1名

講師：跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 コミュニティデザイン学科 鍵屋一教授

参加人数：22名

②埼玉のスゴ偉人「埼玉が生んだ大哲学者・田中王堂」

実施日時：2023年9月9日(土)

実施場所：跡見学園女子大学 新座キャンパス 3号館 3155教室

運営担当校：跡見学園女子大学

運営スタッフ：跡見学園女子大学3名、TJUP会員校(城西大学)1名

講師：跡見学園女子大学 文学部 人文学科 松井慎一郎教授

参加人数：27名

3) 事業名：TJUP教育支援講座「発達障害への理解と支援」(TJUP内共同FDSD)

近年、教育現場において発達障害や特別な支援が必要な小中学生は増加傾向にあり、支援の充実が課題となっている。そうした社会的ニーズに応えるべく、TJUPにおいて「発達障害への理解と支援」をテーマとした共同FD・SDを実施した。TJUP活性化対象地域の小中学校教職員やTJUP会員校教職員等を対象としており、参加者一人ひとりが「発達障害の児童・生徒・学生の支援に関する知識・理解を深めること」を目的としている。

実施日時：2023年9月8日(土)

実施形態：オンラインにて実施

運営責任校：跡見学園女子大学

運営校：城西大学、東京電機大学、明海大学

講師：跡見学園女子大学 心理学部 臨床心理学科 小栗貴弘准教授

参加人数：38名

3. 今後の展開について

TJUPの対象地域では、若年層の人口流出が比較的多く、今後全体人口の減少と高齢化が進む地域と分析されており⁽¹⁾、本学でも同様に学生数の減少が続いている。地域に学ぶ学生が、この地域で生きていきたいと思えるような支援を行うことがTJUPの目的となっており、本学としても、新座キャンパス所在地である埼玉県東上地域において、地域社会の一員としての責任や役割を果たすことは大学としての使命である。

高等教育機関としての大学に、地域社会から求められていることとしては、大きく二つあると考える。一つは、地域に暮らす人々がより豊かに生きていくための学びの機会を提供し、教育支援の輪を広げていくこと、もう一つは大学や学生と地域の人々、地域住民同士など、人と人が繋がるきっかけを作り、地域活性化に貢献することである。地域が活性化することで、若年層が「この地で学びたい」「この地で働きたい」「この地で暮らし続けたい」と考え、それが更なる活性化につながっていく。

そのためにも、TJUPというプラットフォーム上での他大学との連携や協力、協調は非常に有効である。各大学の特长や専門性を活かしたイベントや講座の実施は、互いにないものを補い合い、単体では難しい活動を可能にして、より広い範囲での活性化を目指すことができるだけでなく、全体でのFD・SD向上にも繋がる。また、活動を行うことで地域社会に本学を知ってもらい、「学びたくなるような魅力ある大学」になることも、本学がTJUPに参加する現在の目的の一つと考えている。

今後もTJUPの各種活動を通して教職員や学生同士の交流を深め、少しでも地域貢献、社会貢献に資するような活動を続けていきたい。

参考

- (1) 令和5年度 埼玉東上地域大学教育プラットフォーム(TJUP)共同IR報告書
IR_report2023_1_202310.pdf (taibokudo.jp)
報告日：2023年10月27日

跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について

—アフターコロナにおける現状分析—

川副早央里

1. はじめに

本稿の目的は、跡見学園女子大学における地域交流活動の現状を明らかにすることにある。跡見学園女子大学地域交流センターでは、2019年度以降毎年「地域交流関連活動に関わる調査」を実施し、学内の全学的な地域交流活動の実態を調査してきている。2020年春頃から流行し始めた新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、2020年度以降は地域交流活動数が減少していたが、昨年は「回復」の兆しが見られていた（金子2020、新垣2021、2022、2023）。今年5月には新型コロナウイルス感染症が第5類に移行され、社会全体で社会・経済活動が再開された年となり、「コロナ禍」から「アフターコロナ」へと進んだ年でもあった。そのなかで、地域交流活動はどのように変化したのか。本稿では、本学で実施した「2023年度地域交流関連活動に関わる調査」の結果をもとに、アフターコロナとなった2023年度の跡見学園女子大学の地域交流活動の実態を明らかにする。

2. 調査の概要

今回の調査は、学内情報システムであるAtomi Information Portalの掲示登録機能を使用し、跡見学園女子大学全学部に所属する常勤職員104名の教員を対象に、2023年6月14日から7月31日の期間に、「2023年度学内の地域交流関連活動に関わる調査」という名称で実施した。

実施に際しては、Microsoft Formsを利用したインターネット上のアンケート調査を行った。回答者は43名（回答率41%）であった。本調査は、活動ごとに回答を提出する形式となっており、一人の教員が複数の活動について複数回答しているケースもある。全回答件数は56件であった。

調査では、まず「2023年度実施中・実施予定の地域交流活動の有無」を尋ね、そうした活動が「ある」と回答した場合には、「活動名称」「活動時期」「活動場所」「交流先組織」「助成の有無」「実施体制」「参加学生の数」「活動関係者の数」「課題」「工夫」「広報等の協力可否」「大学・地域交流センターへの要望」について尋ねた。

3. 2023年度の地域交流活動とその特徴

(1) 2023年度の地域交流活動

今回の調査で回答を得られた今年度の地域交流活動の件数は34件であった。具体的には、以下の表1に記載する活動が実施中・実施予定であることが分かった。

表1：地域交流活動一覧

	活動名称	活動概要と目的	活動時期	活動区分
文京区内	1 観光デザイン演習	3年ゼミでの文京区内のデザイン発見のための町あるき		
	2 文京シビック主催公演 鑑賞前講座 講師	文京シビック主催公演 鑑賞前講座 講師 文京シビックホールからの依頼	4月29日『白鳥の湖』(済)、 12月16日『くるみ割り人形』	教員のための活動
	3 文京ハッピーベジタブルフェスタ2023	文京区主催のハッピーベジタブルフェスタ(9/13 於：文京シビックセンター1F)に石渡ゼミとして出展する	2023年4月～ 9月13日	ゼミ・授業等 正規教育活動
	4 未来の健康を作る 食育プロジェクト 2023	小学生の食生活改善を目的とした、出張食育授業を実施する。	2023年10月～ 2024年1月	ゼミ・授業等 正規教育活動
	5 朗読コンテスト	文京区主催 跡見学園女子大学共催	9/3～9/予選 10/4準備 10/5コンテスト 決勝	大学職員と教員
	6 特になし	3年生の(デザイン)ゼミの一環。地域にある店舗の読み取りとデザイン提案が目的。	春学期	ゼミ・授業等 正規教育活動
	7	フェーズフリー(日常生活で使用しているアイテムをどのように非常時に使っていくか、あるいは非常時にも利用できるようないかに日常生活に関連アイテムを使いこなしていくか)に関する研究成果をまとめて発表する。	2023年10月～ 2023年12月3日	ゼミ・授業等 正規教育活動
	8 文京区エリアスタディ (社会調査実習)	観光コミュニティ学部社会調査士課程科目の「社会調査実習」(通年授業)佐野クラスでは、毎年、調査対象地域を文京区に設定、各年度の調査テーマに応じて、町会ほか、諸団体、事業所等の協力を得て社会調査(調査対象者は文京区民を基本とする)を実施している。年度末には調査協力者・団体等には調査実習成果報告書を配布するとともに、報告会を開催している。本年度は、文京区大塚仲町町会との合同プロジェクト2年目として、「つながりをつくる」をテーマに調査活動を行っている。	4月から翌3月	ゼミ・授業等 正規教育活動
	9 跡見ひきこもり等 地域支援事業	豊島区や文京区で活動を展開するサンカクシャ、さきちゃんち、青少年健康センター(茗荷谷クラブ)等のひきこもり等地域支援団体との協同事業である。2019年3月より開始された「文京区ひきこもり等支援者連絡会」で検討を重ねてきた。「コミュニティ心理学」をテーマとした3・4年の板東ゼミ生を中心に、希望者が参加する。 2021年度より活動を開始しており、ゼミ生がボランティアとして若者の居場所に関わっている。また、2023年度より新たに多世代型居場所であるさきちゃんちからも依頼を受け、学生が居場所支援に関わることになる。それに伴い、本事業の名称を「跡見ひきこもり支援事業」から「跡見ひきこもり等地域支援事業」に変更した。 支援団体にとっても大学と協働する利点があるのと同時に、学生にとっては支援の現場に触れることで、座学で習得した知識を現実的に活用する方法を、その困難さとともに体験することができる。また、地域社会に関わることで社会性を学び、人間力の向上も期待できる。さらに、大学にとっては豊島区や文京区に根づいた地域連携を展開でき、信頼度を高めることができるだろう。教員の役割は、地域連携への参画、活動の企画運営、支援の安全性の確認、学生への指導等である。	2023年 5月15日(月)～ 2024年 3月31日(日)	ゼミ・授業等 正規教育活動

	活動名称	活動概要と目的	活動時期	活動区分
文京区内	10 B-ぐるバス車内映像制作プロジェクト	文京区のコミュニティバス「B-ぐる」の車内で流す映像制作プロジェクト。映像では、主に文京区の魅力について紹介する。地域交流センターがポータル経由で公募したメンバーから編成された「AGB隊」が今年度は2チームにわかれ、テーマを定めて区内を取材し、撮影と編集作業を行う。また、取材先との調整や編集作業にあたっては、文京区および「B-ぐるバス沿線協議会」と連携して行う。 公開開始予定は、前半チームが10月・後半チームが1月。各公開月の前月20日ごろまでに映像の編集作業を終え、沿線協議会にて仕上げ作業を行って頂く。 また、こうした活動を通じて、構成メンバーのチームでの行動力、外部との交渉力、コミュニティへの理解、映像制作・表現力、事業のマネジメント力等について向上させる。	2023年7月15日～ 2024年3月末日	課外活動 (学生一般募集あり)
東京都内(文京区外)	11 食育活動「バナナうちで元気な子!～生活リズムを整えよう～」の大学生講師	一般社団法人成人病予防協会では小学校低学年の生徒さんに健康的な排便習慣を身につけてもらうため、食生活や運動の大切さを伝えるため、出張授業に取り組んでいる。この講師になるためには、「健康管理能力検定2級(後援:文部科学省)」の試験および講師実技試験に合格することが求められる。合格後、一定の研修期間を経て、都内小学校で出張授業を実施することができる。	2023年10月～ 2024年1月	ゼミ・授業等 正規教育活動
	12 産学連携による商品開発	株式会社エムアイフードスタイルと石渡ゼミが協働し、高品位スーパーのクイーンズ伊勢丹で販売する商品を企画・開発・販売する。学生は企画立案・販売促進までを担う。	2023年7月～ 2023年10月	ゼミ・授業等 正規教育活動
	13 東京都中学校放送教育研究会講師	東京都の中学校放送教育に関わる先生とNHK放送コンテスト全国大会を目指す東京都代表の中学生に、アナウンスと朗読の講習を行う	7/15(土)	教員みの活動
	14 サーティワン アイスクリーム新製品開発PBL	実践ゼミ活動の一環として、上記PBLを実施。B-Rサーティワン アイスクリーム株式会社の経営陣にご来校いただき、プレゼンテーションをご講評、褒賞いただく。	11月	ゼミ・授業等 正規教育活動
新座市内	15 トラベルライティングアワード新座賞作品応募&学生運営委員	トラベルライティングアワード新座賞(基礎ゼミ生全員・作品応募、学生運営委員は入選作選考などに関わるインターンシップとして実施)	7月～12月くらい	ゼミ活動
	16 新座市商工会ウォーキングイベント運営手伝いなどのインターンシップ実施	新座市商工会 ウォーキングイベントなどの運営手伝いを含むインターンシップ(参加学生2名)を実施	7月～12月くらい	インターンシップ
	17 新座プラスカレッジ	新座市の公開講座 朗読のテーマで跡見の朗読の専門家が講師となり一般向けに実施	令和5年9月～ 10月の土曜日5回	教員みの活動
	18 令和5年度 市内3大学学生と新座市長との懇談会	①概要「デジタルを活用した市民の利便性向上のための取組について」 上記のテーマについて、新座市内の三大学で、大学ごとにアイデア等を発表し、市長との懇談会を実施する。 ②目的 柔軟な思考により斬新なアイデアの提案が期待できる大学生から提言等をし、市政に反映させるとともに、大学生の市政への理解と関心を深めることを目的として、市内3大学(跡見学園女子大学、十文字学園女子大学、立教大学新座キャンパス)に在学している学生を対象として市長との懇談会を開催するものです。	本年9月末にプレゼン準備 →令和5年11月14日(火)午後4時30分から午後6時00分まで	課外活動 (学科・サークルなど)
埼玉県内(新座市外)	19 新座キャンパスにおける福祉施設のパン販売宣伝活動	福祉施設に併設されたパン屋さんのパンを新座キャンパスで販売していただくにあたって、ポスター・案内板の作成等をおこなっている。目的は新座キャンパスの昼食難民問題の解消と、学生の福祉に対する理解を深めることにある。今後、宣伝方法を多角化すると同時に、福祉施設の見学等、宣伝にとどまらない活動へと展開していく予定である。	学期中	ゼミ・授業等 正規教育活動

	活動名称	活動概要と目的	活動時期	活動区分	
埼玉県内(新座市外)	20	角川武蔵野ミュージアム・跡見学園女子大学コラボ 絵本の読み聞かせ	ひと月に一回跡見女子大の学生が東所沢の角川武蔵野ミュージアムに出向き、来館者の親子対象に一日2回絵本の読み聞かせをする。絵本は角川の出版物を使用。学生には日当が出る。指導は渡部。	2022年9月から毎月1回	課外活動 コミ文教員関係学生
	21	和光市南公民館読み聞かせ講座	和光市南公民館周辺の市民に絵本の読み聞かせのノウハウを伝える講座	令和5年度冬	課外活動 (学科・サークルなど)
	22	在日クルド人向け日本語教室でのボランティア	埼玉県蕨市内で開催されている在日クルド人向け日本語教室でボランティア活動に参加した。この活動を通して、学生に地域日本語教育の現状を実感してもらった。	2023年7月9日、2023年7月30日 (秋学期も実施の可能性あり)	ゼミ・授業等 正規教育活動
	23	埼玉県三郷市とのインクルーシブ公園運営に関する共同研究	障害の有無にかかわらず子どもたちが楽しく遊ぶことができる公園を共同開発し、2023年3月22日にオープン運びとなった。4月以降は、一人でも多くの方に活用していただくにはどうしたらよいか、三郷市と共に追究している。	2023年8月～2023年12月	ゼミ・授業等 正規教育活動
	24	みんなのわらばまつり2023	和光市にて市民中心に企画される「みんなのわらばまつり2023」の企画運営に参加し、コミュニティの現場について学ぶ。 また、イベント時配布の市民活動紹介冊子を学生の手で作成し、和光市の市民活動への理解を深める。	2022年1月～2023年5月	課外活動 (学生一般募集あり)
	25	わこうキャンパス会議	和光市の中央公民館を若者が来やすい場所にするための方法を考えるワークショップの、企画・運営を行う。ワークショップは計3回の予定で、地元中高校生を対象として同公民館で実施する。	2023年9月から2024年3月	ゼミ・授業等 正規教育活動
その他	26	障害者就労施設の見学・実地交流およびボランティア活動	障害者就労施設を訪問し、見学および利用者との実地交流をおこなう。ゼミで映像作品における障害者表象に関するテキストを読んでおり、本活動ではゼミでの学びをふまえたうえで障害をもった人びとに対する理解を深めることを目的としている。	不定期	ゼミ・授業等 正規教育活動
	27	文京区学生と創るアグリノベーション事業	もりおか短角牛をテーマに、その普及、振興策について、学生の目線で調査分析し、さまざまな試行的取り組みを実施している。盛岡での現地調査や各種活動に対して、交通費と宿泊費の助成を受けている。	令和3年度～令和5年度	ゼミ・授業等 正規教育活動
	28	熱海における宿泊施設の需要創出のための課題発見	なし	2022年夏より	ゼミ・授業等 正規教育活動
	29	スーツセレクト・レディス マーケティング戦略提案PBL	実践ゼミ活動の一環としてスーツセレクト・レディス マーケティング戦略提案PBLを実施。株式会社コナカの経営陣にご来校いただき、その前でゼミ生が発表。ご講評、褒賞をいただく。	2024年1月	ゼミ・授業等 正規教育活動
	30	こどもみらい横浜での里親養育支援	横浜市から委託を受け、里親交流事業や相談支援事業、研修事業で養育について助言やカウンセリング、研修講師を行う	毎月4～5回	教員のみ活動
	31	観光による地域活性化への取組に関するフィールドワーク	本学部の「基礎ゼミナール(観光)」の学外実習として、ゼミ生10名とともに新潟県胎内市を訪問(現地訪問を2泊3日にて実施するほか、その前後で事前学習や事後報告会を開催)。地域における観光の現状や課題などを、現地や関係施設を訪問し体験したり、関係者から話を聞いたりすることで肌で感じるとともに、気づいた点や取り組むべき点などを、若い世代の目線から提案できるようになることを目的として実施。	2023年9月	ゼミ・授業等 正規教育活動
	32	吉野秀雄卍心忌世話人会	第53回吉野秀雄秀雄卍心忌(7月1日(土)14:00～16:30、講演会講師:歌人柳宣宏。吉野秀雄ゆかりの話4名):第一回釈迦空賞受賞者である歌人吉野秀雄の功績を讃え、その優れた作品を広く後世に伝える活動。吉野秀雄の遺族を始め、吉野秀雄にゆかりの深い鎌倉市、高崎市、富岡市、新潟市を中心に全国より愛好者が集う。歌人を偲ぶ会を組織運営し、吉野秀雄の広報活動や、講演会記録を印刷し配布する活動などを行っている。	世話人会4月、9月。吉野秀雄秀雄卍心忌毎年7月第一土曜日。	

	活動名称	活動概要と目的	活動時期	活動区分
その他	33 農林水産省 農林漁業発イノベーション推進事業〈地域活性化型〉補助事業 山形県西村山郡西川町大井沢 地域づくり活動計画策定・実証事業への協力	観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科土居ゼミナールでは、設立当初から山形県西川町大井沢との協働事業に取り組んでおり、日常的な連携の活動に加え、移住促進ガイドブックの制作（2017年度）、新規お土産品の制作（2021年度）、観光マップ制作（2022年度）を行ってきた。今年度、大井沢では住民組織が中心となり、農水省の農林漁業発イノベーション推進事業の地域活性化型の補助事業が採択され、今後3年間をかけて地域づくり計画の策定と、実証事業を行う予定である。土居ゼミナールでは、コミュニティデザインの実践の恰好の機会ととらえ、本事業に協力した活動を展開する。具体的には、地域づくり計画のワークショップ（7月15日以降、年度内に数回の開催予定）の運営協力、実証事業の企画や実施の協力を予定している。 ※なお、参加メンバーは土居ゼミナール2・3年を主体とするが、西川町大井沢への来訪経験のある4年生の協力も得る。 ※活動は、学生の授業と重ならない日時で実施する。	2023年7月～ 2026年3月	ゼミ・授業等 正規教育活動
	34 宮古島市防災活動、斜里町ウトロ地区防災活動	宮古島市については、小規模高齢者施設の津波避難等斜里町ウトロ地区区動については、まちづくりと連動した防災活動	宮古島市は7月、12月、ウトロ地区は8月、2月	教員のみ活動

活動地域としては、「文京区」が10件、「東京都内（文京区以外）」が4件、「新座市」が4件、「埼玉県（新座市以外）」での活動が7件、「その他」が9件であった。活動地域の分布を見てみると、大学キャンパスが位置する文京区および新座市での活動が多い傾向が読み取れるが、新座市以外の埼玉県内での活動も多く、また「その他」に含まれる地域も東北から沖縄に至るまで全国的に地域交流活動が展開していることが明らかとなった。

(2) 今年度の地域交流活動の特徴

今回の調査で尋ねた調査項目のうち、ここでは「地域交流活動の交流先担当部署・組織」「補助・助成の有無」「活動に関係する人数の規模」に関する回答結果を確認したい。

まず、「交流先担当部署・組織」（有効回答32件、複数回答可）については、「地方公共団体」（17件）が最も多く、続いて「企業」（6件）、「町会や自治会」（3件）、「NPO法」（3件）となっている。「その他」（6件）については、一般社団法人や観光協会、商工会など、それぞれ地域において特定のテーマで活動する団体が挙げられた。回答のあった32件のうち7件の活動では、NPO法人と小学校、地方公共団体と町会・自治会など、複数の組織とともに地域交流を行っているケースがあった（図1）。

地域交流活動の「補助・助成の有無」（有効回答29件）については、図2の通りの回答であった。補助・助成が「ある」と回答したのは4件（13%）、「なし」と回答したのは27件（87%）であり、ほとんどの活動が補助や助成がないなかで行われていることが分かった。

次に、「活動に関係する人数の規模」（有効回答31件）について確認すると、最も多いのは「21～50名」が8件（26%）であり、続いて「101名以上」が6件19%、「1～5名」が5件（16%）、「11～15名」および「51～100名」が4件（13%）となっている。全体の傾向をみると、約6割が「21名以上」の活動であり、「101名以上」の活動が全体の約2割を占めていることから、比較的規模の大きな交流活動が行われていることが分かった。

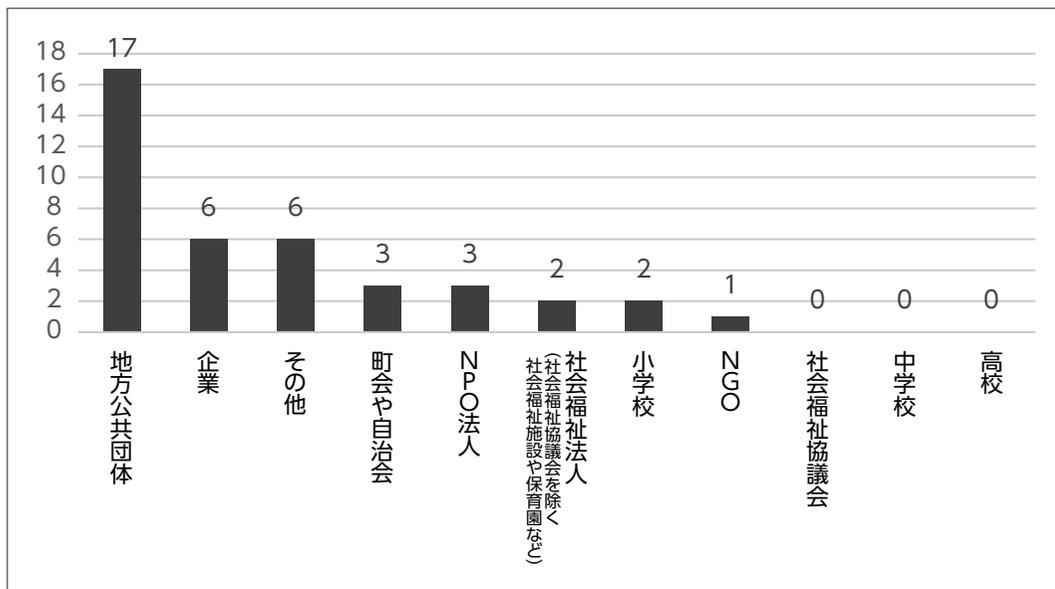


図1：地域交流活動の交流先担当部署・組織（複数回答可）

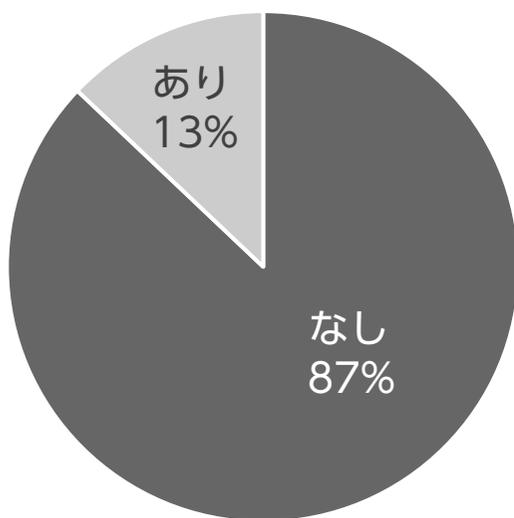


図2：補助・助成の有無

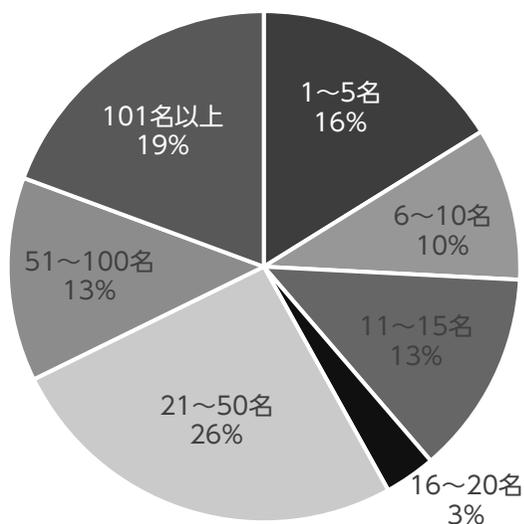


図3：活動に関係する人数の規模

(3) 本学地域交流活動の経年推移

今年度の特徴を検討するために、これまでの本学における地域交流活動数および活動地域の推移を確認しよう。地域交流センターでは2019年度以降毎年同様の調査を行ってきており、それらの調査結果を並べると表1および図4の通りとなる。新型コロナウイルス感染拡大があった2020年度および2021年度は活動数が減少し、2022年度には回復傾向がみられていたが（新垣2023）、今年度は昨年度よりも微減し、コロナ禍にあった2021年度とほぼ同数になっていることがわかった。

表1：2019年度～2023年度の地域交流活動の件数

	文京・東京	新座・埼玉	その他	総数
2019年度	33	22	28	83
2020年度	27	11	25	63
2021年度	18	5	10	33
2022年度	20	13	9	42
2023年度	14	11	9	34

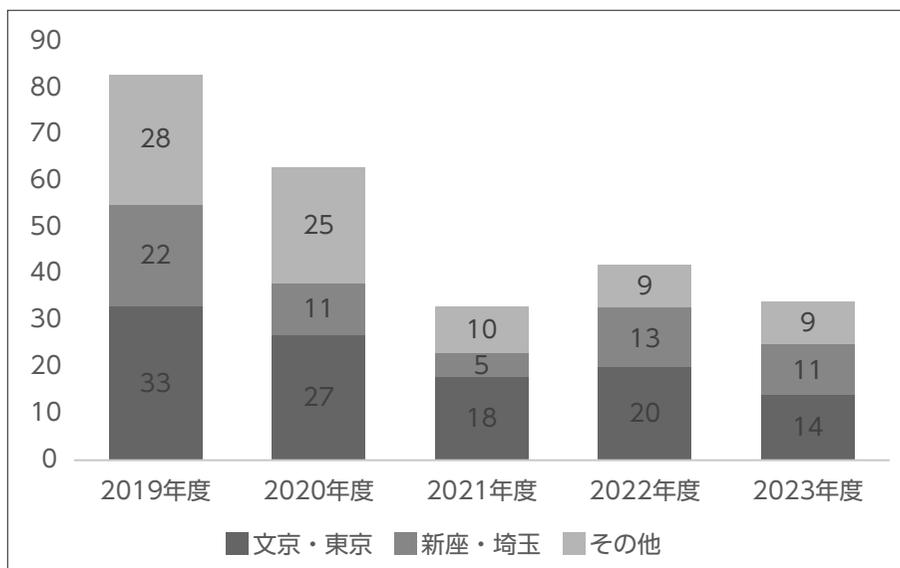


図4 2019年度～2023年度の地域交流活動の件数の推移

(出典) 金子2020：12、新垣2021：46-68、新垣2022：19、新垣2023：33

(4) 地域交流活動における課題と求められる支援

最後に、自由記述の「本地域交流活動を実施するにあたって直面している・想定される問題」に関する回答から今後さらに地域交流を深め広げていくための課題と求められる支援について確認しよう。

「本地域交流活動を実施するにあたって直面している・想定される問題」としては、「活動の継続性」に関する回答が多かった。具体的には、メンバーの入れ替え後に活動する学生が確保できるのか、教員中心となっている活動を継続できるのか、交流先が今後もフィールドワークを受け入れてくれるのかななどの懸念事項が挙げられた。また、学生および教員それぞれの「活動時間の確保」が難しいという声も複数あった。「大学業務との両立」の難しさや「教員への負担」の大きさに関する指摘もあった。さらに、活動に使う道具や展示物の「作成・保管スペース」を求める意見もあった。新型コロナウイルス感染症の影響については、数は少なかったが、今年度も活動開催の有無や出展方式が新型コロナウイルス感染拡大状況に左右され直前での対応に苦慮されたケースも一部あったようである。

4. まとめ

本稿では、「2023年度学内の地域交流関連活動に関わる調査」の結果をもとに、アフターコロナにおける本学の地域交流活動について検討してきた。この調査を開始した2019年以降の活動数の推移のなかで今年度の活動34件という数字だけをみれば、コロナ禍以降の地域交流活動はいまだ停滞しているように見える。また、今年度の活動34件についても、その約9割が補助や助成がないなかで行われており、厳しい状況が浮かび上がった。2019年度の同調査では、本学地域交流活動における「補助・助成等」に関する質問で、有効回答50件のうち22件が何等かの補助や助成を受けていると回答しており、全体の44%を占めていた（金子2020：13-14）。この時点でも経済的支援の必要性が指摘されていたが、今年度の状況はそれ以上に厳しい結果であり、活動を継続していくためにはますます経済的支援が求められる結果となった。

しかしながら、他方では、「活動に関係する人数の規模」で「101名以上」の活動が全体の約2割を占め、大人数で集まる交流活動が再開されていることも確認ができた。また、今回の調査では教員ベースの地域交流活動について確認しているが、第15章で紹介している地域交流センターが取りまとめた地域交流活動も含めて考えると、これまで本学と関係のあった町会・自治会との地域交流活動の多くが再開され、さらに新しい組織との連携も生まれていることから、実感としてはアフターコロナにおいて地域交流活動「再開期」と思える状況があったことも留意しておきたい。

地域交流活動は、思い立って直ぐに実現できるものではなく、通常はあらかじめ一定の準備期間を経て実現するものである。今年度は新型コロナウイルス感染症が第5類に移行し、社会・経済活動が再開された年ではあるが、いまだに新型コロナウイルス感染拡大状況による活動への影響も続いている状況もあり、コロナ禍で途絶えてしまった地域との連携がコロナ前の状況に回復するまでにはもう少し時間が必要なかもしれない。

アフターコロナにおいては、対面での活動が再開されるとともに、コロナ禍で普及したオンライン会議を駆使した交流も可能となり、ある意味で効率的に交流や連携ができる時代となった。今後さらに地域交流活動を活性化していくためには、コロナ禍を挟んで一度休止していた活動の再開と、コロナ禍を経て変化した生活様式や社会の在り方にも対応した新しい地域連携が求められるだろう。

参考文献

- ・新垣夢乃、2021、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状について—特に新型コロナウイルス感染症流行による影響に注目して—」『ゆかり』2、P.45-58.
- ・新垣夢乃、2022、「跡見学園女子大学の地域交流活動への新型コロナウイルス感染症流行の影響に関する分析」『ゆかり』3、P.18-21.
- ・新垣夢乃、2023、「跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について—コロナ禍3年目の現状分析」『ゆかり』3、P.29-36.
- ・金子祥之、2020、「跡見学園女子大学における地域交流活動の現状と課題—学内調査を通じた実態把握—」『ゆかり』1、P.10-17.

特集

アフターコロナにおける地域交流活動

跡見学園女子大学地域交流センター

今年度は、新型コロナウイルス感染症の流行が収束し、コロナ禍において休止状態にあった地域交流活動が各地で再開されるようになり、数年のブランクをへて活動が活性化した「地域交流活動の再開期」とも位置付けられる一年となった。

地域交流センターでは、2019年度より継続して跡見学園女子大学内における地域交流活動の実施状況に関するアンケート調査を実施してきている。2019年度の地域交流活動は83件、新型コロナウイルス感染症が拡大し始めた2020年度は63件、2021年度は33件、2022年度は38件と、コロナ禍で地域交流活動が激減した状況があった。昨年度から少し回復の兆しを見せていたが、今年度は新型コロナウイルス感染症が第5類に移行し、社会・経済活動が通常モードに戻り始め、必ずしも数には現れてはいないが休止状態であったさまざまな活動が再開した年であったといえよう。

本特集では、「地域交流活動再開期」において具体的にどのような地域交流活動が行われているのかをご覧ください。

「バナナうちで元気な子！～生活リズムを整えよう～」2023年度 食育活動

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミでは、昨年度から生活習慣病予防を目的に事業を展開している特定非営利活動法人 日本成人病予防協会と協働し、低学年の小学生を対象とする食育活動に取り組んでいる。同協会では平成22年度より「バナナうちで元気な子～生活リズムを整えよう～」と題し、文部科学省、「早寝早起き朝ごはん」全国協議会、公益社団法人日本PTA全国協議会後援のもと、全国の小学校で健康的な排便習慣を身につけてもらうための食育出張授業を行っている⁽¹⁾。石渡ゼミの3年生は、今年度も生活習慣病予防に貢献する次世代の講師を育成するための「大学生講師の育成プロジェクト」に参加し、都内複数の小学校で食育出張授業を行った。

2. 大学生食育講師の認定試験

食育講師になるためには、「健康管理検定2級（後援：文部科学省）」⁽²⁾に合格しなければならない。4月初めに3年生全員が日本成人病予防協会から検定のテキストを受け取り受験勉強に励んだ。7月末にはゼミ生8名全員が検定試験に合格した。

さらに、食育講師として教壇に立つために、実技講習を受講し、夏休み期間中は実技試験の練習に取り組んだ。その結果、9月末に実施された実技試験にも全員が合格し、8名は日本成人病予防協会の食育講師に認定された。

3. 東京都内5小学校ならびに和光市（TJUP教育連携事業）での食育授業の実施

ゼミ生は4名1グループとなり、小学校1～3年生を対象に協会から提供された台本や資料をベースとして45分授業を行った。今年度は10月～1月に5校の小学校で計450名以上の小学生に食育授業を実施した（図1）。下に、実施日と小学校名、受講者学年および人数のリストを付す。（本稿末尾にリスト有※）また、2月には、和光市の3公民館とTJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）の共催による教育連携事業として、小学校低学年の生徒とその保護者（計40名）を対象に、学生による体験型食育授業（お子様向け）+石渡による食育授業（保護者向け）という二部構成で食育授業を行った。

4. おわりに

今年度は昨年度に比べ、100名以上多くの小学生に食育出張授業を実施することができた。受講者



図1：小学校での食育授業の様子

は1年生が多いため、45分間生徒が飽きないような授業をすることに力を注いだ。そのために、毎回の授業を録画し、その動画を再生して振り返りを行った上で、改善点を見つけ、次の授業に活かす工夫をした。それにより、最初の授業に比べ後半の授業は受講している生徒の興味を引くことができるようになり、授業を最後まで集中して聞いてもらえるようになった。学生は、受講する生徒が自身の写し鏡であることを実感したであろう。

参考文献

- (1) 特定非営利活動法人 日本成人病予防協会 食育活動①「バナナうんちで元気な子!」 <http://www.japa.org/education/report01/> (2024/1/14)
- (2) 健康管理検定 <http://kentei.healthcare> (2024/1/14)

※〈食育出張授業実施校〉

10月14日	葛飾区立東金町小学校2年生	149名
10月17日	世田谷区立高井戸第三小学校1年生	92名
11月2日	足立区立洲江小学校1年生	69名
11月9日	目黒区立下目黒小学校1年生	86名
1月16日	文京区立大塚小学校3年生	60名

文京ハッピーベジタブルフェスタ 2023への出展

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミでは文京区が主催する「ハッピーベジタブルフェスタ」に2013年から出展を続け、今年で10年目となった。これまで3年間、コロナ禍によりオンライン開催となっていたこのイベントも、ようやく今年から以前のような対面開催に戻り、9月13日（水）に文京シビックセンターで「ハッピーベジタブルフェスタ2023」が行われた。ゼミからは3年生がポスター出展し、多くの来場者に自分たちの研究成果を披露することができた。

2. 今年度の出展テーマ

今年の本イベントテーマは「和食の魅力、おいしさ再発見!」であった。3年生は現在の日本人の食事内容や食生活の問題点について調査した上で、夏野菜に注目し、オクラとモロヘイヤを取り上げて「ねばねば野菜で夏を乗り切ろう」という出展テーマを設定した(図1)。

これら野菜の特徴であるねばねば成分の健康効果や含まれる栄養素に関する情報をポスターにまとめて展示するだけでなく、手軽に美味しく食べてもらうため、オクラとモロヘイヤを使った料理を研究し、レシピをブックレットにして会場で配布した(図2)。お子様向けにはクイズを用意して、挑戦者には野菜シールをプレゼントするなど、さまざまな年代の来場者の興味を引くための方策を講じた。

3. イベント出展の成果

当日、石渡ゼミのブースに立ち寄ってくださった来場者は約100名で、イベント来場者の半数以上が学生の説明を聞いたことになる(図3)。さらに、94冊配布したブックレットに対し



図1：展示ポスター



図2：配布用ブックレット

「作ったことのないレシピがたくさん載っているので、ぜひ、これらのメニューを作ってみたい」との声を複数いただき、来場者にオクラとモロヘイヤの新たな食べ方を提供することで、区民の野菜摂取量を向上させる一助とすることができた。



図3

4. おわりに

以前であれば、前年に対面のイベントを経験した4年生がその様子や展示のポイントなどを3年生にアドバイスしてくれていたが、コロナ禍の3年間はオンライン開催だったため、先輩から後輩への知恵の伝達がなされず、今年の3年生はリスタートとなった。しかし、事前に画像資料を使って、以前の対面イベントについて説明したことで、ある程度のイメージを持って活動できたのではないだろうか。

3年生にとって、このハッピーベジタブルフェスタは、自分たちの考えを学外の人へ伝える初めてのイベントである。展示物の作成だけでなく、文京区担当者とのやり取りや当日の来場者への対応など、学生が社会性、チームワーク、コミュニケーションスキルを身に着けることができるこの機会を、今後実践教育に活かしていきたい。

未来の健康を作る食育プロジェクト2023

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミ4年生は、2022年度から、小学生の食生活の改善を目指したオリジナルな食育出張授業に取り組んでいる。昨年度は家庭科の授業が開始する小学校5年生を対象に、和食の中心食材である「ま（豆類）ご（ごま）わ（わかめ等の海藻類）や（野菜）さ（魚介類）し（しいたけ等のきのこ類）い（いも類）」をテーマとして、和食を軸とした食習慣の大切さを伝える食育授業を文京区内の小学校で実施した。今年度は同じ学年の小学生を対象に、子どもたちとのコミュニケーションに力点を置いた「主食・主菜・副菜の揃った朝食を摂ること」を目的とする食育授業を展開した。

令和4年に農林水産省が実施した「食育に関する意識調査」によると、主食・主菜・副菜の揃った食事を1日2回以上ほぼ毎日食べていると回答した人の割合は、平成31年と比べ約20%減少しており、主食・主菜・副菜の揃った食事を摂ることを習慣にしている人は減少傾向にあることがわかった⁽¹⁾。また、農林水産省は令和元年に「若い世代における子どもの頃の食生活と現在の朝食摂取との関連調査」を実施し、20～30歳代の成人に未成年の頃の食生活を振り返ってもらったところ、未成年期に規則正しく食事を3食摂っていた人は、成人しても「朝食をほとんど毎日食べる」と回答した⁽²⁾。

以上のことから、未来の健康につながる食習慣を小学生の頃から身につけるために、今年度の食育出張授業のテーマとしては「主食・主菜・副菜の揃った朝食」を提案することとした。

2. 小学校での食育出張授業の実践

今年度は、子どもたちが生涯にわたって心も体も健康に過ごせるようバランスの良い朝食を摂ることの大切さを理解し、主食・主菜・副菜の揃った朝食を摂るという行動変容につながるような授業を目指した。

(1) 主食・主菜・副菜の揃った朝食をテーマとした食育出張授業の進め方

ご協力いただく小学校には事前に授業指導案を提示し、内容に問題がないか確認を取った。その後、当該教室で食育授業のリハーサルを行って本番の授業に臨んだ（図1）。

- 7月上旬 食育授業の企画立案
- 7月中旬 授業用資料「主食・主菜・副菜の揃った朝食」のチェックリスト、配布用冊子の作成
- 8、9月 指導案の作成と授業の練習、小学校へ授業内容の確認
- 10月19日 小学校での出張授業（5年生2クラス）

(2) アンケートによる現状調査

授業を受講する小学生の食生活を把握するために、授業テーマに関する事前アンケートを9月上旬



図1：小学校での食育需要の様子

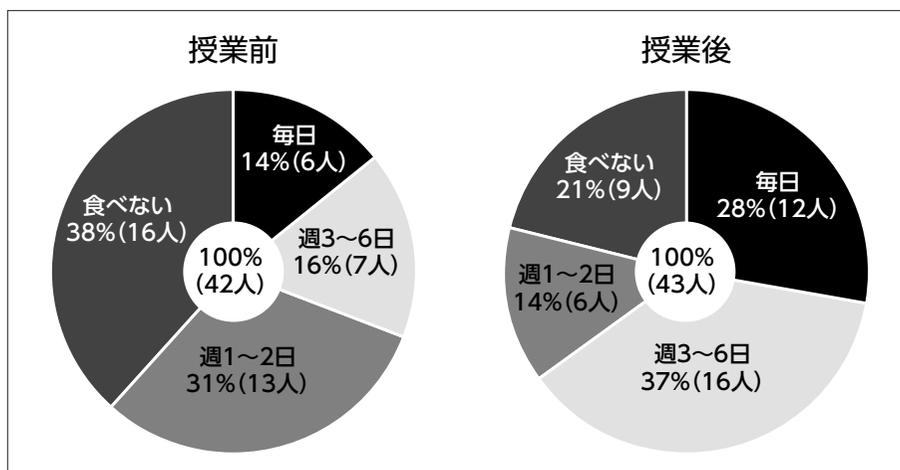


図2 主食・主菜・副菜が揃った朝食の摂取頻度

に実施し、その結果を食育出張授業と配布資料に活用した。また、調査結果はご協力いただいた小学校にも共有した。

(3) 食育出張授業の効果測定

授業前に実施したアンケート調査を授業後にも実施し、主食・主菜・副菜の揃った朝食を週に何日摂ったか調べ、授業の効果を測定した。その結果、主食・主菜・副菜の揃った朝食を1週間毎日食べている生徒は、授業前6人→授業後12人と2倍になった(図2)。また週に3～6日食べている生徒も授業後は2倍以上に増加した。このことから、本授業を受講したことで、半数以上の生徒が主食・主菜・副菜の揃った朝食を摂る機会が増えたことがわかった。一方で、授業後も全体の21%が主食・主菜・副菜の揃った朝食を1週間に1日も摂ることができていないことが課題として挙げられた。

3. おわりに

本プロジェクトは、食育授業の指導案作りや小学校への申入れから授業実施まで、半年以上かけて学生が主体的に取組んだことで成功を収めた。この活動を通して学生が気付いた最も重要なポイントは、目標を達成するための真の課題を抽出することであった。課題とは、目指す目標と現状のギャッ

プであることから、現状がどのようなになっているかしっかり把握した上で、目指す姿とのギャップを探さなければならない。毎年、食育プロジェクトの目的・目標を決める際には、事前に、対象となる日本人の食生活の現状について調査を行い、学生たちが的確な課題を抽出することができるよう心掛けている。このプロジェクト活動を通して、課題を解決する能力だけでなく、自ら課題を見つけ出す能力も身につけてくれることを望んでいる。

参考文献

- (1) 農林水産省「食育に関する意識調査報告書(令和5年3月)」
<https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/ishiki.html> (2024-01-14).
- (2) 農林水産省「令和元年度 食育白書」第1部 食育推進施策をめぐる状況【特集】若い世代を中心とした食育の推進
https://www.maff.go.jp/j/syokuiku/wpaper/r1/r1_h/book/part1/chap1/index.html (2024-01-14).

食品スーパーマーケットとの産学連携による商品開発プロジェクト（第1弾）

生活環境マネジメント学科 石渡尚子

1. はじめに

石渡ゼミでは、2020年度から株式会社エムアイフーズスタイルが展開する食品スーパーマーケットのクイーンズ伊勢丹にご協力を仰ぎ、店舗内で消費者に対する食育活動を3年間行ってきた。この実績が評価され、同社から産学連携による商品開発の依頼を受け、半年間をかけて市場調査から商品企画、試作商品の改良を繰り返し、2023年10月に3点の惣菜を上市することができた。また、商品企画だけでなく販売促進のためのプロモーション活動にも従事した。

ゼミ生はこのプロジェクトを通じて、自分たちが目的とする消費者の食育とビジネスとして売れる商品の開発を両立することの困難さを実感するとともに、安全で安心な商品を消費者の手元へ届けるためには、これほど多くの目に見えない工程を経なければならないことを学んだ。

2. 商品開発にかかわる企業側からの課題提示

食品スーパーのクイーンズ伊勢丹店舗にて素材の栄養価に特化した販促活動をお客さま向けに実施している（株）エムアイフーズスタイルと「食育」を軸に企業や団体と様々な活動を行っている石渡ゼミの親和性は高い。そこで、企業側からは学生の経験とマーケティングをベースとした様々なアイデアを活かし、お客さまの声に応える商品を展開したいというご要望をいただき、今回の産学連携による商品開発プロジェクトが始動した。開始当初に企業から提示された実施条件やKGI（Key Goal Indicator）/KPI（Key Performance Indicator）は以下のとおりである。

【条件／要件】

- ・持続可能な施策にすること。一過性にせず、お客さまの日常にフィットすること。
- ・幅広いお客さまに共感を得ること多くの世代に興味を頂けること。
- ・商売に繋げ、企業に利益をもたらすこと。

【テーマ】「健康」

お客さまからの要望が多いトピックスだが、販売価格・利益・満足度を加味すると製品化しにくい。お客さまの関心度は年々増加しており、他社と差別化するためにトライしたい。

【学生に期待する行動】

- ①分析：既存商品（商品モニター）・当社（マーケティング）・競合他社（マーケティング）
- ②提案：商品企画・販促施策
- ③実施：店舗での製造補助・店頭販売

KGI：重要目標達成指標

- ・お客さまの声に応え、顧客満足度がアップ
- ・他者（学生）から新しい発想や気づきを得る事
- ・惣菜の付加価値の創造（SDGs）

KPI：重要業績評価指標

実施期間：1週間 2023年秋

販促展開店舗：笹塚店・仙川店・小石川店

指 標：カテゴリ売上・買上点数・単品売上・
レシートアンケート etc

数 値：現時点では決定していない

3. 商品開発の進め方

(1) 目的・ゴールの確認と設定

ゼミとして商品開発に取り組むにあたり定めた目的は「お客さまの未来の健康を支える食育につながる商品開発を行う」ことで、お客さまには食生活の改善、連携企業には売上、学生には社会人スキルの向上につながる活動とすることを前提とした。一方、ゴールは（株）エムアイフードスタイルの「お客様の日々の生活に『ささやかな感動と喜び』を届ける」というミッションの実現につながるよう「お客様が食卓で笑顔になる商品」をゴールとした。

(2) 商品コンセプト・企画構想

まずは、市場の状況を知るため、食品スーパーマーケット業界の置かれた環境について学ぶとともに、クイーンズ伊勢丹3店舗に加え、競合他社3社の店舗で現場調査を実施した上で、他社と差別化できる、新商品を企画した。

学生は、今回の商品コンセプトを「日々の主菜に+1サイドディッシュ」と定めた。これは、日々の献立を考えるのが負担で、食事が単品メニューになりがちな家族の健康面について不安のある「仕事や子育てで忙しい30代の女性」をメインターゲットとしたためである。主菜1品は作る事ができても、野菜をたくさん使った副菜まで手の回らない働く女性に、彩り豊かな野菜を多く使用した副菜となり得る惣菜を提供できることが本商品のメリットとなる。

(3) 計画策定

今年度の商品開発は図1のスケジュールに従って実施した。

(4) 開発・販売準備

商品化のステップに進む前に、学生は自分たちが企画した商品を（株）エムアイフードスタイルの社長をはじめ役員、担当部署の社員の前でプレゼンテーションし、承認を得た。その後、工場での試作と学生による試食を繰り返し、3点の惣菜商品が完成した（図2）。

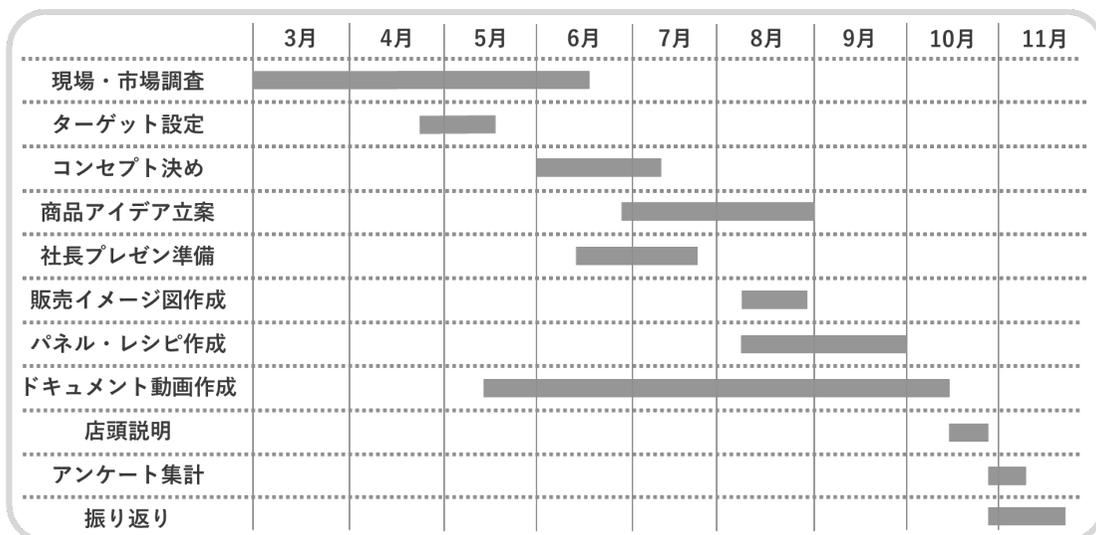


図1 クイーンズ伊勢丹との産学連携による商品開発スケジュール



図2 学生の開発した2023年秋冬に販売した惣菜3品

4. 販売促進のためのプロモーションと販売実績

お客様に本プロジェクトのコンセプトを伝えるため、販促パネル、商品に貼付するシール、サイネージ動画、および商品を使ったアレンジレシピを作成した。また、販売開始から6日間はクイーンズ伊勢丹の店頭で学生が立ち、直接お客様に自分たちが開発した商品の紹介を行った(図3)。

その結果、学生考案の商品は通常の冷惣菜(冷蔵ケースで販売する惣菜)の5~8倍の売り上げを記録した。

5. おわりに

今回、ゼミ初の取組みとして(株)エムアイフードスタイルとの産学連携による商品開発を行った。このプロジェクトに携わった4年生は、一から自分たちが考えた商品が店頭に並び、お客さまに購入していただけることがこれほどに嬉しく、充実感があることを実感した。企業の担当者や社長からは「学生ならではの発想でお客様のニーズに応えた商品が好評だったので、今後も引き続き連携したい」との



図3 店舗でのプロモーションの様子

お声をいただいた。

一方、学生たちは反省として「『お客様に何を一番に伝えたいのか』という軸を一貫して持つことができなかった」点と自分たちの開発商品に対する反応を定性的に分析するために必要な「お客様からのアンケートやヒアリングの回答数が少なかった」点を挙げた。今後このプロジェクトを引き継ぐ3年生は、今回の反省点を活かし、食品スーパーマーケットとの連携による商品開発を通して、消費者の未来の健康を支える食育活動に励んでくれることを期待している。

「トラベルライティングアワード新座賞」2022の結果報告と2023の活動状況 —2024に向けての検討課題—

観光コミュニティ学部観光デザイン学科 臺 純子

1. 「トラベルライティングアワード新座賞」2022の結果報告

ゆかりNO.4 (2023年3月発行) の「トラベルライティングアワード新座賞への学生参加状況と今後」では、第6回トラベルライティングアワード新座賞 (令和4年度) の結果を紹介していなかったが、新座市産業観光協会のホームページ (<https://www.niiza.net/twa/>) に300を超える作品の中から選ばれた最優秀賞1作品、優秀賞2作品、新座賞7作品が紹介されている。しかし2022年度は筆者が担当した基礎ゼミ生が極端に少なく、参加を任意としたこともあり、最終的に1作品しか応募できず、結果として入賞には至らなかった。

2. 「トラベルライティングアワード新座賞」2023への参加状況

昨年度の反省を活かして、2023年度の基礎ゼミ (観光) では、原則全員参加とし、学生運営委員も2名指名した。しかし学生運営委員のうち、1名が都合により継続できなくなり、夏休み以降に行われた第一次選考作業に参加した本学の学生運営委員は1名であった。

基礎ゼミの学外実習 (インターンシップ) が、今年度から本格的に実施できるようになったこともあり、学生の希望が多かったホテル業界での学外実習先を、夏休み前から探し始めたが、既知のホテル関係者のいない筆者が、すべてを手配することはできず、学生自身がいわゆるインターンシップサイトで応募し、採用されたら、学外実習 (インターンシップ) として受け入れてもらえるよう依頼するという手順を進めざるを得なかった。そのため全員のインターンシップ先が決まるまでに相当な時間がかかり、またいくつかのインターンシップ先にあいさつ回りをするなど、正直なところ、トラベルライティングアワード新座賞の作品応募指導は後回しになってしまった。

また当初、ゼミとして「アトムが案内! “すぐそこ新座発見ウォーキングコース”」(11月開催) を、ボランティアガイドさんと一緒に歩くというプログラムを8月18日 (金) に実施することにしていたが、この時期には、まだインターンシップ先にいたり、車の免許取得合宿に参加していたりなどで、実際に参加できたのは、新座市商工会でインターンシップを行っていた2名と都内のホテルでのインターンシップをすでに終了していた1名、計3名となった。新座駅を出発し、2時間程度かけて平林寺近くまで歩いたが、あまりの暑さに、ゼミ教員が熱中症状になり、最後まで歩きとおすことができず、新座市観光ボランティアガイド協会の方たちにも、また学生にも迷惑をかけてしまい、申し訳なかった。

このプログラムに参加できなかった学生にも、作品応募を促したところ、8作品が集まり、新座市シティプロモーション課に提出した。原則として、新座市内にある3大学、立教大学、十文字学園女子大学、本学から10作品ずつ30作品を集め、学生運営委員が10作品に絞り込むことになっているが、今年度、十文字学園女子大学は作品を応募できず、本学も8作品しか提出できなかったため、ほ

とんどが立教大学生の作品になってしまっている。しかし11作品⁽¹⁾に絞り込む作業に加わった当該学生は、新座のいろいろな所が紹介されていたほか、書き方や視点もさまざまな作品を読むのが楽しかった、と感想を述べていた。

3. 「トラベルライティングアワード新座賞」参加継続のために

学生運営委員による選考で絞り込まれた11作品は新座賞が確定しており、今年は本学から3作品が受賞した。今回応募した本学の8作品は、それぞれに良さがあるが、受賞した3作品は、新座市には、あんなところもこんなところもありますよ、という紹介スタイルではなく、新座の景色や空間の中にいる自分をスケッチしているような作品になっており、新座市産業観光協会のホームページに掲載されたら、ぜひ読んでみていただきたい。

11作品の中からは、すでに最優秀賞、優秀賞が選ばれているが、新座市シティプロモーション課から今年度は、しばらく休止していた表彰式を新座市役所で行うとの案内があったこともあり、本稿での公表は控えさせていただく。コロナ禍で中断していた表彰式の運営（受付・司会）を学生運営委員に依頼する（任意）という連絡も来ており、学生運営委員の業務が全面的に再開されることになった。

次年度は、跡見学園女子大学が学生運営委員幹事校になる予定なので、最低でも3名程度の学生運営委員を指名する必要があるだろう。トラベルライティングアワード新座賞作品応募のための新座市内歩きのプログラムは、暑さを避けるため春学期授業期間中に前倒しすることや、インターンシップ先への受け入れ依頼を早くから開始するなど、学生の作品応募を支援しながら、学生運営委員がしっかり活動できる体制やスケジュール調整などにも取り組んでいきたい。

本企画は、新座市のプロモーションを行うためというだけでなく、授業などでの課題レポートとは異なるタイプの文章を書くことで表現の豊かさが広がり、学生自身が自分を客観視する機会にもなることから、ゆかりNO.4でも言及したように、将来的にも継続的に参加できるような方法や仕組みの構築が求められるプロジェクトといえるだろう。

補注

(1) 学生運営委員による選考では10作品を選ぶことになっているが、新座市シティプロモーション課からは今年度は同点作品があったため、11作品になったとの説明があった。

「地域振興事業を学ぶインターンシップ」 —新座市商工会での学外実習 成果報告—

観光コミュニティ学部観光デザイン学科 臺 純子

1. 新座市商工会 インターンシップとしての引継ぎと実施に向けて

新座市商工会のホームページによると、手塚治虫氏は、晩年、新座市にスタジオを置き、新座市の市民まつりのポスターを手掛けたほか、物語の中で誕生した2003年4月7日に、鉄腕アトムが新座市の特別住民として登録されるなど、新座市との縁が深い。特別住民となった鉄腕アトムは、新座市のさまざまなイベントや場面で活躍しているが、なかでも「アトムが案内! “すぐそこ新座”発見ウォーキング」は、アトムの名前を冠したイベントで、コロナ禍中は休止を余儀なくされたものの、2023年11月には、第16回が実施された。

このイベントには、立教大学、十文字学園女子大学、跡見学園女子大学の学生がボランティアとして参加してきていたが、2022年度に、このプロジェクトを引き継いだ本学科の小長谷悠紀先生が、新座市商工会に、インターンシップとしての受け入れを依頼し、さらに2023年度に引き継いだ筆者が、基礎ゼミナール（観光）のインターンシップとして実施する運びとなった。ゼミ内で参加希望者を募ったところ、入学前に、アトムグッズを購入するために新座市商工会を訪れたことがある学生と地域振興や観光まちづくりに興味があるが、どのような職業を選べばよいのか体験したい、という学生、計2名が応募した。

ウォーキングイベント時の手伝いだけでは、イベントの企画・準備・実施といった一連の業務を理解することはできない。今回のインターンシップでは、そもそも商工会とはどのような組織なのか、なぜ商工会が企業を支援し、地域振興に力を入れることができるのかを理解できるよう、さまざまな事業やイベント、勉強会などに参加・体験できるプログラムを計画していただくことができた。主な概要は、表1の通りである。

表1：新座市商工会でのインターンシップ プログラム

月	日	曜日	業務概要
8月	18日	金	新座ウォーキングコース 実地見学
	20日	日	青年会 フードドライブ勉強会
	22日	火	商工会の業務内容説明と事務作業
	29日	火	ウォーキングコースの路面ステッカー調査
9月	23日	土	にいざっこナイトフェス 動画撮影
10月	8日	土	新座快適みらい都市市民まつり商工祭 会場アナウンス
	9日	日	
11月	12日	月	アトムが案内! “すぐそこ新座”発見ウォーキング 新座駅受付

出典：学外実習日報より、筆者作成



写真：左から第14回、第15回イベントパンフレット、受付の様子、アトムのイラストジャンパーを着たゼミ生

2. 商工会と他機関との連携によるイベント実施 (写真)

第16回「アトムが案内! “すぐそこ新座”発見ウォーキング」に向けて、「新座市商工会観光にいざ地域振興事業委員会」が設置され、新座市商工会だけでなく、新座市異業種交流会、新座市観光ボランティアガイド協会、新座市市民生活部産業振興課、総合政策部兼シティプロモーション課、新座市社会福祉協議会、新座市内3大学教員、合わせて14名が、委員として活動することになった。7月20日、9月21日、10月26日の3回の委員会が開催され、第3回委員会では、コース通路、イベント会場設営、学生の配置などの最終確認が行われた。

当日は、かなり冷え込んだが、学生が提出した事後レポートによると、受け付け開始前から多くの家族連れやご年配のご夫婦などが並び、新座市商工会からは、「新座駅発スタンプウォーク」参加者518名⁽¹⁾、オプションの「にんじんうどん」、鉄腕アトム・ゾウキリングズ⁽²⁾、地場産野菜が完売したとの報告があった。

3. 商工会でのインターンシップ実施の意義と成果

観光まちづくりや地域振興に関心を持つ学生は多いが、どのような企業・団体に就職すれば、そうした仕事に就けるのか、についての情報は非常に限られている。商工会は1960年に制定された「商工会法」(3)に基づいて運営される地域経済団体で、地域で営業する商工業者の自主的な活動によって支えられている。そして、商工業者の経営改善のほか、イベントなどを通じて地域を盛り上げる役割ももっている。商工会事務局は、準公務員的な仕事を行いながら、商工業者だけでなく、さまざまなセクターと協力しながら、地域振興に取り組んでいる。今回、新座市商工会でのインターンシップに参加した2名の学生は、路面ステッカーの状態を一つ一つ確認して貼り替えるといった地道な仕事に驚き、また各イベントの参加者が楽しそうにしている様子から、「地方公務員だけでなく、地元の商工会も調べてみようと思う」とか、「テーマパークなど狭い範囲しか考えていなかったが、イベント運営側の仕事に就きたい」というように、将来の仕事をイメージする良い機会となったようである。

補注

- (1) 受付時に保険費用として200円を負担した参加者数。
- (2) ゾウキリンは新座市のイメージキャラクター。新座キャンパス内でPR写真が撮影されたこともある。
- (3) 商工会法 <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=335AC0000000089>

文京区学生と創るアグリノベーション事業の取り組みについて

観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 篠崎健司

調査・研究者

観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科 篠崎ゼミナール

4年 秋谷香菜子 内山日菜 小嶋美優 原島優花 渡邊千理 和田乃英加

3年 今林奈津美 岡野弥生 佐野桃羽 松下愛

篠崎健司 (担当教員)

「文京区学生と創るアグリノベーション事業」は、岩手県盛岡市が企画した事業であり、令和3年度から5年度の3か年をかけて、取り組んでいるものである。文京区内にキャンパスを置く本学のほか、拓殖大学、東京大学、東洋大学の4校に対して、盛岡市より1校ごとに農業振興に関するテーマを設定され、本学は、「もりおか短角牛」をテーマとする農業振興方策について、調査研究を行ってきた。本稿の執筆時点では、まだ令和5年度の事業が完了していないが、令和6年2月に3か年の最終報告会を行って完了となる予定である。

1. 事業概要

(1) テーマ

本学に与えられたテーマは、「もりおか短角牛」である。首都圏に住む女子大学生の視点から見たその魅力を探り、それを消費者に伝える販売戦略やまたブランド化促進などの振興戦略とともに、生産者との交流連携を通じて生産者とともに、戦略から検討された具体的な方策を実施し、方策の有効性や改善点を検討したものである。特に振興策の単発実施で終わることなく、将来に継続される方策について検討を行ってきた。

(2) 事業の全体スケジュール

1) 1年度目 (令和3年度)

【テーマ・取り組み】

・生産・流通構造調査、主に首都圏を中心とする市場動向調査、生産地視察等による生産現場の実態調査

【調査の視点】

・もりおか短角牛独自の生産・流通上の問題・課題、首都圏消費者が牛肉に求める期待

2) 2年度目 (令和4年度)

【テーマ・取り組み】

・生産者・事業者等との連携による課題解決に向けた取り組み方策

【取り組みの視点】

- ・消費者ニーズを踏まえた、他の黒毛和種とは異なる「もりおか短角牛」の差別化、PR戦略の立案（試行）
- ・研究成果の創出に向けた取り組みの推進（モニターツアー、販促イベントの実施）

3) 3年度目（令和5年度）

【テーマ・取り組み】

- ・飲食事業者等と連携し、新たな商品開発及びPR活動の試行による実現可能方策の検討

2. 事業最終年度となる令和5年度の取り組み

(1) 令和4年度の取り組みからの改善点

令和4年度は、牧野を訪ねるモニターツアーと、首都圏での販売促進に向けて、東京都中央区東銀座にある「いわて銀河プラザ」にてイベントを実施した。

モニターツアーについては、地元大学生等を対象に参加費用については本事業から助成を行い一人2,000円とした（旅行会社の試算では往復のバス代のみで最低5,000円程度）。

いわて銀河プラザ（東銀座）で開催したイベントでは、実際には「もりおか短角牛」を委託販売とする予定であったが、事業者との調整がつかず、かつ仕入販売とした場合の経費の確保ができなかったことから、実際の「もりおか短角牛」肉の販売は行えなかった。

こうしたことから、モニターツアーについては、事業の継続性を確保するため、参加者から少なくとも実費を確保できるツアー料金を設定することと、実際に「もりおか短角牛」を食べてもらえる企画とした。ツアー料金は15,000円とし、令和5年9月10日に盛岡市内から出発し、姫神実験牧場（牧野）で「もりおか短角牛」見学後、市内に戻り、「Neuf du Pape」にて「もりおか短角牛」のイタリアンフルコースを食べるツアーとして参加者8名で実施した。

また地元盛岡市民や観光客等にも食べてもらう機会を増やすイベントとして、地元レストランである「菜園マイクロブルワリー」にて9月2日～10日の2回の土日を含む9日間、「もりおか短角牛」フェアを開催し、もりおか短角牛のローストビーフと梨のカプレーゼ仕立てなど4メニュー、合計113品を提供し、完売した。

また、首都圏での販売企画として、本学の大学祭である紫祭にて、「もりおか短角牛」を使ったパンの販売を行う（パン製造：HoHoEMi）こととし、単価700円と設定、2日間で70個を販売した。

(2) 取り組みから見えた成果

1) モニターツアー

実際の参加者は「Neuf du Pape」のお客様から募集を行ったことから、比較的年配の方が多く、すでに食事に対する期待感・安心感もあったことから、結果、参加者の満足度は高かった（食事後のヒアリング等より）。牧野での企画については、どんなところで育てているのかを見て、自然豊かな環境でのびのびと飼育されているのが大きな魅力であるや、生産者の愛情を感じるなど高評価であった。比較的富裕層に限定される可能性は高いが、もともと高価な和牛であることからすると、いたずらに低価

格化を図ることよりも、こうした価格帯でサービスを提供することの意味は大きい。また成果の一つとして昨年度の本事業での取り組みを踏まえて、今年度から市の他のセクションでもツアー実施を行うなど、実際にツアー開催に結びついている。本義業におけるツアー継続は課題となっているが、生産者の期待も高いことから、なんらかの形を模索していきたいと考えている。

2) フェア

フェア実施後の感想も、消費者・飲食事業者側もともに良好であり、今後、継続した開催に前向きな評価を得ている。ただしフェアについては、「もりおか短角牛振興協議会」でも毎年開催しており、その意味では飲食事業者の抵抗感はなかったと思われる。事業の過程ではB級グルメのような統一したメニュー販売を提案したが、面白そうという事業者と、もともとシェフは同じものをつくるのは嫌いだという事業者もあり、今後の検討課題となった。

3) 新メニュー開発 (もりおか短角牛パン)

今回は盛岡市内の卸・小売業者から、パン製造事業者が牛肉を仕入れ製造し、販売のみ学生が行った。一般消費者価格よりは低廉に仕入れることができたが、やはり単価が高いことから、1個700円で、かなり小さめのパンとなってしまった。大学祭ということもあり、他の商品との価格差も気になることから、この価格でも相当押さえたものである。味的には好意的な評価が多かったが、量、ボリューム感では不評であったことは否めない。2,000円程度のバーガーも存在することから、高価格でもボリューム感の満足度も高い商品化の可能性は高い。成果の一つとしては、本事業を受け、盛岡市でも大手のパン製造事業者に打診をおこなうなど、継続かつ地元での取り組みに繋がっていることがあげられる。

もりおか短角牛モニターツアー
開催日 2023年9月10日 日曜日

15:00 盛岡駅集合
15:10 盛岡駅出発 (Neuf du Pape付近を經由、乗車可)
16:10 牧野到着・見学
17:00 牧野出発
18:00 Neuf du Pape 到着
20:00 Neuf du Pape にて解散

参加費：15,000円
参加人数：10名 (上限になり次第募集を終了します)
申し込み方法：Neuf du Pape スタッフにお声がけください

Neuf du Pape
スペシャルメニュー

- Stuzzuchini- 短角牛のコンソメジュレ
- Antipasto freddo- スモークをかけた短角牛レバーのカルパッチョとモモ肉のローストビーフ盛り合わせ
- Antipasto Caldo- 短角牛ポロネーゼのフォカッチャ・ディ・レッチョ
- Primi Piatto- 短角牛小腸のアツタビアータ
- Secondo Piatto- 短角牛のステーキ
- Dolce- 季節のジェラート

各料理に伊集のセレクトしたワインペアリングをご用意いたします

モニターツアーのチラシ

ふるさとの至宝
姫神の赤

9/2 ~ 9/10

もりおか短角牛フェア

赤身とビーレの相性を楽しむフェア限定のコラボメニュー!

業園マイクロブルワリー × 跡見学園女子大学
協力：盛岡市役所玉山総合事務所・産業振興課

もりおか短角牛のコーストプレートをご用意させていただきます

しほの短角牛のオリジナルステーキ

もりおか短角牛のステーキをご用意させていただきます

フェアのポスター

在日クルド人向け日本語教室での学生ボランティア実践

文学部コミュニケーション文化学科講師 斎藤敬太

1. はじめに

本稿は、2023年度に実施した在日クルド人向け日本語教室での学生ボランティア実践に関する報告である。

筆者はこれまで、地域日本語教育や多文化共生に関わる担当科目（他大学担当科目も含む）の履修者に、講義を聞くだけでなく、実感を通して考えることが可能となるような活動を行ってきた。朝鮮大学校での在日コリアンとの交流（斎藤2020）、街中の看板・ポスター類（言語景観）を撮影させて在日外国人の目線で問題点を考える課題（斎藤2022）、様々な国や地域の食を体験させたり、それに関する講演会を聞かせたりすることで異文化理解を考えさせる実践（斎藤2023）等、様々な観点で行っているが、その一つとして、2022年からは在日クルド人向け日本語教室でのボランティア希望者を募って引率している。

2. 在日クルド人とボランティア日本語教室

在日クルド人は、日本で約2000人が暮らしているとされる（片山2021）が、そのほとんどが埼玉県蕨市や川口市に集中している。彼らはトルコでの迫害や差別を理由に1990年代から来日し（片山2021）、その多くは難民申請を行っているが、これまでトルコから逃れたクルド人で難民認定を受けたのは2022年8月の1件のみである（埼玉新聞社2023）。

そのような在日クルド人を支援する団体が蕨市に存在するが、その一つが「在日クルド人と共にHEVAL」である。この団体が主催している在日クルド人向け日本語教室が埼玉県蕨市の「蕨市立文化ホール くるる」で毎週日曜日午前に開催されている。この日本語教室では、在日クルド人を主な対象として日本語をボランティアで教えているが、学習者のレベルは実に様々である。多くは日本語での会話は自然習得によりある程度できるものの、ひらがな・カタカナの読み書きができないというレベルの者であるが、日本語を母語としない者の日本語能力を測る「日本語能力試験」で2番目に高いレベルのN2を目指して対策問題に取り組んでいる学習者もいる。

この日本語教室は日本語を教える場所という意味合い以外に、在日クルド人の居場所を提供するサロンのような要素も強い。そのような性質のために、日本語教育について本格的に学んでいなくても、まずは在日クルド人と楽しみながら交流するということも可能であり、学生にとっては参加しやすいボランティア日本語教室である。そのような教室で気軽に日本語ボランティアを実践することが多文化共生を考えるきっかけになると判断し、筆者の担当科目の履修者に参加希望を募ることにした。

3. 実施概要

発表者は、2023年度は「コミュニケーション文化学研究入門B」「日本語コミュニケーション論」の履



図1：在日クルド人向け日本語教室およびバーベキューの様子

修者を中心に希望者を募って引率を計2回（7月9日および7月30日）行った。参加者は全員日本語ボランティア未経験者であった。担当者より簡単な説明やアドバイスを受けた後、各自ボランティア活動に参加した。在日クルド人1、2名に対して1～3名程度のボランティアが対応する形態が多かった（図1）。

なお、7月9日の回ではボランティア後に在日クルド人や他のボランティアとのバーベキューにも参加した。

4. 参加者の感想

以下に、参加者の感想を記す。明らかな誤字脱字や個人情報等の最低限の修正を除き原文をそのまま掲載する。

- ・今回このような機会がなければ、クルド語に触れることもなく、日本語を外国の方に教えることもなかったと思います。とても貴重な経験ができて楽しかったです。ありがとうございました。
- ・私は今回初めて他人に教える、という活動に参加しましたが、教室だとは思えないくらいフランクで、とてもリラックスしながら楽しんで活動ができました。私が教えた方はかなり日本語ができる方だったので、読んで発音する練習をしたけれど、日本語が全くできない人もいたので、そういった人にどう教えるかが課題だなと思いました。今回が四回目の参加の人がその人に教えていたので、まだ四回目なのにすごいなと思ったし、自分も伝わる日本語を教えられるようになりたいと思いました。
- ・バーベキューは、初めはどうしたらいいのか分からず、焼いてもらったお肉をただひたすら食べているだけでしたが、だんだんと打ち解けられるようになり、結局最後の最後まで残ってしまうほどには仲良くなれました。日本語の会話が問題なく行えたことも仲良くなれた要因でしたが、やはり先生がおっしゃっていたように、食を通すと仲が深まるんだと感じました。こういった環境で日本語を学べたらさらに楽しくなって良いだろうなと思います。あと、いつから日本にいるのかは分からないけれど、子どもたちが「とうがらし」のじゃんけんを知っていたのが驚きでした。ああいったローカルルールのあるじゃんけん（カレーライス然り）を問題なく行えているので、見ていた私たち学生は結構衝撃を受けました。今後とも継続的に活動していきたいと思います。
- ・実際に日本語教室の生徒さんに日本語を教える難しさを感じることができ、貴重な経験をすることができました。日本語を教える難しさもありましたが、とても楽しかったです。ありがとうございました。
- ・クルド人の皆さんが一生懸命日本語を習得しようと日本語で話す姿をみて言葉が全く違う国で一から

学ぼうと姿にとても驚きました。自分自身もこのようなボランティア活動に、参加することが初めてだったので、初めは難しいのかなと思いました。しかし、この活動をしている方はとてもフランクで友達のようにボランティアの方とクルドの方々が増強していました。日本に来て数週間という十代の人からお子さんのいる親世代の人まで幅広い人が日本語を学びに来ていると感じました。小学生や未就学児のクルドの子の多くは日本語を外で話している為なのかある程度の会話などが出来る子供が多く日本に慣れてきているのだろうと思いました。子供の中にも日本語能力試験を受験している子も多く日本語をもっと書き話せるようになりたいと思っている子がいるということも知りました。クルドの方というよりも難民に対して日本ではいろんなイメージを持っている方がいると思います。私は、今回のボランティアとバーベキューに参加をして、とてもフレンドリーで明るく日本で楽しく平和に暮らしたいと思い日本語を一生懸命学んでいる普通の人だと思います。実際に会ってみることで一番感じる事が出来ました。

- ・クルドの方とコミュニケーションが取れてとてもうれしかったです！ 質問なのですが30日の日もボランティアに参加したいのですがよろしいでしょうか？

以上から、日本語ボランティアに参加することで、日本語学習や日本語教育の難しさや楽しさ、そして在日クルド人と交流すること自体の楽しさや彼らに対する見方の再確認等、様々な点で気付きを与えることができたと考えられる。また、1回で終わらずに継続的に活動しようとする者もいた。

5. おわりに

ほとんどの参加者にはボランティア日本語教育や在日クルド人との交流においてプラスの効果があったと思われる。ただし、個人レベルでは一度きりで終わることが多いため、この影響をいかに継続的にすることができるかが今後の課題である。

付記

本稿は、2023年12月2日に開催された『韓国日本語教育学会第44回国際学術大会』（高麗大学校、大韓民国ソウル特別市）で行った口頭発表「在日クルド人向け日本語教室での学生ボランティア実践とその効果」から本学言及部分を抽出し、加筆修正を行ったものである。

参考文献

- ・片山奈緒美 (2021) 「多文化共生に向かう（動機付け）の研究—ウラビスタンにおける日本人支援者へのインタビュー調査から—」『国際日本研究』13、筑波大学人文社会科学研究所国際日本研究専攻
- ・埼玉新聞社 (2023) 「私の人生めちゃくちゃに…入管難民法改正「全員帰れと同義」クルド人ら川口で訴え 仮放免の窮状にも言及」2023年4月19日付 <https://www.saitama-np.co.jp/articles/23112/postDetail> (最終閲覧日：2024年1月8日)
- ・斎藤敬太 (2020) 「多文化共生社会へ向けた在日コリアンとの学生交流企画の試み」『国際関係学研究』46、津田塾大学全学研修紀要委員会
- ・斎藤敬太 (2022) 「言語景観を通じた多文化共生教育の実践」『異文化間教育学会第43回大会発表抄録』異文化間教育学会
- ・斎藤敬太 (2023) 「事例と実践から見る食を通じた異文化理解」『異文化間教育学会第44回大会発表抄録』異文化間教育学会

熱海における宿泊施設の需要創出のための課題発見： 大学生の感性を言葉で伝える

小関孝子

1. 熱海宿泊実習の概要

2023年度観光デザイン学科の基礎ゼミナール（2年ゼミ）の学外実習において、小関ゼミでは熱海をフィールドとした課題解決型の実習を行った。熱海実習を実施するにあたっては、熱海後楽園ホテルを運営する（株）東京ドーム・リゾートオペレーションズならびに、熱海温泉ホテル旅館協同組合青年部にご協力をいただいた。

実習は2年ゼミ生全員が2泊3日で熱海に宿泊し、その体験をふまえて宿泊需要創出のための改善策を熱海温泉ホテル旅館協同組合の方々に提案するという内容である。

2023年度の実習は、課題解決型の実習となるように3つの点にこだわった。1つ目は、2泊3日のうち1日目の旅程と宿泊施設を学生たちで選ぶことである。2つ目は、事前に（株）東京ドーム・リゾートオペレーションズの岩瀬敬之社長を講師としてお招きし、熱海市が抱えている観光課題についてご講義いただいたことである。そして3つ目は、2泊3日の最終日に現地にて熱海温泉ホテル旅館協同組合青年部の皆様とのグループワークを通じて意見交換の場を設けたことである。学生たちはこれらの経験を持ち帰り、自分たちの考察をパワーポイントにまとめ、約15分間のプレゼンテーション動画を作成した。全体の日程は次の通りとなった。

- | | |
|----------|---|
| 7月上旬 | 1泊目の宿泊地を選定し、ゼミ生全員で泊れる熱海市下多賀の貸しのコテージに決定。 |
| 7月21日 | （株）東京ドーム・リゾートオペレーションズ岩瀬社長のご講義を拝聴する。
⇒日帰り客が増加している一方で、宿泊に結びつかないという課題を知る。
⇒熱海市は今後宿泊税の導入が検討されているため、宿泊需要の創出は喫緊の課題。 |
| 9月12日 | 午前12時に熱海駅集合。※集合を確認後、教員は熱海市内で別行動。
熱海の商店街、海岸、来宮神社を観光後、宿泊場所へ移動。 |
| 9月13日 | 午後14時に熱海後楽園ホテル集合。
熱海ロープウェイ、展望台、日帰り温浴施設Fuua体験。
熱海後楽園ホテルにて葵の間にて夕食をとり、タワー館（和室）に宿泊。 |
| 9月14日 | 熱海後楽園ホテルにて朝食。
初島の観光資源を調査。バラエティー番組のロケの遭遇。
午後15時に熱海温泉ホテル旅館協同組合の方々との意見交換。17時解散。 |
| 9月20～22日 | 実習の成果を「熱海・宿泊客増加のための提案」としてパワーポイントにまとめる。 |
| 11月16日 | プレゼン動画を収録し、オンデマンドでお世話になった熱海の皆さまへご提案。 |

2. 熱海温泉ホテル旅館協同組合青年部との意見交換

3日目のグループワークでは、学生全員が一言ずつ熱海の感想を述べた後、3つのグループに分かれて意見交換を行った。熱海温泉ホテル旅館協同組合青年部からは9名の方にご参加いただき、担当教員（筆者）が進行役となった。学生たちが1日目の宿泊施設に選んだのは熱海市下多賀にある一棟貸しのコテージだったが、その施設を見つけるまでに使用したアプリ、検索ワードを説明すると、熱心な質問が寄せられた。熱海温泉ホテル旅館協同組合の参加者のなかには、この意見交換をきっかけにTikTokでの情報配信を始めた旅館もあるという報告を受けた。



写真1：意見交換の様子

アメニティについても活発な意見交換が行われた。ホテルや旅館を経営する立場からは、アメニティについて直接意見を聴くことができた貴重な機会となったようである。「このアメニティはなくても良いですか?」という質問は、お客様にはなかなかできないというのである。驚いたことに、実習に参加したゼミ生たちは、施設についているシャンプー、トリートメント、化粧品類は使用せず、持参したものの使っていた。ホテルや旅館のアメニティが自分に合うどうかわからないので使用しないというのである。その説明を聞くと、彼女たちの荷物が大きいことも納得できた。学生たちのコメントを熱心に記録していた経営者のひとは、「中高年女性からはアメニティに対して要求度が高いが、若い女性をターゲットにする時には思い切って削減することもできるというヒントを得た」という感想を述べていた。

3. 学生たちが感じた「熱海」

企画書をまとめる段階では、大学生ならではの言葉が飛び交った。学生たちの提案の骨子は、宿泊客増を目指すためには、まずは大学生にリピーターになってもらうことが大切であるという内容であった。大学生が将来の宿泊客候補だという発想である。しかしいまのままでは一度行ったら満足してしまい、熱海には「沼らない」というのである。「熱海って、雰囲気イケメンだね」「素材を活かしきれていない」。熱海温泉ホテル旅館協同組合の方々からは、率直な大学生の意見を聞きたいというリクエストをいただいていたので、これらの表現も企画書に盛り込んだ。結果は大変好評であった。

学生たちによると、熱海を垢抜けさせるのに必要なのは「引き算」であるというのが共通意見であった。熱海がもともと持っている海、山、海産物を活かして、都会の喧騒から離れてリラックスできる「リゾート地」として打ち出すほうが大学生のニーズをつかむことができるという提案にまとまった。学生にとって遊ぶための「観光地」は、浅草、江ノ島、横浜など、他にも十分にあり、差別化にならない

というのである。

たしかに、ゼミ生たちの熱海での行動は意外にも地味であった。若い世代に人気があるとされている「プリン」や「モンブラン」などのスイーツ店に並ぶこともなく、インスタ映えスポットとして注目されている「アカオフォレスト」に行きたいという声も出なかった。その一方で、2泊3日の間に彼女たちは3つの神社を参拝した。来宮神社、伊豆山神社、初島にある初木神社である。参加者9名のうち、2名が御朱印集めをしているということもわかった。若者は旅先で遊びたいはずという思い込みが、そもそも古い発想なのだと気づかされた。「わたしたちZ世代は疲れている」。この言葉にハッとした。都会生活のストレスはZ世代も同じなのである。学生たちの素直な提案は、経営者の方々にとても新鮮に映ったようである。



写真2：初島へむかうフェリーにて



写真3：企画中の学生たち

2. 「なかよし ひろば」における交流イベント

2-1. イベント開催までの準備

交流イベントは、2023年度のアカデミックインターンシップ課題として実施した。10日間の対面課題解決型インターンシップであり、赤松ゼミ2年生1名が三郷市みどり公園課の担当者の指導のもと、実習を行った。

実施に先立ち、学生は「なかよし ひろば」設立経緯の説明を受けたり、現地見学を行った。さらに、自分なりのイベント案（1回につき30分間、参加者が異なるので2回実施する）を作成してから、三郷市内の保育所と児童発達支援施設の支援者2名に対してインタビューを行い、それらの施設を利用している障害児の特性や日頃の遊び方、イベント案の有効性について尋ねた。その結果、当初予定していたプログラムのうち、全員でのかけっこは問題ないが、お絵かきコーナーで絵をかいいたり、砂場で山を作ったり、健常児と協力して創造するプログラムには、特性上参加が難しいということが明らかになった。

インタビュー結果を踏まえ、イベント内容を変更した。2回とも同じプログラムで運営する案を変更し、第1回は運営側から提供する遊びを中止し、30分間自由に遊ぶことにした。第2回は砂場での宝探しを行ったあと、ひろばを一周するかけっこを実施することにした。なお砂場に埋める宝は誤飲を防ぐために、野球ボール大のカラーボールとした。

2-2. 当日の様子

第1回のイベントは2023年10月16日に実施し、市内の保育所に通う4歳児19名と、市内の児童発達支援施設利用児11名が参加した。第2回は2023年10月23日に実施し、市内の保育所に通う5歳児19名と同保育所の障害児クラス利用児6名が参加した。いずれの回も子どもたちの引率者、三郷市役所みどり公園課の担当者、筆者及び筆者が指導するゼミの学生⁽³⁾が、子どもたち⁽⁴⁾の様子を見守り安全確保に努めた。またどのように遊んでいるかの観察も、引率者の許可を得て行った。いずれの回もトラブルなく終了した。

第1回、第2回共に、参加した子どもは障害の有無に関わらず、とても楽しそうに遊んでいた。自由に遊べる時間帯では、複数ある遊具の中でも、体を固定して乗ることが出来るブランコや、車いすのまま利用できる複合型遊具及び砂場に人気が集まっていた。障害児の引率者から「いつもより楽しそうにしている」「積極的に体を動かしている」というコメントを聞くことができた。一方、障害児と健常児が積極的にコミュニケーションをとって同じ遊具を使って一緒に遊ぶ様子は確認されなかった。障害児はブランコや複合遊具など自分が気に入った、あるいは特性上遊びやすい遊具でずっと遊んでいたりと、自由にひろば内を支援者と手をつないで走ったり歩いたりしていることが多かった。とは言え、ブランコに乗っている時に複合遊具やシーソーで健常児が遊んでいる様子を見て興味を持ち、ブランコから降りた後にそれらの遊具で遊んでみたり、宝探しをやっている時にボールを掘らずとも近くで砂を触ったり、という様子が観察された。また健常児が障害児に順番を譲ったり、一緒に遊ぼうと声を出して誘ったりする場面もあった。

2-3. 実施後の振り返り

イベント終了直後及び、インターンシップの総括報告会にて、市役所の方々と学生及び筆者とで振り返りを行った。そして「交流」という言葉の意味を、自分たちが持っていたイメージ以上に広げていく必要があることを確認し合った。一般に交流というと、同じ時間と空間を共有し参加者が活発なコミュニケーションを取ることがイメージされる。三郷市としても障害児と健常児との間でそのような交流を生み出す場としてインクルーシブ公園を活用していきたいという意図を持っていた。

しかし今回のイベントを通して、障害児を対象にする場合には、より柔軟に想定する必要があることを実感した。イベント中に観察されたように、同じ遊びはしていないが同じ場にいること、遊んでいる様子を見て興味を持ち近づいていくこと、こうしたことも、両者の交流であるにとらえなければ、周囲がイメージするパターンにあてはめて子ども自身が楽しいと思う機会を奪ってしまう。その子自身が楽しいと思える遊びができる場所を提供することによって、自然発生的な交流を促し、それらの積み重ねでより密度の濃い交流へと導いていく、中長期的目線で「なかよしひろば」の活用方法を検討していくが重要であることを、共通認識とした。

3. おわりに

イベント後に引率者に回答を依頼したアンケートでは、概ねこのイベントはプラスに評価されており、学生の子どもたちへの接し方も、丁寧で明るく安心できたと好意的に受け止めていただくことができた。しかし、一部には障害特性上の行動を健常児や健常者に誤解され、クレームとなることを非常に恐れている支援者もあり、障害児同士で遊んだほうがトラブルがないとの意見が寄せられた。運営側としてはそうしたトラブルをも乗り越えて相互理解を深めて欲しいという意図でひろばを設置しているが、その乗り越え方について明確なメッセージを発信できていない。障害者と健常者が互いをよく知る機会を持つことで誤解が解けたり、適切な行動をとることが出来ることもある。子どもたちが楽しむことが出来るイベントと、そうした機会をセットで設けるなどの工夫が求められそうであり、今後の検討課題としていきたい。

補注

- (1) 障害の有無に関わらず、あらゆる子どもが家族や友達などと安全に、安心して遊ぶことができるよう設計、整備された公園。
- (2) 詳細は地域交流センター年次報告書「ゆかり」4号にて報告した。
- (3) インターンシップ実習生1名の他、もう1名ゼミ2年生が参加。当日の準備、イベント運営、片付け、振り返り討論を行った。
- (4) 発達障害に分類される症状を持つケースがほとんどであり、肢体不自由児はいない。障害の程度は重度から軽度まで幅広い。

引用文献

- ・赤松瑞枝「インクルーシブ公園に関する三郷市との共同研究－アカデミックインターンシップにおける課題解決型学習を通して－」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 4』跡見学園女子大学地域交流センター、p.80-p.81、2023年3月

謝辞

アカデミックインターンシップにて学生をご指導くださいました三郷市役所みどり公園課のみなさま、インタビューやイベント運営にお力添えくださいました支援者のみなさまに、深謝申し上げます。

防災フェスタにおける研究報告

—ブース出展による効果的な啓発活動を目指して—

赤松瑞枝

1. はじめに

赤松ゼミ3年生は2017年から文京区防災課が主催する防災フェスタに参加し、研究成果をブースにて発表している。8月の最終日曜日に教育の森公園で開催される同フェスタでは、多くの企業や団体がブース出展を行い、防災に関する情報発信をすると共に、自衛隊や消防局等の協力のもと地域住民や来場者が防災訓練を行っていた。

2020年及び2021年は中止となったが、2022年は出展ブースの大幅な縮小等新型コロナウイルス感染防止対策を十分に取り、12月へと時期をずらして3年ぶりに対面で開催された。ブース出展はできなかったため研究内容をまとめたパンフレットを作成し、来場者に直接手渡しする形式で研究成果を報告することになった⁽¹⁾。しかし2023年には再びブース出展が可能となったため、前年よりも多くの来場者の方と交流をしながら研究成果を報告することを目標に活動を行った。

2. 活動内容とその成果

2-1. 出展内容の検討

今年度も身の回りにあるものやサービスを、日常生活だけでなく非日常でも使えるようにデザインする「フェーズフリー」をテーマに調査研究を実施した。まず学生自身が定義、意義、実践例、認知度などを調査しながら理解を深めた。その過程で認知度が低く実施している人も少ない、しかし対応している商品も増えつつあり意識すればすぐに生活に取り入れることが可能になる、この2点に着目し、来場者にフェーズフリーを取り入れよう、と思ってもらうことを出展の目標として設定した。そして毎年乳幼児連れの親子の来場が多い傾向にあることから、親子で挑戦できるクイズを実施し、展示内容を見てもらいながらクイズに回答、正解数に応じた景品（お菓子）を子どもにプレゼントするという枠組みを作った。

その後、ゼミ生8名が3つのグループに分かれ準備を行った。1つのグループは友人や家族などを対象としたフェーズフリーの認知度調査を実施。100名から回答を得て、その結果をまとめながら、モバイルバッテリーやボックスティッシュ、ポンチョ、ハイブリッド車などが、フェーズフリー対応であることを知らずに日常的に使われている商品であることを、フェーズフリーの定義や目的と共に紹介することにした。

もう1つのグループは、フェーズフリー商品の中から、特に来場者の役に立つと思われる、缶タイプでアタッチメント形式の乳首を付ければそのまま飲ませることができる液体ミルク、メモリ付きで粉ミルクやお米などを図ることが出来る紙コップ、防災時には水を入れてバケツ替わりに使える撥水バッグの3点を購入し、当日展示しながら効果を説明することにした。もう一つのグループは、展示内容に関



図1：作成・配布したパンフレット

連したO×形式のクイズを考えるとともに、上記の展示内容とクイズをまとめて掲載した三つ折りパンフレットを200部作成した(図1)。

2-2. 当日の様子

防災フェスタは2023年12月3日の10:00から14:00に文京区教育の森公園及びスポーツセンターにて開催された。ブースは、会場の最も奥にあるスポーツセンターの3階に設営することになった。指定場所にはもう一団体がブースを出展し、さらには文京区防災課が実施するスタンプラリーの押印場所も設置されていた。あまり広くないスペースを効率よく使用するべく試行錯誤した結果、部屋の入り口からすぐ認識できる場所に受付用の机を置き、そこを起点に反時計回りに来場者が展示を見て回るよう、パネルや机を設営することになった。またシフトを組んで、受付での対応、パネル展示の説明、実物の説明、呼び込みのためのパンフレット配布と声掛けを分担し、交替しながら行った。

スタンプラリーの押印場所であることも手伝って、学生の想定以上に多くの方にご来場いただき、パンフレットや景品のお菓子がなくなってしまうハプニングも起こった。しかし学生たちは手分けして買い出しに出かけたり、万が一のためと持参したスケッチブックに手書きでクイズの問題を書いて手渡し、回答を聞く際に回収する方式に切り替えるなど臨機応変に対応していた。例年通り親子連れの来場者が多かったが、クイズを解くために展示内容を読んだり、実際に撥水バッグに水を入れてこぼれない様子を観察したり、と親子揃って体験してくださるケースも少なくなく、学生が展示のために行った工夫が功を奏していた。ご自分の子育て体験を踏まえつつ、より望ましい商品のかたちをお話くださったり、展示内容を評価してくださった上で本学が講演会実施等の活動を通してフェーズフリーの啓発に取り組むと良い、とコメントして下さったり、と来場者から学生へ様々なご教示をいただくこともできた。

2-3. 事後の振り返り

翌週のゼミにて、活動を振り返る機会を設けた。それらの意見交換を通して、学生たちも来場者とのコミュニケーションを楽しみ、自分たちの研究成果が役立つ達成感を実感したことが確認できた。他方、想定以上に子どもの来場者、特に小学生の来場者が多かったため、小学生が一人でもチャレンジできる難易度のクイズを準備したり、漢字表記にルビを振ったりという配慮が必要だったという反省点



図2：出展ブースでの様子

も示された。さらに外で声掛けをする時に使うチラシを別途準備すべきだった、パンフレットや景品はもっと多く準備しても良かった、架空でも良いので自分たちでフェーズフリー商品を作ってみても面白いと思う等の意見もあり、次年度の活動の参考としたい。

3. おわりに

約2か月間、8回のゼミで準備し当日を迎えた。ゼミ生自身、フェーズフリーに初めて触れるため、取り組み当初は手探り状態となり作業の進捗状況も迅速とはいかない。そのような中でも、「自分もフェーズフリーを取り入れようと思ってもらうこと」、そのためには「来場者に分かりやすく伝える」こと。この点をブレずに追究し続けた結果、ストーリー性とインパクトのある展示を実現でき、啓発効果も上がった。学生からの「来場者の方から色々感想を伺いお役に立てたんだと嬉しかった」、「繰り返し説明することで自分自身もフェーズフリーに対する理解を深めることが出来た」、「自分の言葉で説明できるようになるまで何度も調べたり、使う言葉を工夫したりした」、などのコメントから、主体的な活動を通して成長できたことも成果である。

一点悔やまれるのは、来場者の感想を付箋に書いてもらって掲示していくというアイデアを実現できなかったことである。展示内容等に関する率直な意見を集め、成功点と反省点を客観的に把握して改善案をまとめるためにも必要な取り組みであった。次年度は確実に実施できるように指導し、今年度得られた知見も活かしながら、更に地域に貢献できる活動の実施を目指したい。

補注

(1)『ゆかり跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書4』にて報告している。

引用文献

・赤松瑞枝「防災フェスタにおける研究報告—3年ぶりの対面形式参加から得たもの—」『ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書4』跡見学園女子大学地域交流センター、p.43-p.45、2022

実践ゼミ B-Rサーティワン アイスクリーム株式会社(東京都品川区)とのコラボレーション 新商品企画提案PBL

マネジメント学部マネジメント学科教授 細川 淳

マネジメント学部細川ゼミでは毎年度、B-Rサーティワン アイスクリーム株式会社(東京都品川区)(以下「B-Rサーティワン社」)とのコラボレーションにより「サーティワン アイスクリームの画期的な新商品を企画する」というテーマでPBL(Project Based Learning: 課題解決型学修)を実施している。

毎年度、ゼミ生たちが3~4人のチームを組み、綿密に企画したサーティワン アイスクリームの新商品についてのプレゼンテーションを作成、B-Rサーティワン社の経営職や商品企画・

店舗開発のマネジメント職の方々に本学新座キャンパスにご来校いただき、ゼミ生たちのプレゼンテーションをご講評いただいている。

最前線のプロの面前で企画プレゼンテーションを行うという、ゼミ生たちにとって緊張感あふれる場面であるが、ゼミ生たちは毎年度笑顔いっぱいでの課題に挑んでいる。

プレゼンテーション終了後は、同社の皆さまが優勝・準優勝などの順位を決め発表する。そしてご用意いただいた賞品を授与していただく。ゼミ生たちは賞品に大よろこびの表情を見せるが、優勝を逃したチームはさっそく反省会を開いている。



1. PBLの位置づけ

細川ゼミでは「コア+3」という学修目標を掲げている。「コア」とはゼミ生各自のアイデンティティの再発見と再定義であり、「+3」とはその上に立った①クリエイティビティ、②ロジカル・シンキング、③関係性を築く力の養成である。ゼミのすべてのプログラムは「コア+3」のうちの1つまたは複数を養成・開発するように組み立てられている。

「コア+3」をバランスよく養成してやることにより、ゼミ生たちが学生時代だけでなく、むしろ社会に旅立った後にこそ自らの足で立ち、たくましく人生を歩んで行けるように訓練している。

サーティワン アイスクリーム新商品開発PBLでは「コア+3」の全要素を各自が発揮して臨むことになる。訓練の成果を試す2年次でのハイライトである。

2. PBL実施までのプロセス

当ゼミでは春学期に筆者がブランド戦略およびマーケティングの基礎に関するレクチャーを行い、ゼミ生たちがPBLに取り組むための基礎知識を与えている。

これによりゼミ生たちはブランド・アイデンティティの枠組みを理解し、子供時代から慣れ親しんできたサーティワン アイスクリームがブランドとしてどう立脚しているかをあらためて認識する。続いてマーケティングの基礎を学び、「アイスクリーム」というジャンルでも複数の細分化市場が存在することを知り、その中で提案する新商品がどのような顧客をどのようなシチュエーションでターゲットとするのかという、企画立案の道筋を教わる。その上で製品、価格、販路、広告販促のマーケティング・ミックス（戦略）に結び付けていく。

3. PBL対象としてのサーティワン アイスクリーム

2年次秋学期のPBLの対象として、サーティワン アイスクリームが好適である理由がある。

まず、サーティワン アイスクリームが学生たちにはなじみ深いという点がポイントである。ほぼすべての学生がサーティワンを食べた経験があり「好き」という感情を持っている。つまり、PBLの入口としてのハードルが低いのである。

また、サーティワン アイスクリームは一部例外を除き、すべてサーティワン アイスクリーム・ショップで販売されている。したがってこのPBLではマーケティング・ミックス（戦略）のうち販路が固定されているため、ゼミ生たちは製品、価格、広告販促の3要素に集中して企画をたてることが可能となる。

ただし筆者は販路の企画提案を禁じてはいない。実際年度により販路提案をするチームが出てきている。

今年度（2023年度）では、3チーム中1チームが下記のようにカフェ業態を提案した。昨年は丸の内・日本橋エリアへの出店を提案した企画が提案され、「サーティワンにとっては未開拓エリア。今まで1店舗も出せていない。この企画で新しい市場機会に気づかせてもらって目からウロコが落ちた」と絶賛していただいた。また3年前には一つのチームが建築設計ソフトを駆使して具体的な店舗レイアウトを提案した。同社の取締役人事部長が、「学生でここまでやるとは」と驚いておられた。

4. 今年度（2023年度）の企画提案

以下に今年度の新商品企画提案の概要を紹介する。

チーム1「～日本の観光地をイメージした～ 和の限定アイス」

サーティワン アイスクリームには「和の商品が少ない」「大人向けのフレーバーが少ない」という商品構成の空白エリアに注目し、この両エリアを網羅する商品を提案した。かつ観光デスティネーション限定フレーバーを売り出すことでコロナ後の旅行ブームを味方につけた企画となった。



チーム2「サーティワン アイスクリームCAFÉ」

カフェ業態を提案し、食べ放題メニューやアイスクリームケーキのピース・メニュー、パフェなどのカフェ・オンリーのメニュー、ドリンクなどの提案を盛り込んだ。加えてテスト・マーケティングとして東京は池袋、大阪はUMEDA LOFTでのポップアップ・ストアの提案を盛り込んだ。

若い女性を惹きつける店舗およびメニューの提案にB-Rサーティワン社の方々は感心しきりであった。

チーム3「日本を知ろう ゴトウチ サーティワン」

競合他社と比較して専売ショップの店舗数が圧倒的に多いことに注目して、各地域の名産品とのコラボレーションによる期間限定の「ゴトウチ（ご当地）」新フレーバーを18種提案した。加えて第2弾として左記の「ゴトウチ」フレーバーの展開エリアをシャッフルし、たとえば中部地方に四国「ゴトウチ」の高知のゆずと同じく高知のエビ焼きせんべいとのコラボフレーバーを展開するといった、他地域フレーバーの展開を提案した。

5. WIN-WINの効果

毎年度、このPBLを経た後にはゼミ生たちの「コア+3」の力が増進している事が顕著に見てとれる。加えてプロの前でプレゼンテーションをしたという経験を経て、各自の中に自信が植え付けられている。

このPBLはB-Rサーティワン社の皆さまにとってもよい刺激となっているとの評価をいただいている。各年度のプレゼンテーション資料をPBL実施後にお送りしており、同社では商品企画部門その他に回覧をしていただいているとのことである。

同社役員の方から、「自分たちはアイスクリームづくりのプロである。しかしだからこそ固定概念や現実の制約条件に拘泥するあまり、発想が硬直化、陳腐化しがち。細川ゼミのプレゼンテーションを受けると、その硬直した発想をぶち破ってくれる」と評価していただき、毎年楽しみにして頂いているとの事である。

ある年度ではひとつのチームがマシュマロを使った商品を提案した。このPBLには同社商品企画室長が参加していただいていたが「実はマシュマロを使った商品を企画したが、市場に投入してよいか悩ん

でいた。今日のプレゼンテーションを聞いて背中を押してもらった。デビューさせようと思う」とのコメントをいただいた。

またこのPBLは本学入学案内やホームページで紹介しているが、例年この記事を見て跡見への入学を決めたと筆者に伝えてくる学生がいる。本学の入学者確保に若干なりとも貢献できているのは光栄なことである。

新潟県胎内市での観光による地域活性化の取組視察と提案

観光コミュニティ学部観光デザイン学科准教授 守屋邦彦

1. はじめに

観光を学ぶ当学科の学生達は、地域の活性化を考える上で観光が重要な手段の一つであることを、様々な講義の中で学んできている。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響から、地域を実際に訪れる機会が制限されていたこともあり、なかなかその実感を得られていないのが現状である。また、学生の場合、地域を訪れた経験があったとしてもそのほとんどは「旅行者」としての経験であり、旅行者を受け入れる「地域の方々」がどのような思いも持って取り組んでいるのかを知る機会は少ない。

こうした状況を踏まえ当ゼミでは、令和5（2023）年9月に2年生10名とともに新潟県胎内市を訪問、観光施設の視察や現地関係者からお話を伺うとともに、訪問の成果報告として学生による滞在プラン提案を行った。

2. 新潟県胎内市への訪問

(1) 胎内市の概要

胎内市は、新潟県の北東部に位置し、新潟市から北東約40km（新潟駅から特急電車で約30分）の位置にある。市の西部には日本海が広がり、東部には飯豊連峰がそびえ、市の名称になっている二級河川の胎内川は、飯豊連峰を水源として日本海まで流下している。この胎内川の中流、胎内平と呼ばれるエリアには、1970年代～2000年代はじめまでに旧黒川村によって整備された宿泊施設や観光施設が集積しており、村が中心となって各種の施設整備や人材育成を進める取組は、地域活性化のモデルと言われた時代もある。

今回、胎内市を訪問先としたのは、胎内市と著者との交流が15年以上に及ぶこともあるが、観光による地域活性化への取組が高度経済成長期から現在に至るまで実施されていること、また、村営での観光施設整備といった公的取組だけでなく、地域の事業者による取組も行われていることから、歴史的な経緯とともに異なる立場からの取組を知ることが出来、学生が多様な学びを得ることが出来ると考えたためである。

(2) 現地訪問行程

今回の現地訪問は2泊3日にて実施した。概略の行程は以下の通りである。なお訪問にあたっては、基礎ゼミナール講義の中で、胎内市の観光による地域活性化の取組経緯や現在の状況を学ぶとともに、ガイドブック等で周辺地域も含めた観光資源の把握や胎内市の各種観光資源の紹介のされ方などの事前学習を行った。

■ 9月11日(月)

- ・ 中条駅集合→ホテルマイクロバスにてロイヤル胎内パークホテル(写真1)へ移動
- ・ 昼食及びオリエンテーション
- ・ 講話①: 胎内市観光協会事務局長より、胎内市の観光の現状についてお話を伺う
- ・ 視察①: 徒歩にて、胎内平(観光施設が集積するエリア)の観光施設視察
- ・ 講話②: ロイヤル胎内パークホテル総支配人より、胎内リゾートの現状等についてお話を伺う



写真1: 宿泊したロイヤル胎内パークホテル

■ 9月12日(火)

- ・ 講話③: NPO法人ヨリシロ理事より、胎内市での地域おこし活動についてお話を伺う
- ・ 市マイクロバスにて乙地区へ移動
- ・ 視察②/講話④: 乙まんじゅうや店主による、乙宝寺ガイドツアー及び地域での活動についてのお話を伺う(写真2)
- ・ 視察③: 市マイクロバスにて樽ヶ橋エリアへ移動、観光施設視察
- ・ 市マイクロバスにてホテルへ移動



写真2: ガイドツアーに参加する学生たち

■ 9月13日(水)

- ・ 学生によるグループワーク(ロイヤル胎内パークホテル滞在プランの検討)
- ・ 市マイクロバスにて市街地へ移動
- ・ 視察④/講話⑤: いちごカンパニー関係者より、地域活性化への取組についてお話を伺う(写真3)
- ・ 市マイクロバスにて中条駅へ移動、解散



写真3: 地域活性化への取組についてお話を伺う

3. 成果報告会の開催

現地訪問終了の1週間後(9月21日)、現地関係者と教員・学生とのオンライン会議を開催し、学生達が議論・作成した来年の春・夏のホテル滞在プランのアイデアを提案する場を設けた。来年の春・夏の滞在プランとしたのは、ロイヤル胎内パークホテルでの実際のプラン検討がちょうどその時期以降に開始されることから、学生たちのアイデアの何かしらの要素が実際のホテル滞在プラン検討に反

映されることを期待したためである。

ホテル滞在プランは計3グループ（1グループ3～4名）が発表を行った。それぞれのプラン概要は以下の通りである。

- ①「自由研究、助けます！ 家族との思い出作り、この胎内ではませんか？」
－夏休み期間のファミリー層をターゲットとして、ホテル周辺施設で自然学習（自由研究）を実施。親子で参加出来、夏休みの自由研究としても活用できる内容。
- ②「春の学割プラン」
－卒業生・新学期を控えている学生をターゲットとして、寺のガイドツアーやイチゴのスイーツを味わう。遅めのチェックアウト後にホテルでアフタヌーンティーも堪能する内容。
- ③「浴衣きなきゅもったいない！」
－Z世代や外国人観光客をターゲットに、まずホテルにチェックインしたのち浴衣に着替えて頂き、寺のガイドツアーやイチゴのスイーツを味わう。また夜には星空観察や手持ち花火を行う内容。浴衣姿をSNSで発信してもらうことで情報の拡散も狙う。

4. まとめ

基礎ゼミナール講義の中で実施した事前学習の段階では、学生達は訪問先である胎内市について具体的なイメージがあまり持てない様子であったが、実際の訪問により、地域の持つ魅力などをそれぞれの学生なりに肌で感じる事が出来た様子であった。また、成果報告会を行ったことで、学生にとっては自分達の考えをまとめて発表する機会を、現地関係者にとっては若い世代の考えを聞く機会をそれぞれ得られたことも良かった点と考えている。更に、2泊3日の旅行を通じて、学生間のコミュニケーションが活発になったことも良い効果であったと感じている。

なお、今回の現地訪問及びオンライン発表会での提案内容については、地元新聞（新潟日報）から取材を受け、記事掲載もされた。これも、地元及び大学の情報発信に多少なりともつながったものと感じている。

今回の行程を検討するにあたっては、現地関係者（一度首都圏に出て地元に戻った方や、首都圏から移住した方も含まれている）がどのような「思い」で観光による地域活性化に取り組んでいるのかを少しでも感じてもらいたいとの考えから、講話を多く組み込んだ。結果として、学生達は実際に現地を訪れた上で関係者の話を聞くことの重要性を改めて実感できたのではないかと考えている。なお、現地訪問後、学生数名から現地でのインターンシップの申し出があり、令和6（2024）年2月～3月に実施した。

今回の経験を踏まえ、次年度新たなゼミメンバーで、良い点を残しながら改善すべき点は改善した内容で再び現地訪問を実施したいと考えている。

最後に、今回の現地訪問を快く受け入れてくださり、各種ご協力を頂いた胎内市観光協会平川会長・須貝事務局長、ロイヤル胎内パークホテル市野瀬総支配人、胎内市商工観光課の皆さま、またご講話を頂いたNPO法人ヨリシロ神田様、乙まんじゅうや久世様、株式会社小野組阿彦様ほか、今回の現地訪問に関わってくださった皆さまにこの場を借りて感謝を申し上げます。

吉野秀雄 艸心忌世話人会 —歌人を通しての地域交流と文化の継承—

文学部人文学科教授 鈴木芳明

1. 歌人吉野秀雄

病む妻の足頸あしくびにぎり昼寝する末の子をみれば死なしめがたし
生かしむと朝を勢きほへど蝸ひぐらしの啼くゆふべにはうなだれてをり
額冷やすタオルの端はしに汝がなみだふきやりてはたわが涙拭く
をさな子の服のほころびを汝なは縫ぬへり幾日のちか後に死ぬとふものを
生きのこるわれをいとしみわが髪を撫いまはでて最期いまはの息に耐へにき
をさな児の兄は弟をはげまして臨終いまはの母の脛すねさすりつつ
母の前を我はかまはず絆切ことれし汝の口なれびるに永く接吻くちづく
亡骸なきがらにとりつけて叫ぶをさならよ母を死なしめて申訳まうしわけもなし

上に掲げた八首の歌は、戦後を代表する吉野秀雄の歌集『寒蟬集かんせん』の中から抜粋したものです。吉野秀雄の妻はつ子は、昭和19年8月に41歳の若さで亡くなりますが、はつ子の入院から死別に至るまでの様子が、張り裂けそうな胸の悲しみを抑えて、切々と歌に詠まれていきます。

敗戦濃厚であった戦時中に、吉野秀雄の妻はつ子は、病弱な夫と四人の子ども達を残して亡くなりますが、死ぬ間際まではつ子は、家族や夫のことを気遣います。そして、そういう母を失うまいとして、夫や子供達もまた奇跡を信じて必死に看病する様子が描かれます。驚くべきことは、最愛の妻の死を前にして、狼狽しながらも、あくまでも客観的に事を凝視する、もう一人の歌人の目が存在することです。この歌人のぎりぎりの心の有り様が、作品という媒体を通して、詠む者の心の琴線に触れて感動を呼び起こすのだと思います。

2. 艸心忌と世話人会

死をいとひ生をもおそれ人間のゆれ定まらぬころ知るのみ

遺稿集『含紅集がんこう』に収められた、吉野秀雄の晩年の代表作です。吉野秀雄は長年の闘病生活の後に、昭和42年7月に65歳で逝去しました。直前の6月には、第一回釈迢空賞を受賞しています。吉野秀雄の墓は鎌倉二階堂にある名利瑞泉寺に建てられますが、その瑞泉寺の山門に入る手前左側奥にこの歌の歌碑があります。この歌碑は、吉野秀雄の一周忌（艸心忌）の際に建てられたもので、裏面には、「吉野秀雄を敬愛するもろもろの人あひ集ひてこれを建つ ときに昭和四十三年七月 艸心忌」とあります。

つまり、吉野秀雄が亡くなった翌年に、「吉野秀雄を敬愛するもろもろの人」が集まって、第1回の艸心忌が開催されて歌碑が建てられ、以後命日に近い7月第1土曜日に、毎年艸心忌が開かれることに

なりました。艸心忌は、コロナで3年開催できませんでしたが、令和5年には復活して53回目を迎えました。そして、「吉野秀雄を敬愛するもろもろの人」が「あひ集ひて」できたのが艸心忌世話人会です。吉野秀雄の歌の魅力を広く世に知らしめ、後世に伝えるための普及活動を行っています。

3. 艸心忌講師（現代歌人）による文化の継承

艸心忌は、当初は吉野秀雄を直接知る方々からの、吉野秀雄にまつわる様々なエピソードや人物の魅力、歌の力等についての話が主でしたが、だんだん吉野秀雄を知る人々がいなくなってからは、現代を代表する歌人達による新たな吉野秀雄論を披露する場となりました。現代歌人達の詠みを通して、吉野秀雄を再評価することによって、文化の継承が図られていることは、とても意義のあることだと思います。

下記に、これまでの艸心忌で講演した主な講師を紹介したいと思います。

第5回	昭和47年	草野心平（詩人）	第40回	平成19年	小島ゆかり（歌人）
第10回	昭和52年	山崎方代（歌人）	第41回	平成20年	栗木京子（歌人）
第20回	昭和62年	島田修二（歌人）	第42回	平成21年	米川千嘉子（歌人）
第26回	平成5年	西郷信綱（学者）	第46回	平成25年	三枝昂之（歌人）
第34回	平成13年	尾崎左永子（歌人）	第48回	平成27年	今野寿美（歌人）
第35回	平成14年	佐々木幸綱（歌人）	第49回	平成28年	木嶋靖生（歌人）
第36回	平成15年	道浦母都子（歌人）	第50回	平成29年	島田修三（歌人）
第37回	平成16年	大下一真（歌人）	第51回	平成30年	沖 ななも（歌人）
第39回	平成18年	馬場あき子（歌人）	第53回	令和5年	柳 宣宏（歌人）

4. 艸心忌世話人会と地域交流

現在の艸心忌世話人会のメンバーは11名です。コロナの期間中に三名の世話人が亡くなり、高齢化と共に若い世話人を開拓することの課題が生じました。世話人会はこれまで、吉野秀雄が晩年まで直接指導していた、新潟県の「砂丘」短歌会の関係者や、群馬県高崎市が毎年開催している吉野秀雄顕彰短歌会の関係者、吉野秀雄のご親戚、吉野秀雄がかつて勤めていた東京日本橋の吉野藤^{よしのとう}関係者、そして、「吉野秀雄を敬愛するもろもろの人」等によって構成され、活動してきました。特に、近年念願であった鎌倉と新潟と高崎の関係者同士がつながり、交流活動が盛んに行われるようになったことはきわめて有意義なことでした。お互いに大会や講演会、歌会等で講師を派遣したり、研究成果を発表したり、大会の入賞者への記念品として吉野秀雄の色紙額を贈ったりすることによって、地域の交流活動に貢献し、また、吉野秀雄という一人の歌人の文化遺産の継承や普及に寄与することができたのではないかと思います。

令和5年度「市内3大学学生と新座市長との懇談会」についての報告

文学部コミュニケーション文化学科教授 松浦雅子
〈松浦ゼミ〉大崎真夢・轟木さくら・猪狩美羽・浅見怜花

2023年11月14日（火）、立教大学新座キャンパス・アカデミックホールにて新座市の「市内3大学学生と市長との懇談会」が開催された。これは、大学生による提言等を市政に反映することと、市政について大学生の理解を深めることを目的に、2007（平成19）年から始まったもので、新座市内の3大学（跡見学園女子大学、十文字学園女子大学、立教大学）が参加している。

2023年度は「デジタルを活用した市民の利便性向上のための取組について」というテーマで、提言を3大学の学生が行った。本学からは、文学部コミュニケーション文化学科松浦雅子ゼミ・3年生の4名が参加し、「一人にさせないまち“ぬくもり新座”～市民をデジタルで温かく繋ぐ～」と題した提言の発表を行った。今回は、その貴重な体験を元に、学外や社会との交流や発信力、ゼロから発想する企画力の大切さを学んだプロセスを、学生からの感想を交えて報告する。

1. “ゼロからの発想力”を磨く重要性

今回、指定された課題は、「デジタルを活用した市民の利便性向上のための取組について」というテーマだけだった。それ以外、全て自由に考えて良いという各大学15分間の企画プレゼンだ。ゼミでは、毎回「企画力×表現力」をテーマに、ゼロからアイデアを発想し、他者に伝えるための文章力とプレゼン力を磨いている。文章で重要なことは、技術よりも、自分オリジナルの意見や発想を創造することである。今回のテーマは、まさに日頃ゼミでトレーニングしていることを形にできるかの挑戦になった。現代は、マニュアル無きデジタル時代。激動の時代を生き抜くために重要なのは、“人間の創造力”に他ならない。

まずはゼミの有志四人が集まり、本番までの二ヶ月半に渡り毎週プレストを行い企画書を練り上げた。教員の私は客観的なオブザーバーに徹し、何より“学生発”であることを重要視した。自分達だけの発想で、斬新なコンセプトを生み出す体験は、苦しい中にも大きな自信を与えてくれると確信していた。結果、まさに学生発で「一人にさせないまち“ぬくもり新座”～市民をデジタルで温かく繋ぐ～」というコンセプトが生まれた。新座市民を「にいみん」と柔らかく名づけるセンス。新アプリの提案力。加えて「にいみん」というキュートな新キャラクターまで誕生させた（図1）。発表後は、市長や教育長、他大学の学生と意見交換を行なったが、本学学生の発表は大変高く評価された。学生達にとっては、自分発のゼロから考える力を醸成する貴重な体験になった。

2. “チーム・ビルディング”の可能性は無量大

本番までの作業はまさに時間との勝負だった。まずメンバーの頭の中のアイデアを「見える



図1：新キャラクター「にいみん」



写真1

化」。それらを融合発展させるために自由闊達にブレインストーミングを行なった。全てを受け止める「自由」な場は、思いもよらない斬新なアイデアを生み出す。第一回目のプレストから素晴らしい意見が生まれ、さらに膨らませる好循環が発生した。これこそ共同作業の醍醐味だ。それをまた、他者に感動と共に伝えるマテリアルへと磨き上げる。当日の出発ギリギリまで、スライドや原稿のブラッシュアップとリハーサルを重ねた。まさに学生にとっては、膨大な量の作業を時間との勝負で進行させていくのは大変だったであろう。まさにチームだからこそお互いを励まし合い、高めあう力が素晴らしい化学反応を生み出したと言える。

3. 「学外や社会」との交流の大切さ

今回は、市内の三大学の学生が、市長に企画プレゼンするという重要ミッションだった。学生という甘えは許されず、また他大学との競い合いも素晴らしい効果を生み出した。学外の方々との交流は、社会に出ていく上での貴重な経験値として重要である。また、自分が「跡見生」であるという誇りを醸成する大事な体験にもなった。母校を愛しその歴史と伝統に誇りを持つ。そのスピリッツは、卒業後も彼女達に、きっと生きる勇気やパワーを与えてくれると確信した。

4. 学生からの感想

学生には、自主性と自律性を重んじ、様々な課題に果敢に挑戦することを願ってやまない。今回は、学生発ということを再重要視した。以下は、学生達からの感想である。

- 15分の発表のために、何度も会議を重ね、企画をブラッシュアップすることで、コミュニケーション文化学科だからこそ、「1人にさせない街、温もり新座」というコンセプトを提案することが出来た。また、アイデアを言語化するという点において成長することが出来た。懇談会当日は、他大学の方々

が、私たちの意見とは異なる多角的な視点からの提案があり刺激的だった。(大崎真夢)

- ゼミで学んでいることを実際に応用し仲間と熟考し、新座市長の前で発表させて頂けるというのは大変貴重な機会だった。デジタルという同じテーマでも学部が違うだけでアプローチの仕方もかなり異なり、物事を多角的に捉え視野を広く持つ大切さを実感した。(轟木さくら)
- このプロジェクトで、一人ではなく仲間に頼れる環境の大切さを感じた。本番直前まで不安な気持ちが消えなかったが、仲間が発表している姿を隣で見て、絶対に成功するという自信に変わった。協力し、励ましあえた仲間がいて本当に良かった。(猪狩美羽)
- 大学生でありながら、市長や社会で活躍されている方にプレゼンでき大変貴重な経験になった。今回はデジタル・利便性・市民というキーワードが設定されたが、実際にあるデータ、直接現地で調査(アンケートを含め)し、社会背景から考察する必要があり、社会や地域などに対する貢献、問題解決に向けた企画案だからこそ気が付けた部分が勉強になった。(浅見怜花)

大井沢地域活性化協議会 活動計画策定事業 協力報告

観光コミュニティ学部コミュニティデザイン学科准教授 土居洋平

1. はじめに—経緯と事業概要—

山形県西村山郡西川町大井沢は、朝日連峰の入り口に位置する山間集落である。本学と大井沢を含む西川町とは、2015年度に包括地域連携協定を締結しており、継続的にゼミ活動を西川町内、特に大井沢において展開してきた。コロナ禍で連携した活動が停滞したものの、オンラインを駆使した関係は継続し、また、2022年度には対面の活動が復活し、町の補助金も活用しながら大井沢観光マップを作成している。

2023年度は、大井沢内で組織した「大井沢地域活性化協議会」が農林水産省「農山漁村発イノベーション対策（地域活性化型）事業」（令和5-7年度）の補助金を獲得し、3年間で大井沢の地域活性化のための活動計画を策定し、実証事業を行うことになったこともあり、ゼミでもその計画策定・実証事業へと協力する活動を含めて、大井沢地区での地域活動を行った。

2. 事業の経過

今回の農水省の補助事業に応募する話は数年前からあがっていたが、今年度になり町の支援も受けながら具体化していった。そこで、6月21日に筆者が大井沢を訪れ、事業の申請内容についての説明を受けるとともに、具体的な協力についての検討を行った。その結果、特に大井沢地域の住民や関係者が集い事業について検討を行うワークショップについてのコーディネートを筆者が行い、ワークショップの運営に学生も協力することとなった。

実際には、例年ゼミで参加している大井沢の地域イベントの前後にワークショップへの協力を行う形をとることになった。まずは、7月15日～17日に筆者と学生4名で大井沢を訪れ、7月15日夕方に第一回のワークショップを実施した。この際は、ワークショップには、大井沢地区住民約20名に加え、西川町の地域おこし協力隊、大井沢に関わる事業を行う方々など35名以上が参加し、5班に分かれて大井沢の地域資源や課題の洗い出しの作業を行った。このうち4グループに学生が参加し、グループワークのまとめやグループ発表に協力をした。また、7月16日には、大井沢ふるさと保全活動として草刈りに参加したほか、17日には大井沢の地域資源を自分自身の目で確認すべく、大井沢内の各所を案内されながら、和紙工房や缶詰製作所、漬物工場、大井沢特産丸そば屋を見学したほか、カブトムシの幼虫の移動作業の手伝いを行った。

また、9月8日から10日にかけて、筆者と学



写真1：第1回ワークショップの様子

生6名で大井沢を訪れ、大井沢湯殿山神社例大祭の運営に参加した。これは、補助事業との関係では、大井沢の地域イベントに参加しながら地域資源を体験・評価して今後の地域活動計画へと反映させるという趣旨で行われ、9月8日夕方から例大祭の準備作業を地域の方々と主に行った。具体的には、神輿巡行の際に渡す紙製の造花の製作や、神輿先導者の装飾、また、神輿の組み立て作業の手伝いなども行った。9月9日には、早朝より神社の幟立てを行い、朝からは神社での神事および神輿出発式に参加し、地域の子どもとともに神輿をかつぎながら大井沢の各集落を巡った。午後からは、大井沢住民有志で出店する例大祭・前夜祭の夜店の準備を地域住民とともにに行った。また、夕刻には火渡り神事にも参加している。9月10日には、例大祭本祭に地区役員とともに参加した。以上をもとに、大井沢の地域の文化や生活の一端を理解することに努めた。



写真2：神輿巡行の様子

11月27日～29日にかけて、第2回のワークショップの実施のために、筆者単独で大井沢を訪れた。学期中の平日ということもあり学生の同行はなかった。27日夕刻には大井沢住民や地域おこし協力隊、関係者に加え「おてつだび」で大井沢に訪れた3名を加えた30名近くが集まり、筆者のファシリテーションのもとでテーマごとの地域資源の確認と活用可能性の検討のワークショップが行われた。テーマは、前回のワークショップでの議論の整理を経て、「観光」「地域づくり」「ものづくり」「農業」の4つであり、それぞれの関係者がグループに集い、議論を行った。28日には、「おてつだび」来訪者とともに、キノコの菌打ち用の木の伐採の様子や、イワナの養殖の様子などの見学を行った。また、関係各所で計画策定に関するインタビュー調査を行った。29日には、「おてつだび」参加者3名とともに、インタビュー調査の取りまとめ作業などを行った。

1月6日～7日には、第3回ワークショップの実施のために、筆者と学生3名で大井沢を訪れた。6日午後到大井沢に到着したのち、大井沢の地域づくりのあゆみについて改めて講義を受けたのちに区内各所を視察した。また、6日夜には第3回のワークショップが行われ、地域住民、地域おこし協力隊、関係者など25名が参加した。前回までに引き続き筆者がファシリテーターをつとめ、学生は第1回目と同様各グループに参加し、記録や発表の協力を行った。7日には、大井沢自然と匠の伝承館でおこなれた新年行事に参加し、大井沢の生活文化を学んだほか、屋には大井沢名物「丸そば」の制作の様子を見学するとともに試食を行った。

3. 活動を振り返って

今年度は、コロナ禍前からの地域活動に加えて活動計画策定に対して協力を行った。ただ、昨年度と異なり、今年度は各回で学生のメンバーの入れ替わりが多く、その都度、大井沢について最初から学んでもらう必要があるなど課題は残った。とはいえ、活動計画の策定に関わることで、例年以上に

大井沢についての理解を深める必要があり、学生たちは自分が普段済む環境とは異なる地域において、コミュニティの関係性がどのようになっているのかについて体感的に学ぶことができた。特に、郊外出身の学生にとっては、行政が主導するわけでもない地域づくりの集まりに、170人の住民のうち30名近くが参加し、また、そこに地域に関わる人々も参加して地域をどうしていくかが真剣に話されていることに刺激を受けたようである。その点では、コミュニティデザインを実践的に学ぶ絶好の機会になったと感じている。

2023年度 B-ぐる映像制作プロジェクト 活動報告

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに —プロジェクトおよび今年度の活動概況—

B-ぐるバス映像制作プロジェクトは、文京区内を巡るコミュニティバス「B-ぐる」の車内で放映されている映像の一部を本学学生が「AGB隊（跡見・ガールズ・B-ぐる隊）」として制作しているものである。B-ぐる沿線協議会からの依頼を受けて2012年度からゼミ活動としてスタートし、2015年度から地域交流センター（2015年度のみ庶務課地域交流担当）の呼びかけに応じた有志学生で活動を担っている。活動12年目となる今年度は、地域交流センターの呼びかけで集まった8名の学生が2チームに分かれて映像制作活動を行った。映像は、2023年10月及び2024年1月からバス車内にて公開されているほか、YouTubeのB-ぐるチャンネルでも公開されている。また、今年度は観光デザイン学科川副助教の担当授業「コミュニティデザイン特殊演習（プレゼンテーション）」においても、作品を1つ作成しており、順調にいけば、2024年4月からバス車内で公開の予定となっている。

2. 今年度の活動経過と課題

(1) 2023年度の活動の経過

今年度は、例年と同じく4月から5月にかけて参加学生の募集を行い、昨年度からの継続学生4名と新規4名の8名の学生が活動に参加することとなった。昨年度は21名、それ以前の多い時期には30名前後の学生が参加していたので、かなり少ない人数ということになる。例年に比べて継続する学生も少なく、新規の応募も少ないなかでの活動のスタートということになった。

例年は7～10名程度で3つのチームを編成し、各チームが3～4ヶ月かけて3・4作品を作成してきたが、この人数では同様の作品制作を行うことは難しい。そこで、B-ぐる沿線協議会とも相談し、今年度はまずは、4名で2チームを編成し、各チームが2～3作品を作成する形で活動を行うこととなった。

4～5月中旬の募集を経て、5月29日にキックオフミーティングを開催し、活動についての説明やチーム編成についての希望を確認した。また、今年度1チーム目（Aチーム）が、6月初旬から活動を開始し、週1回、毎回1～2時間程度の企画会議を7月末ぐらいまで行い、例年継続してきた「いちようさんが行く！」と地域活動団



写真：撮影の様子

体紹介等の映像作品を制作していくこととなった。「いちようさんが行く！」については、1分程度のミニ作品を多数作成し、企画数の減少をカバーする形となった。撮影は夏休みにかけておこなわれ、9月中に編集作業を行い、10月より作品が車内で公開されている。

2チーム目（Bチーム）は、10月初旬から活動をはじめ、週1回、1～2時間の企画会議を12月初旬まで行い、Aチームと同じく「いちようさんが行く！」と店舗紹介等の映像作品を制作していくこととなった。また、12月中旬から下旬にかけて撮影を行い、年末から年始にかけて編集作業を行った。当初予定の1月初め公開よりやや遅れ、1月上旬よりバス車内で公開されている。

また、3チーム目の代わりに、今年は観光デザイン学科川副助教（地域交流センター担当助教）の担当する「コミュニティデザイン特殊演習（プレゼンテーション）」のなかで映像制作を行うこととなり、それをB-ぐるバス車内で放映することとなった。この原稿を書いている2024年1月現在、取材先が確定し、今後撮影が行われる見込みとなっている。

（2）今年度顕在化した課題

さて、2024年度も例年に近い規模の作品が公開できる運びとなったわけではあるものの、今年度の活動は、ここ数年来の課題が次々と顕在化するものとなった。

まず、昨年度に引き続き継続メンバーが減少しているということである。これは、昨年度の本誌でも指摘していることではあるが、会議が対面ではなくオンライン中心となり、議題に関わる点以外でのコミュニケーションが取りにくいなかで、それまでは知り合いではない有志が集まる活動においては、なかなか関係性を形成するのが困難であり、この活動が参加学生にとっての所属コミュニティになりにくいということはある。ただ、継続しないことには他の理由もあるようだ。学生に確認したところ、まず、想定以上に企画の検討にかかる時間がながいことがある。一度の会議の拘束時間も長く、また、会議での指摘も回によって真逆のものがあつたりと混乱を招くところもあり、企画会議が苦痛で負担に感じるということがあった。実際、より良い映像作品を目指しているとはいえ、会議での指摘は、そこでの思い付きのものが中心で一貫性のあるものではなかった。

また、近年はスマートフォンで映像編集が手軽にできるようになっており、学生はその延長線上で編集を考えてくるが増えているが、プロジェクトの映像制作は、それ以前のビデオカメラを用いて撮影しパソコンで編集することを前提に考えられており、学生の考える編集方針や方法と、プロジェクトで指導されるものに次第にギャップができており、学生が技術を習得したり初めて映像作品を作成したといった満足感を次第に得にくくなっていることもある。

さらに、学生は活動に関わる経費の支給を受け今年度から交通費も支給されるようになったとはいえ、ボランティアでこの活動に関わっている。一方で、映像制作指導者は当然、仕事として対価を得ながらこの活動に関わっている。この辺りのギャップが、近年よく指摘される「やりがい搾取」ではないかという疑問が学生の間に広がっていた。実際、拘束時間も長く負担も大きい活動なうえに、そこに居場所としての感覚も得にくい状況から、Bチームは開始当初の4名から2名が途中で離脱している。

3. 今後に向けて

今年度は、それでも2作品の制作を終え、また、3作品目も授業の中で制作してはいるが、プロジェクトの実施方法には多くの課題が残るものとなった。課題はプロジェクトの仕組みに関わる部分が多く、このまま同じ形で来年度もプロジェクトを実施することは難しいだろう。一旦、今年度で活動を終了するか、継続する場合は手法を一から考え直す必要がある。

みんなのわこらぼまつり2023・ 和光市市民活動紹介冊子制作への協力について

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに一和光市との連携について

埼玉県和光市は、文京キャンパスと新座キャンパスの間に位置し、長らく国際交流を中心に本学との連携の深い自治体であった。そうした連携を背景に、2022年4月、和光市は本学からの呼びかけもあり、TJUP（埼玉東上地域大学教育プラットフォーム）と包括協定を締結した。本学がTJUP内において、和光市の担当校となり、具体的な事業の実施の調整も行う運びとなり、これまで以上に和光市との地域連携活動が活発になってきている。ここでは、そのなかでも2023年5月に開催されたイベント「みんなのわこらぼまつり2023」と、その際に配布された「わこらぼ 和光市市民活動紹介冊子」の制作について報告する。

2. 「みんなのわこらぼまつり2023」への協力

「みんなのわこらぼまつり」は、和光市市民協働推進センターが主催し、センターの呼びかけで集まった市民や学生、関係者有志による企画運営チームがイベント内容を企画し、当日も市役所職員とともに運営にあたるというもので、今年度で3回目の開催になる。本学は、和光市がTJUPに加盟した昨年度から企画運営チームに教職員・学生が有志で参加し協力をしてきた。

2023年5月28日開催の「みんなのわこらぼまつり2023」においても、企画チーム参加者の募集が同年1月にはじまり、本学からは教員（著者）とコミュニティデザイン学科学生3名、合計4名が参加した。1月から月1回のペースで開催された企画会議において、全体運営、広報、環境整備、ステージ運営などのチームにわかれ、それぞれのチームにて和光市民と協働でイベントの具体的な企画内容を検討していった。

著者は、昨年に引き続きステージ運営の企画に携わり、ステージプログラムの調整や企画チームによるステージパフォーマンスの準備を行った。今回は、企画チームとしては、参加



写真1：わこらぼまつり2023準備の様子



写真2：わこらぼまつり2023・当日の様子

者も巻き込む形での「愛のしるし」のステージパフォーマンスと、和光市のゆるキャラで着ぐるみもある「わこうっち」と「さつきちゃん」を囲んだ形での「わこうっち体操」のステージパフォーマンスを行うことになり、その準備などを担った。学生は、広報や環境整備のチームに関わり、チラシの制作や当日の会場装飾の検討などを行っている。



写真3：関係者に挨拶するクリス学長

こうした準備を経て、2023年5月28日に「みんなのわこらぼまつり2023」が開催された。当日は、やや曇天であったものの雨などは降らず、予定通りのステージパフォーマンス等を行った。また、昨年と異なるのは、コロナ禍も落ち着いてきたこともあり、各ブースにて飲食物も提供できるようになったことである。そうしたこともあり、昨年度以上の参加者に恵まれ、大変盛り上がったイベントとなった。

また、和光市は米国ロンブビュー市と姉妹都市提携を結んでおり、同市にあるローワーコロンビア大学との関係が深い。本学学生も、例年、和光市の仲介もあってローワーコロンビア大学に多数の語学留学生を派遣しているが、同大学のクリス・ベイリー学長がイベント当日に来日しており、本学オープンキャンパスに参加する前にイベント会場に訪し、関係者との交流を深めた。

3. わこらぼ：和光市市民活動団体紹介冊子の作成

「みんなのわこらぼまつり2023」当日、参加団体も含めた和光市市民活動団体紹介冊子「わこらぼ」が配布された。この冊子は、和光市市民活動推進課協働推進担当からの依頼を受けて地域交流センターで呼びかけた学生4名が中心となって制作したものである。2023年の年初に学生を募集し、春休みを中心に市民活動推進課と学生が制作へ向けた会合を重ね、冊子のデザイン等についての検討を行った。また、関係団体への質問紙調査なども経て学生が原稿を作成した。

作成したものは、市民活動推進課の調整も経て5月初旬に原稿が完成し、「みんなのわこらぼまつり2023」当日に、出店団体に配布された。また、その後、和光市より冊子掲載団体に配布されたほか、市ホームページにて公開され、和光市の市民活動の全体を紹介する者として活用されている。



写真4：わこらぼ 和光市市民活動紹介冊子

4. 活動をふりかえって

昨年度は、「みんなのわこらぼまつり」の参加が中心で、冊子の制作等の活動は行っていなかった。今年度は、これまでの連携も深まりも背景に、活動団体紹介冊子については、和光市より本学の学生向けの企画として提案を頂き、冊子の作成に至ることができた。また、こうした活動への参加は、学生の進路選択の視野を広げる効果もあるようであり、実際に、今回の活動への参加を通じて進路を変更した学生も現れている。

和光市は、文京・新座のどちらのキャンパスからもアクセスが良い地域であり、今後も、国際交流のみならずTJUPやそれ以外の地域関係の活動を含め、連携を深めていきたいと考えている。

2023年「文京まちたいわフェス」への協力・本学での実施について

地域交流センター長 土居洋平

1. はじめに一団体及びイベントの概要

昨年度の本誌でも紹介しているが、「文京まちたいわ」は、文京区の街づくりに関わる有志による任意団体である。事務局を務めるのは、HONGO22515の管理人でもある竹形誠司氏で、通常は、本郷二丁目にあるコミュニティスペースHONGO22515にて定例の会合を行い、地域活動に関わる情報交換等を行っている。

この団体で、例年、半年に一度、まちづくり関係者の交流イベント「文京まちたいわフェス」を開催してきた。初回は2018年2月に行われ、2019年以降は冬（2月）と夏（8-9月）に実施してきた。会場は、コロナ禍以前は文京区総合福祉センター「リアン文京」を用いて行い、コロナ禍後は、本学で実施してきた。

2. 「文京まちたいわ」と本学の関わり

この「文京まちたいわ」には、2017年夏から筆者がミーティングに参加し、また、ゼミ生を中心にコミュニティデザイン学科の学生も会合に参加するようになり、その後葉地域交流センターの呼びかけにより、学部学科を問わず学生が参加している（本誌前号の記事にて詳細を記している）。

また、このグループで行っている交流イベント「文京まちたいわフェス」が、コロナ禍後から本学文京キャンパスで行うようになった。初回は、2022年2月11日の「文京まちたいわフェス2022・冬」であり、それ以降、2022年8月には「文京まちたいわフェス2022・夏」も本学で実施している（この点についても、本誌前号に詳細を記している）。

3. 「文京まちたいわフェス2023・冬」の実施

以上の経緯をもとに、2023年2月12日（日）に「文京まちたいわフェス2023・冬」を本学において実施した。当日は、本学文京キャンパス2号館3階全体を使う形で行われた。2022年に2回本学で実施した「文京まちたいわフェス」は、コロナ禍の影響もあり、2月については発表者のみが対面参加で一般参加者はオンライン参加であり、9月については一般参加も対面で行ったものの、密になることを避けるために広報等はそれほど積極的には行わず、参加者も総勢で80名程度であり、相互に距離を保てる形でのイベントの実施となった。

一方で、2023年2月12日（日）の「文京まちたいわフェス2023・冬」は、コロナ禍がひと段落し、集まることへの抵抗が減ったことを受け、集客も意識した形でイベントが企画された。具体的には、2022年と同様に午前中にトークセッション、午後にパフォーマンスセッションを行うのは基本と

して、午後はこれと並行して学生たちの企画による「子ども縁日」を開催し、また、近隣に広くチラシなどを配布して家族連れを中心に多くの来場者が来るよう企画を進めていった。

午前のトークセッションも、「音楽とまちづくり」をテーマにしたパネルディスカッションが企画され、まちづくり関係者に加えて、文京区内で音楽活動を行う人々にも参加を呼び掛ける形となった。また、セッションの基調講演を、音楽と地域づくりをテーマに卒業論文を書きあげたコミュニティデザイン学科4年（当時）の噴木真理さんに依頼し、卒論の成果を披露している。なお、この発表のもととなった卒業論文は、その後、学部の優秀卒業論文に選出されている。トークセッションには、文京区長も参加したほか、2022年度を超える約80名強の参加者があり盛況なものとなった。

また、午後の子ども縁日には、コミュニティデザイン学科の学生を中心に10名以上の学生が運営スタッフとして参加し、企画立案から当日の運営までを担った。また、運営や参加した子どもに提供する駄菓子については、2022年12月に文京区千石にオープンしたコミュニティスペース・コドモカフェオトナバー TUMMYの橋本菜生美氏の協力を得て行った。縁日は、輪投げなど4つのコーナーを準備し、約150組・300名の親子が参加するなど盛況であった。

さらに、子ども縁日に参加した親子は、そのまま3階廊下部分で行われた様々な音楽パフォーマンスを聴くとともに、M2306（ガラス張りの教室）で行っていたハンドクラフトワークショップにも参加することが多かった。子ども縁日からライブパフォーマンス、ワークショップへの回遊性が生まれ、常に賑わいのある空間となった。また、会場中央には「みんなで造る巨大アート」が設置され、子ども達もアート作成に大いに関わってもらうことができた。

ライブパフォーマンスも、クラシック奏者からバンド演奏など多彩なパフォーマンスが集い、最後は参加者全員での合唱も行われるなど、大変に盛り上がるものとなった。

「文京まちたいわフェス」は、文京区のまちづくり関係者が集い、交流を深め、かつ、様々なパフォーマンスも行われるイベントとして展開している。この開催場所を本学で実施することは、文京区のまちづくり活動においての本学のプレゼンスを高めるものであり、今後も、この活動への協力を行っていき



写真1：トークセッションの様子



写真2：子ども縁日の様子



写真3：パフォーマンスの様子

たいと考えている。

ただし、「文京まちたいわフェス」は、規模拡大により運営の負担も増しており、2023年夏は、単独での開催は行わず「文京思い出横丁」（於 傳通院）のなかでの開催となったため、本学での実施とはならなかった。ただ、この原稿を書いている2024年1月初旬現在において、2024年2月の「文京まちたいわフェス2024・冬」は本学での開催が予定されている。この企画・実施については、本誌次号において、また報告をしたい。

「菊坂謎解きマップ」制作—フィールドワークと研究の成果を活かして

川副早央里

1. はじめに

観光デザイン学科で観光地理学を専門とする本ゼミナールでは、今年度文京区を主たるフィールドとして、「文京区の観光」をテーマに調査研究を行ってきた。春学期は、本郷、根津、千駄木、大塚などをフィールドとして特徴的建造物に着目したフィールドワークを行った（栗生はるか兼任講師担当）。秋学期は、フィールドを菊坂地域に絞り、本郷地区や文京区全体の観光の在り方や課題を検討する調査研究を行った。同時に、そうした研究の知見を活かして、菊坂の魅力を観光客に伝え、良好な住環境も守ることを目指した観光マップ作りにも取り組んできた。本稿では、その菊坂地域の観光マップづくりの取り組みについて報告したい。

2. 菊坂謎解きマップ作成の経緯

本ゼミがフィールドとした菊坂地域は、本学が所有する文京区指定文化財の旧伊勢屋質店が立地する地域であり、樋口一葉をはじめとする数多くの文豪のゆかりの地でもある。秋学期のゼミでは、この菊坂をゼミ共通のフィールドに設定し、これまでのフィールドワークを経て学生たちが詳しくなった文京区内で、旧伊勢屋質店という観光資源をどのように活かすか、菊坂を観光地としてどのように発信することができるのか、観光地化に伴う課題は何かを検討することとした。

同時に、学生たちとゼミ活動について検討するなかで、学生たちから観光地理学のゼミでの学びを活かして地図を作成したいという提案があったことから菊坂地域の地図作り活動が開始した。学生たちは春学期から文京区内各所のまちあるきを行ってきており、地域について詳しくなったことや、また観光地理学という分野の特徴を確認するなかで「地図」というツールに関心を寄せたことが、地図作りのやる気を高めたようである。

調査研究および地図づくりを進めるために、まずは菊坂地域のまち歩きを行った。そのなかで、旧伊勢屋質店の見学、文京ふるさと歴史館の見学、歴史的・文化的スポット調査、菊坂エリアの飲食店の調査、路地調査などを行い、フィールドを多角的に分析し、地域の魅力と課題を検討した。その結果、菊坂には文豪の旧居跡や歴史的建造物などの観光資源や、路地や丘陵地の風景という地形や景観といった魅力がある一方で、戸建てや集合住宅が多く立地する良好な住宅街であることにも気づき、く魅力ある



写真1：街歩きの様子

観光地)と〈良好な住宅地〉をいかに両立させるかという課題が明らかとなった。

その後、文京区観光協会を訪れ、文京区に関してどのような観光地図が紙媒体として制作・配布されているのかを調査した。また、インターネット上でデジタルデータとして公開されている地図の収集も行った。その後ゼミ内でそれらの地図を持ち寄り、各地図のテーマ、紹介されている観光スポット、スポットの紹介方法、色使い、デザイン、大きさなど、いろいろな観点から地図の特徴を分析した。その結果、多くの地図が文豪や歴史に着目していること、同時に、同じ地域を対象とした地図であってもテーマや取り上げ方によって地域の見え方が異なることもわかった。

さらに、菊坂地域の観光地化について地域住民の視点から検討するために、菊坂町会のメンバーであり、菊坂地域でまち歩きを企画し実施している忍足俊氏にインタビューを行った。忍足氏からは、菊坂にはさまざまな歴史的・文化的魅力があること、住民の理解や信頼を得て観光まちあるきを行う必要があることなどが指摘された。

以上の調査を経て、各自が以下のようなテーマを設定し、レポートを作成した。そして、それぞれの研究結果と知見に基づいて、ゼミ全体で菊坂地域の観光地化について議論を深めた。

- ・清田絢美「菊坂におけるオーバーツーリズム問題から地域住民を守るための対策」
- ・高川瑠香「地図にみる菊坂の空間分析と観光の特徴」
- ・竹村侑華「菊坂地域住民に歓迎される観光を考える」
- ・筒井望結「文京区における外国人観光客誘致のための『温かい人・場所を繋いでいく観光』を岩手県盛岡市の事例から考える」
- ・渡辺葉月「文京区の根津エリアと菊坂エリアを比較し、菊坂の観光地化について考える」

3. 菊坂謎解きマップの特徴

ゼミ生のレポートと議論を踏まえた結果、今回制作した地図では「オーバーツーリズムへの配慮」「菊坂の新しい魅力発見」をテーマにすることを決めた。具体的には、①公園という一時休憩所の紹介、②周辺住民への配慮、③「謎解き」という遊びの要素を盛り込んだ地図を制作することを決めた。大きさは見開きA4サイズとした。



写真2：ゼミでの打ち合わせの様子



写真3：「謎解き」菊坂マップの表紙

デザインについては、本学および旧伊勢屋質店のイメージカラーである紫をテーマカラーとし、手書きによる手作り感を出すデザインとした。完成した「菊坂謎解きマップ」(写真3)は、旧伊勢屋質店をはじめ、関係者に配布して、地域住民および観光客にまち歩きを楽しんでいただきたいと考えている(謎解きの内容については実際に挑戦してご覧ください!)

4. おわりに

今回のゼミでは菊坂地域をフィールドとして、ゼミ生各自の関心や調査によって多角的なテーマ・視点で「観光地としての菊坂の課題と可能性」を検討することができた。そして、地図づくりでは、そうした知見を活かして菊坂における新しい観光の在り方を提案することができたのではないだろうか。上記の調査やテーマ以外にも、時間が許せば取り組みたかった調査や、今回は盛り込めなかったテーマなどもあり、反省や課題も残ったが、それらは今後の課題としたい。

それでも限られた時間のなかで地域に関する情報収集やインタビュー調査を行うことができたのは、本学がこれまでに菊坂の地域住民の方々と活動を通して交流を深めてきた経緯と蓄積があったからである。こうした引き継がれてきた地域とのつながりや研究の蓄積を活かし、学生の学びと地域連携を深めていきたいと考えている。

最後に、インタビュー調査や各種資料を提供してくださった忍足和俊氏に感謝申し上げます。



写真4：完成した謎解きマップと学生たち

銭湯から繋がる地域の輪

マネジメント学部マネジメント学科3年 古澤実怜

1. はじめに

本プロジェクトは「レトロの良さを現在に活かす」をテーマに掲げ、2022年8月1日からスタートした。跡見学園女子大学と拓殖大学の学生が文京浴場組合⁽¹⁾と共に、銭湯離れなどの課題に向き合い、銭湯と地域の繋がりを大学生の視点から深める活動を行っている。

プロジェクトの活動内容は「SNSの発信」および「イベントによる地域交流」の2つが挙げられる。SNSではX(旧Twitter)とInstagramを利用した発信を行っている。

メンバー一覧(五十音順)

飯塚菜乃子(跡見学園女子大学)	石田結菜(跡見学園女子大学)	井上凜(拓殖大学)
牛村凧沙(跡見学園女子大学)	大串恭平(拓殖大学)	加藤涼斗(拓殖大学)
國光ひな(跡見学園女子大学)	小林麗奈(拓殖大学)	清水颯太(拓殖大学)
ジョンウィヒョン(拓殖大学)	杉本秀太(拓殖大学)	鈴木開人(拓殖大学)
野寺朔斗(拓殖大学)	橋本妃奈(跡見学園女子大学)	平塚渉悟(拓殖大学)
古澤実怜(跡見学園女子大学)	別所マリア(拓殖大学)	松村純麗(跡見学園女子大学)
村中綾乃(跡見学園女子大学)	門戸智和(拓殖大学)	吉田雪乃(跡見学園女子大学)

2. 「行こうよ! 文京浴場☺~学生プロジェクト~」の活動内容について

(1) SNSでの発信

Xでは地元企業の方や他地域の浴場関係者の方をターゲットに、銭湯で行われる日々のイベント内容の案内、営業日・定休日の告知を投稿している。これにより、PR効果上昇、地域連携の強化に繋がっている。Instagramでは、若い世代をターゲットに浴場の種類や特徴をまとめた画像、また銭湯の入り方なども紹介している。加えて、プロジェクトの活動の様子も写真と共に投稿し、新規利用者獲得に努めている。

(2) イベントによる地域交流

学生が立案から実施まで行う企画を通じて、大学生と地域の方との繋がりを意識している。

1) オレンジフェスタ

2023年7月29日拓殖大学にて開催された子供イベント「オレンジフェスタ」(図1)にて、文京区の小学生以下を対象に文京浴場の広報活動



図1: オレンジフェスタの様子

を行った。銭湯を身近に感じてもらうため、対象者に合わせた銭湯にまつわるクイズを考案し、交流を深めた。パネルや暖簾、ポスター、銭湯の写真をまとめたスライドショーなどを活用し、銭湯の雰囲気味わってもらう工夫をした。その結果、多くの方に銭湯の良さを伝えることができた。今回限定で作成したチラシも約250枚配布し、地域の方との交流の場として非常に有益な時間を過ごした。

2) 銭湯を彩ろう♪ぬり絵イベント

2023年8月14日から9月14日までの1カ月間にわたり開催された「銭湯を彩ろう♪ぬり絵イベント」(図2)では、子供たちを対象に銭湯に関するぬり絵を配布した。ぬり絵を描いて各浴場入口に提示すると、景品と交換できるイベントを実施した。イベントの告知は、子供たちが利用しそうな児童館や図書館を中心に15店舗に設置されたチラシを通じて行い、約700枚が配布された。その結果、約50名の子供たちがぬり絵に取り組み、初めて銭湯を訪れた子供たちも多数いた。集まったぬり絵は各々の独自性が発揮され、素晴らしいアートワークとなった。



図2：銭湯を彩ろう♪ぬり絵イベントの様子

3) 大黒湯ミュージックフェス

2023年9月11日文京浴場の一つである大黒湯で開催された「大黒湯ミュージックフェス」(図3)では、文京区の地域住民の方と大学生が交流する機会となった。イベントでは、跡見学園女子大学のマンドリンサークルによる演奏と音楽ゲームが行われた。演奏では、銭湯に響き渡るマンドリンの音色に癒されるひとときを提供した。また、音楽ゲームでは誰もが簡単に理解できる内容で多くのコミュニケーションが取れ、楽しい期間が過ごせた。



図3：大黒湯ミュージックフェスの様子

4) 幅広いイベント活動

学生自ら考案した企画だけでなく、文京浴場の広報の一環として複数の地域イベントにも参加した。2023年9月23日には、「コドモカフェオトナバー Tummy」で子供向けに銭湯マナーに関する紙芝居を行った。双方向のコミュニケーションを心がけた結果、子供たちが積極的にクイズに参加し、楽しみながら学べたと感じている。

同様に、2023年11月18日には、文京区民センターで行われた「文京つながるメッセ」に参加し、『銭湯からつなげるぬくもりの輪』をテーマに現在の活動内容と地域の方との関わりについてプレゼンを

行った。全団体のプレゼンタイム後には他の団体との交流があり、有意義な時間を過ごすことができた。

さらに、地域テレビ局「東京ケーブルネットワーク」のYouTubeチャンネル「あらぶんちょ!チャンネル」では私たちの活動が取り上げられ、『大学生×文京浴場組合』の意外性を広める良い機会となった。

多くの方のご協力により、プロジェクトとして非常に充実した1年を過ごし、同時に銭湯の広報も拡大できた。

3. 今後について

今後の展望としては、これまで以上に地域の方との銭湯を通じた繋がりを深めていきたいと考えている。かつては必要不可欠であった銭湯も、現在では銭湯数の減少や入浴料の値上げなどにより、利用者が減少している。しかし、銭湯には多くの魅力があり、「地域交流の拠点」として極めて重要な役割を果たしている。銭湯の空間では全く知らない人同士でも自然な会話が生まれることもある。これらの繋がりを大学生の視点から考え、発展させていきたいと思っている。そのため、地域交流を促進させる取り組みやイベントを展開し、『銭湯から繋がる地域の輪』を広げていく。

注

(1) 文京区内にある4つの銭湯。大黒湯・ふくの湯・豊川浴泉・白山浴場。

菊坂跡見塾七夕まつり

水村美穂・川副早央里・黒木真悠・関鈴菜

1. はじめに

跡見「学芸員」in菊坂では2021年度より、文京区にあるMIRATZ本郷第二保育園と連携し、「菊坂跡見塾七夕まつり」を企画・開催してきた。2021年度は雨天中止となったが、2022年度に引き続き2023年度も無事開催することができた。本報告では、2023年度の菊坂七夕まつりの準備や開催内容について報告する。

実施メンバーは、川副早央里（跡見学園女子大学地域交流センター助教）、黒木真悠（同 文学部人文学科3年生）、関鈴菜（同 文学部人文学科4年生）、水村美穂（同 文学部人文学科4年生）である。

2. 菊坂跡見塾七夕まつりの開催

活動名：菊坂跡見塾七夕まつり

日時：2023年7月7日（金）10：00～20：00

場所：MIRATZ本郷第二保育園／旧伊勢屋質店

活動内容：①提灯づくり

②竹灯籠づくり

③笹の葉に飾りつけをする（短冊・七夕飾り）

④笹の葉・竹灯籠の展示

参加人数：23名（内訳：MIRATZ本郷第二保育園19名（園児12名、保育士7名）、跡見側4名（文学部3名、教員1名）

当初、菊坂跡見塾七夕まつりでは、①～③の飾りの制作および④展示の両方を旧伊勢屋質店で開催することが予定されていた。しかし、保育園の屋外活動の可否を決める環境省の暑さ指数が高く、園



提灯をつくる様子



制作した提灯



制作した竹灯籠

児らが菊坂跡見塾へ歩いて移動することができなくなったため、急遽保育園で以下①～③の制作活動を行うこととなった。

① 4～5歳児ははさみとのり、3歳児はのりを使い、色紙と割り箸で提灯の工作をした。

② 願い事を書いてきてもらった短冊と、七夕飾りを笹に飾りつけた。

③ 事前に半紙に描いてもらった絵を竹の筒に輪ゴムで留め、中に明かりを入れて竹灯籠を制作した。

飾り制作後は、保育園内で提灯と竹灯籠を鑑賞し、記念撮影を行った。こうしてMIRATZ本郷第二保育園での七夕まつり終了後、園児達が作成した②③を旧伊勢屋質店の前に展示した。竹灯籠は夜間ライトアップし、保護者の方々や地域の方々に公開した。

3. 菊坂跡見塾七夕まつりの成果とまとめ

学生側は、菊坂町会にお借りした法被を着て参加した。3歳児と4～5歳児のグループに別れ、学生と園児達、保育園の先生方でコミュニケーションを取りながら工作を開始した。子ども達はみんな手際がよく、個性溢れる素敵な提灯ができた。笹飾りや灯籠のライトアップも順調に進んだ。たくさんお話をしてくれる子や、お礼にダンスを見せてくれた子など、子ども達が様々に喜ぶ姿が見られた今回のイベントは大成功だったのではないかなと思う。

菊坂跡見塾の来館者も、子どもたちが作成した飾りを鑑賞し、七夕の短冊にも願いを書いて参加されていた。また、夜間も地域住民や保育園の子どもと保護者などが展示を楽しんでいかれたようである。

改善点としては、子ども達が持ち帰れたのは提灯だけだったことだ。生の竹を使用していた竹灯籠はカビが生える可能性があったことから展示後にそのまま処分することになった。せっかく作った竹灯籠が1日しか見られなかったことは少し勿体なかった。今後は素材を工夫して、子ども達の手元に作品を返せたら良いのではないかなと思う。

MIRATZ本郷第二保育園の皆さまご協力により、無事に2023年度の菊坂七夕まつりを終えることができました。この度は本当にありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



竹の葉・竹灯籠を展示した旧伊勢屋質店

時代まつりin文京における成果報告

小玉采奈・川副早央里・磯田みずき・黒木真悠・関鈴菜・山下真由子

1. はじめに

跡見「学芸員」in菊坂は、2023年11月3日に開催された全国藩校サミット文京大会記念事業「時代まつりin文京」に参加した。「全国藩校サミット」とは、各地域に息づいている藩校の伝統や精神を現代の視点で見直して評価し、次世代に生かしていこうという趣旨で2002年（平成14年）から毎年、旧藩校所在地の持ち回りで開催されている。今回の「時代まつりin文京」は、第20回全国藩校サミット文京大会を記念して開催された。開催場所は、徳川家ゆかりの地として知られる傳通院である。

祭り当日は、小学生を始めとしたおよそ200名が、文京区の街を700mに渡り練り歩くイベント等が開催され、子供たちで賑わうことが予想された。そこで、跡見「学芸員」in菊坂は、子供たちに向けた縁日出店として缶バッジづくりと輪投げのブースを設置することになった。

2. 事前準備と祭り当日の様子

(1) 事前準備の背景

事前準備は、川副早央里（跡見学園女子大学地域交流センター助教）を中心として跡見「学芸員」in菊坂から3名の学生が行った。

10月初頭から出店に関する話し合いが始まった。出店内容は、特に指定がなかった為、何の出店をするか決定するところから始まり、1から準備する形となった。他の団体の出店との兼ね合いや運営のしやすさ、対象者が小学生ということを考慮し、缶バッジづくりと輪投げを企画するに至った。

準備の段階で工夫した点がいくつかある。輪投げに関しては、駄菓子を景品とすることになり、輪に入った数に比例して、より多くの駄菓子をもらえるというルールにすることで達成感を感じてもらえる



事前準備の様子



制作した缶バッジ用のイラスト



祭り当日の様子



参加した学生の記念写真

ようにした。また、小学生は、低学年と高学年で体格差がある為、輪投げの難易度を調整する必要があり、輪投げのピンの配置や輪を投げる立ち位置に気を使った。缶バッジづくりに関しては、塗り絵と白紙に絵を描いてもらうタイプの二種類を設け、子供たちが好きなものを選ぶように工夫した。塗り絵も学生が作成し、子どもが好みそうな動物や恐竜などのほか、「時代まつり」に合わせて樋口一葉や忍者のイラストも用意した。看板作成では難しい漢字を使用することは避け、できるだけ小学生が自ら理解できるようにした。全体を通して、小学生に楽しんでもらえることを念頭に置き準備を進めた。

(2) 祭り当日の様子

開催当日は、事前準備のメンバーのほかに跡見「学芸員」in菊坂から2名と観光デザイン学科川副ゼミから5名の学生が加わり出店の運営にあたった。

祭り開催と同時に多くの方が来場し、缶バッジと輪投げの出店にも、多くの子供たちで賑わった。事前準備の段階で想定していた来場者よりも大きく予想を上回り、輪投げは、開店1時間ほどで景品の駄菓子が品薄になり追加で買い出しに行くほどだった。缶バッジづくりのブースも多くの子供たちが訪れ、塗り絵を行うスペースは常に満員の状態だった。

当日気づいた反省点は、人の流れが悪くなってしまったことである。机や椅子の配置は、当日決定した為、テントの中が混雑してしまった為、人の流れを意識して事前に考えておくべきであった。

3. むすび

今回のように、1から出店を作り上げることは学生にとって貴重な経験となった。事前準備では、様々な工程を経た為、段取りがつかめられたものも多かった。当日は、子供たちの楽しそうな姿を見ることができ、やりがいを感じられた。缶バッジづくりでは、親子で作業する様子も見られ、少しでも思い出に残る時間になっていれば嬉しく思う。また、出店に参加してくれた子供たちに跡見学園女子大学のグッズと跡見「学芸員」in菊坂のパンフレットを差し上げたことで広報活動にも繋げることができた。この経験は、学生にとって今後も役立つものになったに違いない。

末筆ではございますが、このような機会を設けていただいた全国藩校サミット文京大会記念事業「時代まつりin文京」の皆様には感謝を申し上げます。

参考URL

- ・文京区「第20回全国藩校サミット文京大会」<https://www.city.bunkyo.lg.jp/bunka/gejutsu/hankosummit.html>
(最終閲覧 2024年1月8日)

第4回「文の京書道展」開催報告

文学部人文学科教授 横田恭三

はじめに

パンデミックに陥ったコロナ禍がようやく終息期を迎え、昨年度から通常の展覧会活動ができるようになりました。今回、令和5年7月に開催した第4回「文の京書道展」を報告致します。

これまで文京シビックホールの地下1階にある展示スペース「アートウォール・シビック」を使用しながら、本学学生・文京区民・本学の書道教員・首都圏の高校生・海外の学生および教員の作品を一堂に展示してきました。シビックホールの会場は、若手の作家のために開放することを目的

としているため、無料で使用でき、抽選なども設定されていないため、会場を予約しやすいという利点がありました。しかし、「若手の作家に開放」という観点から、年齢制限が設けられていたため、年齢の高い文京区民や書道教員の作品は展示できませんでした。したがって、昨年度の第3回展は、「アートウォール・シビック」に本学学生の作品だけを展示し、それら以外はたまたまキャンセルで空きのできた展示専用会場を使用しました。

こうした煩わしさを解消する方策を検討していましたところ、令和5年4月からオープンした「大塚地域活動センター」(茗荷谷駅から徒歩1分の中央大学茗荷谷キャンパス2階)のオープンスペースを使用できることがわかり、本学の地域交流課を通して使用申請しました。その結果、7月に10日間にわたって使用することができました。

以下、開催概要、出品作品の詳細、総括と今後の方針について報告します。



書道展会場入口

1. 跡見学園女子大学主催 第四回「文の京書道展」開催概要

目 的: (1) 本学の書道を愛好する学生の育成と発表機会の提供
(2) 本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供

会 場: 文京区立大塚地域活動センター 2階 オープンスペース

展示期間: 7月5日(水) 午後1時 ~ 7月14日(金) 午後4時

作品点数: 45点

予 算：地域交流センター予算

搬 入：7月5日(水) 10:00～12:00

搬 出：7月14日(金) 16:20～17:00

出 品 者

- ① 本学書道実習受講者および本学書道愛好者で出品を希望する者(16名)
- ② 文京アカデミア書道講座受講生 19名(表装代はアカデミア講座で支出)
- ③ 有力高校書道生徒優秀作品 6点
- ④ 書道科教員(非常勤を含む) 4点 計45点

タイムスケジュール

4月下旬：書道実習担当教員へ依頼文、学内広報、ポータルに掲載。

→ 出品希望を募る →

新座Cの学生は6月14日(水) 締め切り(書道科に提出)

文京Cの学生は6月16日(金) 締め切り(同上)

6月17日(土) 表具店へ送付 → 2週間後に表装された作品が返送される。

7月5日(水) 10:00～ 展示作業

作業は書道科教員(横田)のほか、地域交流センター職員等

7月14日(金) 16:20～ 搬出作業

作業は書道科教員(横田)のほか、地域交流センター職員等

この「文の京書道展」は、第3回展報告でも述べたように、展覧会の性格上、一般にいう地域交流というよりも、文京区民と本学の学生の作品を通して行った書道文化交流の一端だと考えています。これは文京アカデミア講座が発端となっています。したがって、文京アカデミーのバックアップを受け、アカデミア書道講座に参加した文京区民の方々の作品と本学学生の作品を同時に展示する合同書道展とってよいでしょう。

2. 展示会場に掲載した「挨拶文」

跡見学園女子大学主催 第四回〈文の京書道展〉

跡見学園女子大学主催 第四回〈文の京書道展〉を開催します。

展示は ①本学学生有志 ②文京区アカデミア講座受講生作品(テーマは隸書)

③首都圏の高等学校生徒作品 ④本学書道教員作品 を展示しています。

高校生から熟年に至るまでの幅広いメンバーによる作品の豊かな書表現を楽しんでいただければ幸甚です。

ご高覧のほど、宜しく願い申し上げます。

令和五年七月吉日

跡見学園女子大学書道科 横田恭三

3. 出品者および作品・コメント一覧（敬称略）

〈跡見学園女子大学有志の作品〉

- ① 人文学科3年 牧嶋倫子（綺陽） 臨〈嬰宝子碑〉 「弱冠称仁。詠歌朝郷。在影嘉和。」
筆の入り方（起筆）を意識して書きました。
- ② 人文学科3年 宮崎愛実 臨傅山〈行書五言古詩巻〉 「觚青丈五十二歳。而拳一六陰朝陽之兒。
詒書属一言。以快万事之足。而所歴叙十年來所。」
行の余白を残し、すっきりさせ、線の強弱を意識して書いた。
- ③ 人文学科3年 小椋麗央奈（深泉） 臨〈高貞碑〉 「我徳如風。物応如響。弱冠以外戚令望。」
如の「口」や響の「日」の右上の角を削るように意識して臨書しました。
- ④ コミュニティデザイン学科1年 鈴木花梨 創作 七言詩
秋山破夢風生樹 夜水明楼月在湖 文字の表情や動きを出すのに苦労した。
- ⑤ 人文学科2年 青山楓 臨小野道風〈屏風土代〉 「斎蓄顔对澄江庭 是洪鍾独待撞。」
画数の多い字と他の字とのバランスをとることに苦労した。
- ⑥ 人文学科2年 結城咲来 臨顔真卿〈祭姪文稿〉 「魂而有知、無嗟久客。嗚呼哀哉。尚饗。」
潤渴を意識して書いた。顔真卿の特徴をとらえて書くのは苦労したが、書くのは楽しかった。
- ⑦ 人文学科4年 権田彩瑠 臨〈石門頌〉 「八方所達、益域為充。高祖受命、興於漢中。」
うねりや掠れ、力強くも素朴な雰囲気を意識しました。
- ⑧ コミュニケーション文化学科2年 前田友紀恵 臨劉墉〈文語軸〉
「蒸以靈芝。潤以醴泉。睇以朝陽。綏以五絃。無為自得。体妙心元。忘歎而後樂足。遺生（…）」
文字をできるだけ小さく書くことを意識しながら文字全体のまとまりを崩さないようにしました。
- ⑨ マネジメント学科2年 三橋千晴 臨〈集王聖教序〉 「徳被黔黎。斂衽而朝万国。恩加朽骨。」
- ⑩ 生活環境マネジメント学科2年 門馬陽菜 臨〈伊都内親王願文〉 「側聞惟父惟母慈之悲之者彼
無上大覺為津為梁提之濟者此者無価菩提故有補。」
墨の量を調節し、文字・線の変化を楽しんでもらえるように意識しました。湯筆を出すのに苦戦しました。
- ⑪ 人文学科3年 林田美咲 臨〈孫秋生造像記〉 「金暉誕照於聖歳。現世眷属。万福雲帰。沫輪置駕。
元世父母。及弟子等。来身神騰九空。迹登十地。」
造像記らしい作品を書けるよう、筆法を意識して臨書しました。特に行間を美しく見せられるよう
に心掛けました。
- ⑫ 人文学科2年 小國美奈希 臨趙孟頫〈前赤壁賦〉 「清風徐來。水波不興。举酒属客。誦明月之詩。
歌窈窕之章。少焉月出于東山之上。徘徊於斗牛之間。」
この作品は線の強弱がはっきりしていたため、一字一字力の入れ具合を工夫しながら書きました。
- ⑬ 人文学科2年 藤原悠 臨蘇軾〈次辯才韻詩〉 「來如珠還浦。魚鼈争駢頭。此生慙寄寓。常恐名実浮。
我比陶令愧。師為遠公優。送我還過溪。」
半切に縦3行で書く際、行が曲がらないように心がけました。画数の多い字、少ない字のバランス
を考えて、全体を通して見やすさを意識しました。
- ⑭ 人文学科4年 中島礼乃 臨〈継色紙〉 「やまざくら かすみのまより ほのかにも みてし人こ

そ こひしかりけれ あしひきの 山した水の こがくて たぎつこころを せきぞかねつる」
 一文字の中で線の太細がはっきりとつくように意識しました。線の動きを出すことが今後の課題です。

- ⑮ 現代文化表現学科4年 羽生真衣 臨〈曹全碑〉「先意承志。存亡之敬。礼無遺闕。是以郷。」
 伸びやかで動きのある払い(波磔)を意識して書きました。
- ⑯ 生活環境マネジメント4年 川目実咲 臨王羲之〈蘭亭序〉「会于会稽山陰之蘭亭。脩禊事也。群」
 上下左右のバランスと文字の流れに気をつけながら書いた。



本学学生の作品

〈アカデミア講座生作品〉

アカデミア講座は、5月11日から6月15日までの6回講座(10:30~12:10)で行った「私も書ける“隷書”に挑戦!」というタイトルの講座です。そこで制作した隷書四字句を軸装にして展示。講座に参加した20名中19名の方々が出品されました(名簿は省略)。

〈高等学校の招待作品〉

- ① 川越南高校 3年 黒田寿々里 臨〈歐陽詢 行書千字文〉
 「天地玄黄 宇宙洪荒 日月盈昃 辰宿列張 寒來暑往 秋收冬藏 閏餘成歲 律呂調陽
 雲騰致雨 露結為霜 金生麗水 玉出崑岡 劍號巨闕 珠稱夜光 果珍李柰 菜重芥薑
 海鹹河淡 鱗潛羽翔 龍師火帝 鳥官人皇」
 のびやかでメリハリのある表現ができるように右上がりの字形やリズムある運筆を意識して書きました。
- ② 川越南高校 3年 荒井涼葉 臨〈曹全碑〉「武威長史・巴郡胸忍令・張掖居延都尉。曾祖父述。
 孝廉・謁者・金城長史・夏陽令・蜀郡西部都尉。祖父鳳。」
 丸みのある優しい書風と横に長く伸びた字形に惹かれたため、この古典を臨書しました。
- ③ 埼玉県立大宮光陵高等学校 3年 牧野朱莉 臨〈吳昌碩臨 石鼓文〉
 「田車孔安。鑿勒馬@。四介既簡。左驂播々。右驂鍵々。避以隳于@。避戎之@。宮車其寫。」(@は

外字。現代使用しない文字)

線の太細の変化や余白の取り方を工夫し、力強くもすっきりとした印象になるように制作しました。

④ 東京都立板橋有徳高等学校 3年 高ななみ(虹美) 臨楊峴〈書軸〉

「向空擲之。化為大橋。其色如銀。請明皇同登。約行數里。精光奪目。寒氣侵人。遂至大城關。」

今回作品を制作するにあたり、楊峴の最大の特徴である震えを意識しました。また、左払い等の太細に変化をつけ、様々な表現を取り入れました。

⑤ 星野高等学校 3年 角葵衣 臨 趙之謙〈汜勝之書八屏〉

「凡耕之本、在于趣時和土、務糞沢、早鋤早獲。春凍解、地氣始通、土一和解。夏至天氣始暑、陰氣始盛、土復解。夏至後九十日、晝夜分、天地氣和。以此時耕田、一而当五、名曰膏沢、皆得時功。春地氣通、可耕堅硬強地黑墟土、輒平摩其塊以生草、草生復耕之。」

一筆が太く迫力のある書体なので、その特徴をつかみながら丁寧に書きました。特に起筆は堂堂と力強くし、収筆は力を抜きすぎず、払いにも重みをもたせられるよう意識しました。

⑥ 跡見学園高等学校 3年 飯塚仁咲 創作〈古今和歌集〉より

「春雨に にほへるいろも あかなくに 香さへなつかし 山吹の花」



本学教員(正面左側2点)、高校生(正面右側4点)とアカデミア講座受講生(左側の四字句5点)の作品

〈書道科教員賛助出品〉

① 本学兼任講師 森岡 隆

「より来たり薄れてきゆる水無月の雲たえまなし富士の山邊に」 (牧水歌)

ちょうど百年前の大正12年(1923)に刊行された若山牧水(1885~1928)の第十四歌集『山桜の歌』所収歌。十字交えた漢字が下半に集中しましたので、重くならないように留意しました。

② 本学兼任講師 津田好一(貞巖) 創作「視聽之娛」

王羲之〈蘭亭序〉の語句をもとに創作しました。

- ③ 本学兼任講師 伊藤亜美(亜穹) 創作劉嗣綰「雑詩(其一)」
 「浮雲相互倏忽 日在高楼旁 楼高不可極 欲上愁傍徨 我思遠莫致 所感輒莽蒼 景光亦已變 時運安能常 胸中有車輪 繞屋成羊腸」
 時の流れがはやく感じられます。日々を大切に感謝して過ごしたいです。
- ④ 本学教授 横田恭三(閑雲) 創作 「三益友 益者三友、損者三友。友直、友諒、友多聞、益矣。」
 『論語』に「人が交わって益のある三つの友とは、直・諒・多聞である」という。良き友人は人生の財産。



本学学生(左側8点)・教員(右側2点)の作品

4. 展覧会の総括と今後の方針

今回で第4回を迎えた「文の京書道展」ですが、文京区アカデミア講座受講生・首都圏の書道有力高校生ならびに本学書道科教員の作品展示とともに、本学学生の作品を加えることで、本学学生のレベルアップを図ってきました。本学学生の出品者は16名でしたが、文学部人文学科のみならず、幅広い学部学科からの参加がありました。その目的においては一定の成果があったものと思われま

す。今後の方針について、以下の3点に集約しました。

- (1) 文京区アカデミア講座生の出品を視野に入れつつ、上記コンセプトの展覧会を継続する。
- (2) 文京区の協力を得ながら、当書道展が掲げている目的を今後も維持する。
- (3) 会場を文京シビックホールから茗荷谷の大塚地域活動センターに移したが、今後も継続して使用する。

なお、上記3の大塚地域活動センターは入口がやや分かりにくいので、どのようにして多くの方々に見学してもらえるかが一つの課題となっています。

最後になりましたが、これまで地域交流課の絶大なるサポートをいただき、ここまで歩みを進めていくことができました。とりわけ大塚地域活動センターと密に連絡を取り、展示作業全般にご尽力いただいた地域交流課の小又さんには大変お世話になりました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

菊坂跡見塾所蔵資料調査報告（4）

川副早央里・山上真由子・新垣夢乃・磯田みづき・大屋恵実子・黒木真悠・
小玉采奈・鈴木みづき・関鈴菜・中川大資・長根旭美・弘真生・渡邊菜月

1. 本稿の目的

跡見「学芸員」in菊坂は、2020年度から、旧伊勢屋質店に残る生活用具の調査を行ってきた（新垣・大櫛・菊池・末吉ほか2021、磯田・伊藤・大櫛・菊池ほか2022、秋谷・新垣・井田・磯田ほか2023）。今年度も継続して調査を行ってきた。

本稿では、2023年4月以降行った菊坂跡見塾所蔵資料調査の成果について報告する。

2. 調査の概要

今年度の調査は、跡見「学芸員」in菊坂として活動するメンバーのうち13名（教員2名、4年生2名、3年生5名、2年生3名、1年生1名）で菊坂跡見塾所蔵資料調査を実施した。所属大学や学部学科、学年についてはメンバーは表1の通りである。

今回報告するのは、2023年4月1日から2023年12月20日の期間に実施した調査の成果である。

これまでの調査では旧伊勢屋質店の「座敷」および「茶の間」に所蔵されていた資料の調査を実施し、昨年度中にそれらの調査は完了していた。昨年度は「茶の間」に隣接する「台所」の調査を開始したところであり、今年度も継続して「台所」の調査に取り組んだ。調査時は、資料に資料番号を付したタグを取り付け、それぞれの資料について「菊坂跡見塾資料調査情報カード」を記入、資料をデジタルカメラで撮影し、EXCELにてデータ入力を行った。

表1 調査に参加したメンバー

川副早央里（跡見学園女子大学 地域交流センター助教）	山上真由子（同 文学部人文学科3年）
関 鈴菜（同 文学部人文学科4年）	小玉采奈（同 文学部人文学科2年）
渡邊菜月（同 文学部人文学科4年）	鈴木みづき（同 文学部人文学科1年）
磯田みづき（同 文学部人文学科3年）	新垣夢乃（神奈川大学国際日本学部歴史民俗学科教員）
黒木真悠（同 文学部人文学科3年）	大屋恵実子（同 国際日本学部歴史民俗学科2年）
長根旭美（同 文学部人文学科3年）	中川大資（同 国際日本学部歴史民俗学科2年）
弘 真生（同 文学部人文学科3年）	



写真1：調査の様子



写真2：調査の様子

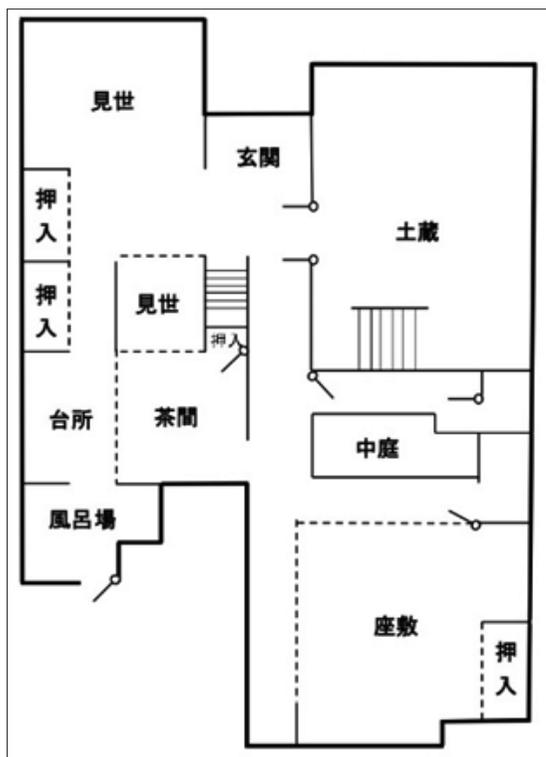


図1：菊坂跡見塾1階の見取り図

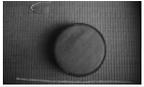
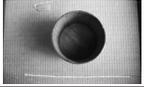
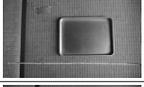
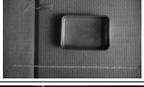
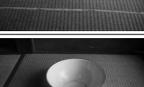
菊坂跡見塾資料調査情報カード				記入日：2020年 月 日	
資料番号					
ふりがな				点数	
名称					
法量	縦	横	高	径(φ)	cm
材質	植物	紙 木()		竹 他()	
	土石	土() 石() セメント ガラス 陶器 磁器			
	金属	鉄 鋼 銅 青銅 真鍮 アルミニウム ジュエルミン			
		ステンレス 銅合金 他()			
	合成樹脂	プラスチック セルロイド ゴム ビニール ナイロン 他()			
その他					
時代	作成・使用		年代		
項目分類				形態分類	
収蔵場所					
作者					
備考					
記入担当					
写真撮影 <input type="checkbox"/> カード確認 <input type="checkbox"/> データ入力 <input type="checkbox"/> 再調査 (要・不)					

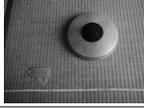
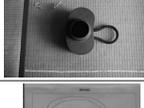
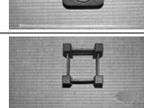
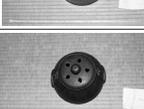
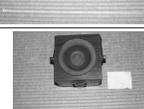
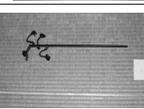
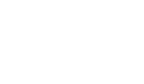
図2：菊坂跡見塾資料調査情報カード

3. 調査結果

2023年度の調査では、32点の資料を調査することができた。詳細は表2の調査資料目録に記載した通りである。今回は、台所における調査を実施したため、釜や櫃などの台所用品を確認することができた。また、羽釜だけではなく、電気釜やアイロンなどの電化製品も複数確認された。

表2：調査資料目録

資料番号	名称	ふりがな	点数	法量	材質	備考	写真
174	櫃	ひつ	2	高20.0× 径27.0cm	木、 銅	たがの部分は銅の可能性あり（青緑色の錆あり）	
174-1	蓋	ふた	1	高5.8× 径27.0cm	木、 銅		
174-2	櫃	ひつ	1	高19.2× 直径23.7cm	木、 銅		
175	羽釜	はがま	2	高36.7× 直径37.8cm	木、 鉄	「30 糶」と記載あり。つばの所に「標準釜」との刻印あり。	
175-1	蓋	ふた	1	高11.4× 径32.0cm	木		
175-2	羽釜	はがま	1	高25× 径37.8cm	鉄	「30 糶」と記載あり。つばの所に「標準釜」との刻印あり。	
176	木箱	きばこ	1	縦24.0× 横12.0× 高2.5cm	木		
178	手燭	てしよく	1	縦17.8× 横8.9× 高8.8cm	金属	蝋の付着あり	
177	升	ます	1	縦17.0× 横17.0× 高9.1cm	木、 鉄	刻印4か所。裏「東京樽制」側面「一生」	
178	金属の入れ物	きんぞくの いれもの	2	縦29.5/32.5× 横21.0/23.5× 高5.7/2.2cm	ステン レス		
178-1	金属の入れ物	きんぞくの いれもの	1	縦32.5× 横23.5× 高2.2cm	ステン レス		
178-2	金属の入れ物	きんぞくの いれもの	1	縦29.5× 横21.0× 高5.7cm	ステン レス		
179	ボウル	ぼうる	2	縦27.9× 横27.9× 高8.0× 径27.9cm	ガラス、 鉄、 アルミ ニウム		
179-1	ボウル	ぼうる	1	縦27.9× 横27.9× 高8.0× 径27.10cm	ガラス、 鉄、 アルミ ニウム		
179-2	ボウル	ぼうる	1	縦28.0× 横27.9× 高8.0× 径27.9cm	ガラス、 鉄、 アルミ ニウム		
180	アイロン	あいろん	1	縦9.5× 横19.0× 高9.0cm	鉄、 プラス チック		

181	盆	ぼん	1	縦47.0× 横36.6× 高4.0cm	木		
182	電気釜	でんきがま	1	縦25.0× 横31.0× 高24.0× 径24.0cm	金属、 プラス チック	三菱自動電気釜NA-155形100V550W、 150炊三菱電機株式会社	
182-1	電気釜蓋	でんきがま ふた	1	縦21.0× 横21.0× 高6.0× 径21.0cm	アルミ ニウム、 プラス チック	三菱自動電気釜NA-155形100V550W、 151炊三菱電機株式会社	
182-2	電気釜鍋	でんきがま なべ	1	縦23.5× 横23.5× 高13.0× 径23.5cm	アルミ ニウム	三菱自動電気釜NA-155形100V550W、 152炊三菱電機株式会社	
182-3	電気釜	でんきがま	1	縦23.0× 横30.0× 高19.0× 径23.0cm	金属	三菱自動電気釜NA-155形100V550W、 153炊三菱電機株式会社	
183	酒燗器	しゅかんき	1	縦28.4× 横23.0cm	金属		
184	花器	かき	1	縦25.0× 径33.5cm	銅		
185	酒燗器	しゅかんき	1	縦10.1× 横14.5× 高12.0cm	金属		
186	不明	ふめい	1	縦14.8× 横14.8× 高14.5cm	木		
187	金庫	きんこ	1	縦24.5× 横36.0× 高15.0cm	金属		
188	天火 オープン	てんぴ おーぶん	1	縦27.0× 横33.0× 高27.5cm	金属		
189	金庫	きんこ	1	縦21.0× 横29.5× 高12cm	スチール		
190	やかん	やかん	1	高28.0× 径16.0cm	金属		
191	茶釜	ちゃがま	1	縦17.0× 横16.0× 高18.0× 径17.0cm	金属		
192	灰皿付き 引き出し	はいざらつき ひきだし	1	縦17.0× 横17.5× 高16.5cm	木、 金属		
193	きぬばかり	きぬばかり	1	縦36.7× 横8.4× 径0.8~0.9× 金具1.1(2.3)cm	木、 金属		

4. 菊坂跡見塾所蔵資料調査に関する地域連携活動

(1) 台帳修復

今年度の資料調査の一環として、文京区内にある株式会社文化財ユニオンおよび株式会社上田墨縄の協力のもと、破損が著しい旧伊勢屋質店柳町支店質物台帳の修復作業を実施した。その際、学芸員のメンバーも参加させていただき、古文書修復のレクチャーを受けるとともに、実際に修復作業に挑戦させていただくことができた。参加した学生の感想を一部紹介する。

「裏打ち」と呼ばれる、破損していたり脆くなっていたりする古文書を補強する作業を行いました。どのような道具を用いるか、糊はどのような物を使いどう作るのか、その道具らは実際の文化財修復の現場ではどういった事に用いられているのかということや、裏打ちの手順などを丁寧に教えて頂き、貴重な経験をすることができました。目の前で解説を頂きながら手順を見せていただき、その後すぐに作業に移ったにも関わらず、実際にやってみると想像以上に難しく、非常に気力と経験が必要になる作業でした。去年の実習に参加していた学生もいましたが、糊を塗った和紙を古文書に貼る作業は特に全員難渋し、修復という仕事を担う方々の偉大さを身にしみて感じました。」



写真3：古文書修復のレクチャーを受ける様子



写真4：古文書修復作業を実践する様子

(2) 菊坂子ども歴史探検隊「発見されたうつわの破片は何時代のもの!？」

今年度は、こうした菊坂跡見塾で取り組む学芸員の活動について、地域住民をはじめ外部の方にも知ってもらおうと、2023年8月20日（日）に菊坂町会の協力を得て開催した菊坂子ども歴史探検隊「発見されたうつわの破片は何時代のもの!？」の一部として、「学芸員課程の学生たちと生活用具の調査に挑戦」というプログラムを実施した。詳細は、本誌にて報告しているのでそちらを参照されたい。なお、上述した調査資料目録にはこのイベントにて参加者が記録した資料も一部含まれている。

以上、今年度に実施した菊坂跡見塾所蔵資料調査およびそれに関連する地域連携活動について報告した。今後も調査を継続することはもちろん、資料の保存や修復、調査結果の発信など、多角的に跡見「学芸員」in 菊坂の活動を継続していきたい。

謝辞 本活動は、生涯学習開発財団の研究助成を受けて実施されたものです。

引用文献

- ・新垣夢乃・大櫛優理・菊地春姫・末吉はづき・服部胡桃・松尾映里奈・松延咲季・森本千桜・渡邊菜月、2021、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告」『ゆかり』2、P.59-70.
- ・磯田みずき・伊藤奈々・大櫛優里・菊地春姫・清水麻衣・末吉はづき・服部胡桃・松延咲季・黛沙也加・水村美穂・森本千桜・山岡沙織・若曽根南美・渡辺恵未・渡邊菜月、2022、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(2)」『ゆかり』3、P.74-83.
- ・秋谷香菜子・新垣夢乃・井田百香・磯田みずき・鬼塚未奈・黒木真悠・小嶋美優・小山凧咲・中井結子・黛沙也加・水村美穂・山岡沙織・山下真由子・渡辺恵未・渡邊菜月、2023、「菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(3)」『ゆかり』4、P.119-126.

質屋の記録 ～見えてくる昭和初期の暮らし～ 企画展開催記録

黒木真悠・川副早央里・新垣夢乃・関鈴菜・渡邊菜月・磯田みずき・小山風咲・長根旭美・
弘真生・小玉采奈・鈴木みづき・大屋恵美子・中川大資・渡辺恵未

1. 企画展開催の経緯と概要

本大学が所有する旧伊勢屋質店は、1982（昭和52）年まで文京区本郷菊坂で営業していた質屋である。この建物は、本学所有になってから「菊坂跡見塾」と名を変え、学生有志団体の跡見「学芸員」in 菊坂が活動拠点とし、さまざまな活動を行っている。

旧伊勢屋質店には、質店が営業していた当時に使用されていた『質物台帳』が残されている。『質物台帳』には質入れ品や質入れ人の住所などが記述されている。この『質物台帳』を調査することで、質屋の仕事や質屋に通っていた人の様子など、当時の状況を垣間見ることができる。

今年度、跡見「学芸員」in 菊坂では「質屋の記録～見えてくる昭和初期の暮らし～」という企画展を開催した。本企画展は、上記の旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）に所蔵されている『質物台帳』の翻刻調査結果をもとに実施したものである。

参加メンバーは14名であり、企画、『質物台帳』の翻刻調査、展示パネルの作成、広報、会場設営、企画展中の運営や解説を行った。今回は、昨年度まで跡見学園女子大学に在籍し、跡見「学芸員」菊坂にも関わっていた新垣先生が神奈川大学へ異動されたため、その縁で同大学国際日本学部歴史民俗学科より学生2名も参加した。また、昨年まで跡見「学芸員」in 菊坂へ学生として参加し、今年度からはテイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部の社員となった卒業生も参加している。本企画展を開催するにあたり、その準備期間や企画展開催期間の活動状況を「台帳プロジェクト」と称した。跡見「学芸員」in 菊坂のSNSや神奈川大学国際日本学部のnoteにて活動記録を連載した。

企画展概要

タイトル：「質屋の記録～見えてくる昭和初期の暮らし～」
会 期：2024年2月18日（日）～24日（土）12時～16時
会 場：旧伊勢屋質店（文京区本郷5-9-4）
企 画：跡見「学芸員」in 菊坂
主 催：跡見学園女子大学地域交流センター
協力：神奈川大学歴史民俗学科学生・教員有志
来館者数：283名
メンバー一覧：
川副早央里（跡見学園女子大学地域交流センター助教）
新垣夢乃（神奈川大学国際日本学部歴史民俗学科助教）
関鈴菜（跡見学園女子大学文学部人文学科4年）
渡邊菜月（同文学部人文学科4年）
磯田みずき（同文学部人文学科3年）

黒木真悠 (同文学部人文学科3年)
 小山凧咲 (同文学部人文学科3年)
 長根旭美 (同文学部人文学科3年)
 弘真生 (同文学部人文学科3年)
 小玉采奈 (同文学部人文学科2年)
 鈴木みづき (同文学部人文学科1年)
 大屋恵実子 (神奈川大学国際日本学部歴史民俗学科2年)
 中川大資 (同国際日本学部歴史民俗学科2年)
 渡辺恵未 (テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部)

2. 『質物台帳』翻刻調査

2-1 概要

今回翻刻した『質物台帳』は旧伊勢屋質店に所蔵されている、1932 (昭和7) 年から1945 (昭和20) 年まで営業していた同質店柳町支店のものである。今回、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部協力のもと、本資料を一から読み解き、『質物台帳』の内容を調査・分析した。

2-2 方法

『質物台帳』の翻刻調査は、「台帳プロジェクト」に参加している全員で実施した。翻刻の作業を通して生データに触れることにより、各自が当時の状況を分析し想像することで、何をデータから読み取り展示で伝えるかを考えられるようにするためである。翻刻作業を行うにあたり、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部にて『質物台帳』の写真撮影を行い、デジタルデータ化の作業を行った。その写真資料をメンバーで分担して、1文字ずつ解読し、その内容をExcelにまとめ、翻刻データを作成した。

このデータに基づき、各自がテーマを決めて分析し、展示パネルを作成した。

2-3 結果

調査を行った期間は2023年5月13日から10月10日である。その間に作成したデータは1937 (昭和12) 年11月9日から1938 (昭和13) 年1月25日の分である。



『質物台帳』写真撮影の様子



翻刻講座の様子

2-4 翻刻講座の実施

翻刻を実施するにあたり、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部より講師をお招きし、『質物台帳』の翻刻方法や記述してある内容の説明などを教えていただく講座を実施した。講座は、8月7日、8月20日、8月28日、8月31日の計4回実施した。7日、28日、31日は矢野美沙子先生に、20日は清水正彦先生より指導を受けた。この講座の結果、翻刻のスピードや精度が向上したほか、『質物台帳』の内容について理解を深めることもできた。

3. 企画展

3-1 概要

企画展は、2024年2月18日から2月24日まで旧伊勢屋質店で開催した。企画展タイトルはプロジェクト参加メンバーで案を出し、決定した。企画展の準備にあたり、参加メンバーを「質屋とは何か」というテーマを担当する「導入グループ」と、「当時の人はどのような着物を着ていたか」というテーマを担当する「着物グループ」に分け、展示企画の構想や展示パネルの作成を行った。



企画会議の様子

3-2 展示パネルの制作

企画展の展示パネルは参加メンバーがそれぞれ1枚以上執筆を行った。パネルの制作期間は3ヶ月である。パネルの制作にあたり、着物グループでは旧伊勢屋質店の近隣にある弥生美術館にて行われていた「大正の夢 秘密の銘仙ものがたり」展のギャラリートークに行き、美術館学芸員の方と銘仙蒐集家・研究家の桐生正子さんに銘仙についてお話を伺った。また、企画展で実際に着物の生地に触れられるハンズオンコーナーを設置するため、骨董市で銘仙の着物と羽織を購入し、展示を行った。

以下は、実際に企画展で展示したパネルである。

伊勢屋質店柳町支店の 利用者はどこから？

1937年(昭和12)年11月9日～1938(昭和13)年1月16日

伊勢屋質店柳町支店の利用者は、現在の文京区エリア(旧本郷区および小石川区)の在住者が624件と最も多く、全体の約66%の割合を占めています。その他にも73件の他地域からの利用者が確認できました。このように文京区エリア外からも訪れた人々にはどのような特徴があったのでしょうか。文京区で仕事にお金が見えなくなったのか、それとも柳町支店を利用するために訪れたのでしょうか。

地域別利用件数 文京区エリア外からの利用者の地域と利用件数

地域	件数	地域	件数	地域	件数
文京区エリア内(旧本郷区および小石川区)内	624件	牛込区(新宿区)	12件	芝区(港区)	7件
文京区エリア外(旧本郷区および小石川区)外	73件	神田区(千代田区)	5件	麹町区(中央区)	4件
不明	60件	四谷区(新宿区)	3件	片町(神奈川縣藤沢市)	2件
無記載	184件	深川区(江東区)	1件	渋谷区	1件
統計	941件	麹町区(千代田区)	1件	豊島区(港区)	1件
		王子区(北区)	8件	本郷区(港区)	6件
		豊島区	5件	本郷区(豊田区)	4件
		板橋区	2件	明石区	1件
		浅草区(台東区)	1件	東區	1件
		麻布区(港区)	1件	川崎市	1件
		統計	73件		

伊勢屋質店柳町支店を利用した著名人

伊勢屋質店柳町支店は名のある著名人も来店していました。どんな人が来ていたのでしょうか。ここでご紹介いたします。

阿蘇 惟己(あそ これたか) 1887(明治20)年11月5日～1941(昭和16)年8月6日
阿蘇神社宮司藤原惟季の長男として生まれる。戦前、阿蘇家は別荘として築城に列せられていた。学習院を京都帝室大学を卒業。卒業後、京都市の吉田神社や南宮神社の宮司を務めた。1934(昭和9)年には興隆となり意志と共に上京し、下谷区の学校の講師を志した。1941(昭和16)年、脳溢血で死去。今回の調査により、1937(昭和12)年11月9日から1938(昭和13)年1月16日の期間に伊勢屋質店柳町支店を4回利用し、コートや女性用の着物を購入していたことがわかった。

佐竹 義文(さたけ よしふみ) 1876(明治9)年11月4日～1952(昭和27)年12月28日
東京都四谷区四谷舟町(現新宿区舟町)出身。福井、岡山、山梨、鹿児島、奈良、滋賀、福岡県事務官、同賀部長、同内務部長を歴任。鳥取、香川、和歌山、愛媛、熊本では県知事を歴任した。今回の調査により、1937(昭和12)年11月9日から1938(昭和13)年1月16日の期間に伊勢屋質店柳町支店を2回利用し、着物や腕時計を購入していたことがわかった。

※本記事に掲載の人物情報は、各人物の公的なプロフィールに基づき記載しております。人物の生没年や活動年などは、各人物の公的なプロフィールに基づき記載しております。人物の生没年や活動年などは、各人物の公的なプロフィールに基づき記載しております。

パネル④ どんなものが買入れられていた？

どんなものが 買入れられていた？

今回は、1937(昭和12)年11月9日から1938(昭和13)年1月16日の期間に伊勢屋質店柳町支店で使用された「質物台帳」を分析しました。約2ヶ月の間に質屋利用件数は941件、担保として買入れられた物品の数は合計1780点です。

買入れ品の内訳を分析したところ着物類が約61%(1055点)と取り分け多く、羽織、着物、袴、帯などがあります。次に洋服が19%(333点)、その他衣類が6%(115点)と続き、全体的に衣類が担保として買入れられているが目立ちました。衣類以外に買入れられていたものは、腕時計、指輪、めがねなどを含む身の回り品や家電、茶器、書籍などの雑貨があります。資金の金額を分析すると半数以上が500円未満であることがわかりました。特に、2円が100件、3円が97件と多いことが判明しました。中には、高価なものを買入れすることもあり、今回は最も高価なものは5000円の腕時計でした。当時の物価(右下表)をみると、およその資金金額の価値が分かります。

買入れ品の内訳 資金の金額ごとの件数 資金の金額の価値



パネル⑤ どんなものが買入れられていた？

着物から読み取る 文京の景色

今回翻刻を行った1937(昭和12)年から1938(昭和13)年の「質物台帳」に登場する買入れ品の6割は着物でした。ここではこの時代の着物に焦点を当て、柄、色、生地などについて展示説明していきます。3つのパネルを通して、当時の流行や民衆の好みを知ることができます。また、こうした流行や好みを知ることで当時の文京のまちの生活や景色を想像することができますようになります。

昭和初期の着物の特徴

昭和初期は、まだ着物が日常着でした。この時代は着物文化の「黄金期」(明治、大正、昭和初期)と呼ばれています。当時の着物は、現代の着物と異なり、昭和初期の着物はサイズが全体的に小さく、袖丈が長く、共衿が短いのが特徴です。また、大胆な配色と鮮やかな色彩も当時の着物の特徴です。

和と洋の文化が交わった着物スタイル

明治、大正、昭和初期ではそれぞれの時代で着物は変化しました。明治に洋服が登場するも、まだ一般的には着物が普段着でしたが、明治は文明開化で西洋の文化に影響を受け外套(コート)、吾妻コート(女性用コート)、ショールといった着物と合わせる洋装アイテムが生まれました。大正に入っても、女性は着物が中心でしたが、竹久夢二の描く「大正ロマン」のような女性像が人気を集め、濃い紫や鮮やかな色も流行しました。また、当時ヨーロッパで盛行了たアルデコ模様を着物に取り入れられるなど新しいスタイルが生まれました。

伊勢屋質店柳町支店の「質物台帳」の特徴

伊勢屋質店柳町支店の「質物台帳」を読み進めていくと、物品を記入する際、名称が略されることが多いということが分かります。例えば、吾妻コートは「東コート」、袴は「名仙」と書かれています。物品の記入を簡潔にしたかったのかも知れません。また、欄外に「次作」と書かれています。これは当時の東京の人々の発音に近い表記だったのでしょうか。

※本記事に掲載の人物情報は、各人物の公的なプロフィールに基づき記載しております。人物の生没年や活動年などは、各人物の公的なプロフィールに基づき記載しております。

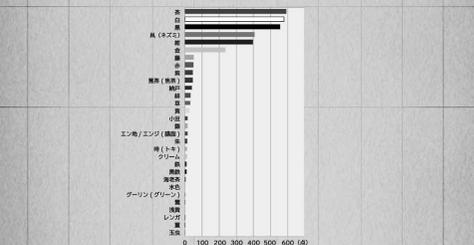
パネル⑥ 着物から読み取る文京の景色

1937(昭和12)年頃の 衣類はどんな色？

「質物台帳」の記録には当時の衣類がどのような色であったかが記されています。そこからは、当時の人々が身にまとった色や街中がどのような色であったかなどを想像することができるのではないのでしょうか。

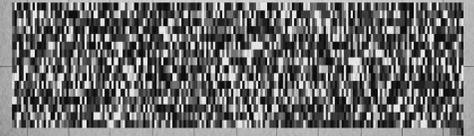
1937(昭和12)年～1938(昭和13)年に買入れられた衣類の色と数

「質物台帳」に登場した1541点の衣類には、326カ所の色に関する記載がありました。



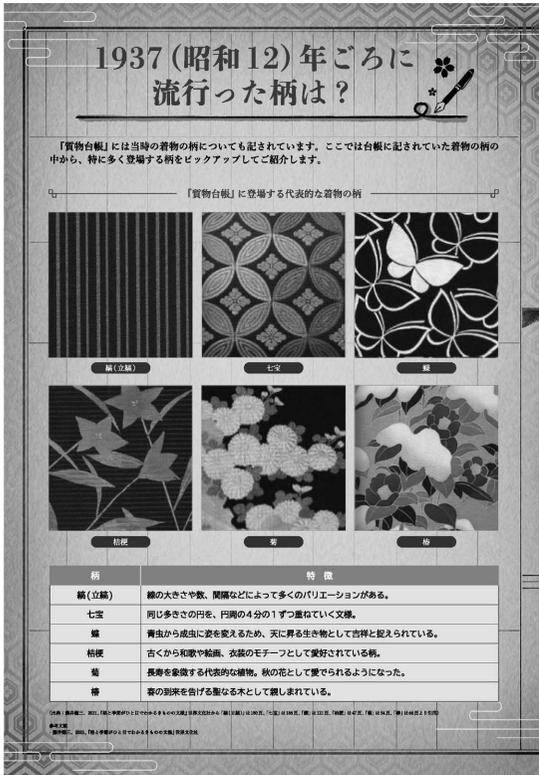
街中の色？

「質物台帳」に登場した31色を出現頻度に合わせて配ったモザイクです。1932年は、日中戦争が勃発し、国民精神総動員運動がスタートし、日常生活や消費にも朝制や影響が出る時期です。このモザイクからは何が感じられるでしょうか。

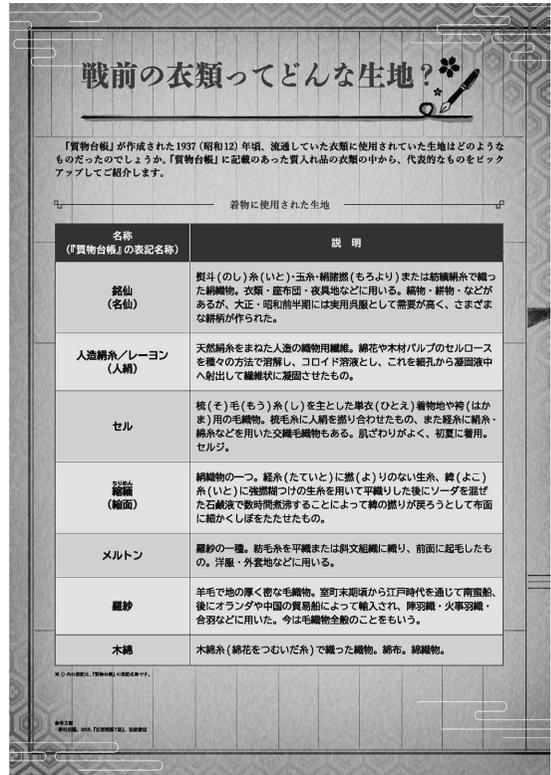


※本記事に掲載の人物情報は、各人物の公的なプロフィールに基づき記載しております。人物の生没年や活動年などは、各人物の公的なプロフィールに基づき記載しております。

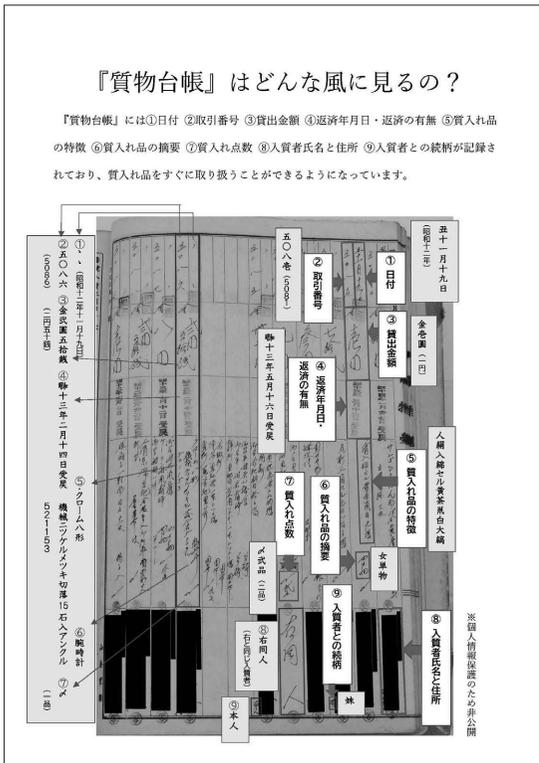
パネル⑦ 1937(昭和12)年頃の衣類はどんな色？



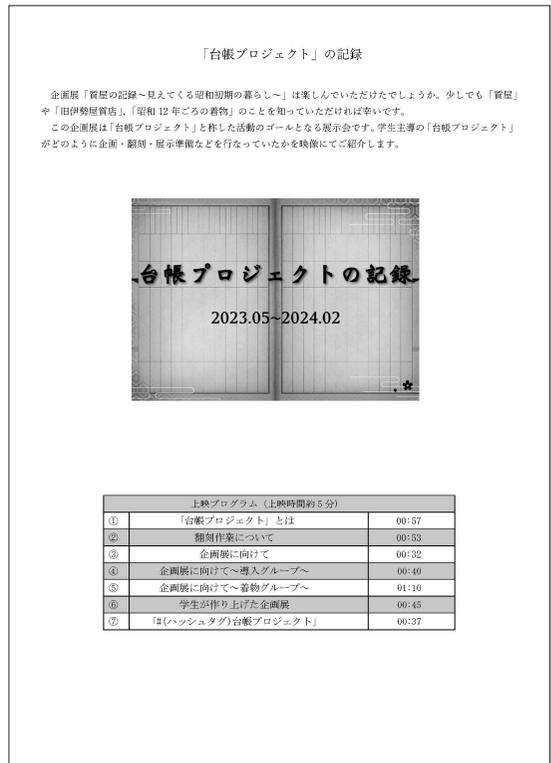
パネル⑧ 1937 (昭和12)年頃に流行った柄は?



パネル⑨ 戦前の衣類ってどんな生地?



パネル⑩ 『質物台帳』ってどんな風に見るの?



パネル⑪ 台帳プロジェクトの記録動画

「質屋の記録～見てくる昭和初期の暮らし～」チラシ



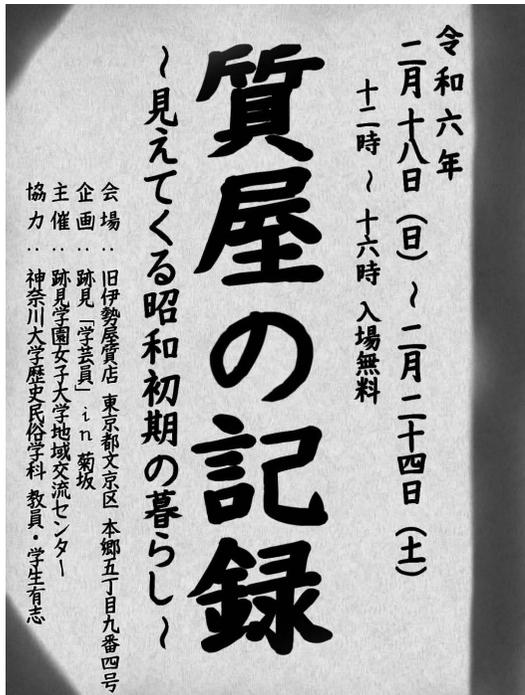
弥生美術館でのインタビュー



展示会場での準備風景

3-3 広報活動

企画展の広報は、2024年1月より開始した。広報を行うにあたり、黒木真悠、小山凪咲、小玉采奈の3名でチラシの作成を行った。作成期間は約2ヶ月である。チラシのコンセプトは、それぞれのグループが取り上げた内容に合わせて、表面は『質物台帳』風にし、裏面は展示でフォーカスした着物をイメージしてデザインした。チラシは、大学内各所、文京区内外関係組織、菊坂町会にて配布したほか、跡見「学芸員」in菊坂のSNSでの広報も行った。



表面



裏面

3-4 企画展開催

企画展は、2月18日（日）から24日（土）まで7日間、旧伊勢屋質店にて開催した。同じ時期及び会場（別室）では、跡見学園女子大学にて実施された2023年度文の京地域文化インタープリター養成講座受講生の成果展も開催された。会期中は雨や雪などの悪天候が続いたが、二つの企画展同時開催の相乗効果もあり、283名もの来場者があり、大変盛況のうちに終えることができた。来場者からは、「とても楽しい展示でした!」「学生展示で布を実際にさわってみる体験など日常生活ではあまりしない体験ができてとてもおもしろかったです。」「企画からチラシ作成まですべて学生の方々が手作りされたことに驚きました。地元ゆかりの展示で、身近で初めて知ることができてよかったです。これからも地域発見の展示を企画して下さい。楽しみにしています」などの感想をいただいた。

4. おわりに

本企画展の開催にあたり、長年旧伊勢屋質店に所蔵されてきた『質物台帳』から、質入れ品の内容や利用者層、質屋の利用方法などを解明することができた。この翻刻調査を今後も続けていくことで、旧伊勢屋質店の営業当時の社会や人々の暮らしについて理解を深めることができるだろう。『質物台帳』の翻刻調査を続けていくことが今後の課題である。

謝辞 本活動は、生涯学習開発財団の研究助成を受けて実施されたものです。

菊坂子ども歴史探検隊 「発見されたうつわの破片は何時代のもの!？」報告

川副早央里・新垣夢乃・磯田みずき・黒木真悠・長根旭美・弘真生

1. はじめに

「菊坂子ども歴史探検隊」は、本学が所有する文京区指定文化財の旧伊勢屋質店が所在する菊坂町会の活動である。町会の子どもが隊員となり地域の歴史や文化を学ぶことを目的とした企画で、2022年度より開始された。菊坂町会との連携のもと、旧伊勢屋質店にて活動する跡見「学芸員」in 菊坂もこの活動に参加・協力してきた経緯がある（新垣ほか2023）。

今年度の菊坂子ども歴史探検隊では、「発見されたうつわの破片は何時代のもの!？」と題して、旧伊勢屋質店や地元に残された資料を活用し、子どもから大人まで地域の方々から自らの住む地域の歴史に触れ、実際の調査を体験し学んでいただけるイベントを企画した。本稿では、そのイベントについて報告する。



写真1：チラシ

2. イベントの概要

本イベントは、2023年8月20日（日）に、本学が所有する文京区指定有形文化財である旧伊勢屋質店にて開催した。この旧伊勢屋質店を拠点に活動する本学および神奈川大学歴史民俗学科の有志学生からなる跡見「学芸員」in 菊坂のメンバーらと菊坂町会とともに企画し、テイケイトレード株式会社の専門家の協力を得て開催した。

当日は、跡見学園女子大学学生4名、同大教員1名、神奈川大学同大教員1名、テイケイトレード株式会社職員3名、一般参加者17名が参加し、総勢26名で行った。なお、一般参加者の内訳は、大人9名、中高生3名、小学生4名であった。

プログラム内容は、3つのパートに分けて構成した。一つ目は、「考古学の専門家による埋蔵遺物の紹介」である。二つ目は、「歴史学の専門家と一緒に質屋さんの台帳の解読に挑戦」である。三つ目は、「学芸員課程の学生たちと生活用具の調査に挑戦」という企画である。

① 「考古学の専門家による埋蔵遺物の紹介」

テイケイトレード株式会社の宇田川肇氏（日本考古学協会員）を講師に迎え、テイケイトレードが所有する遺物と古地図を使いながら、縄文時代から現代にいたるまでの人々の生活の在り方や社会の変化について解説していただいた。

②「歴史学の専門家と一緒に質屋さんの台帳の解読に挑戦」

これは、学芸員の学生たちが今年度取り組んできた伊勢屋質店柳町支店質物台帳の翻刻作業を、参加者にも体験していただくプログラムで、実際に台帳に記載された崩し字を翻刻し、そこから当時どのような品物がいくらかで質入れされていたのかを解読することに挑戦してもらった。テイケイトレード株式会社の歴史学者のサポートを得ながら、学生が解読の難しい文字の読み方や質入れされた品物についての解説を行った。



写真2：埋蔵遺物の紹介の様子

③「学芸員課程の学生たちと生活用具の調査に挑戦」

普段学生たちが行っている旧伊勢屋質店に残る生活用具の調査を紹介し、参加者にも好きな生活用具を選んでもらい、実際に測量や材質確認などをして「菊坂跡見塾資料調査情報カード」に記入していただいた。



写真3：台帳の翻刻に挑戦する参加者

3. 参加者からの感想

参加者から得られた感想は以下の通りである。

- ・建物含め貴重な体験をさせていただきありがとうございました。
- ・とても楽しかったです。少人数での丁寧な説明や実物見たり触ったりできたのはよかったです。学生さんの頑張りも伝わってきました。
- ・いろいろな歴史があることが分かった。壱から拾まで昔の漢字が覚えられた。
- ・プログラムが3つあり、それぞれおもしろい内容でした。深い内容でしたが、易しくわかりやすく教えてくれたので理解ができました。日頃の学生さんの調査研究している内容も、聞くだけでなく体験できたことで身近に感じました。3つのプログラムを、単独開催しても、十分な内容かと思いますので、ぜひ次回以降実施していければと思います。
- ・近所の史跡に触れることができとても有意義でした。ありがとうございました！
- ・面白かった。3コーナーそれぞれ工夫されていた。
- ・猛暑でなかったら100点満点でした。



写真4：生活用具調査の様子

4. おわりに

短期間での準備・募集となったが、当日は親子17名が参加し、参加者からは大変好評な感想を得ることができた。学生たちの地道な調査活動がどのように行われているのかを普段はなかなか地域の方が目にする機会はないが、今回のイベントでは参加者に実際に調査を体験し知っていただくことができ

た。そうした地道な調査活動の一つ一つが旧伊勢屋質店や地域の歴史を紡いでいくことになることを実感していただけたのではないだろうか。

また、学生たちも自分たちの活動を学外の方々に紹介し、また調査研究方法を伝達する経験を経て、自分たちの活動の意味や意義を再確認する機会ともなったようである。

本イベントの副次的効果として、大学の広報活動という役割も果たせた部分もあった。参加した女子高校生は受験生でもあり、今回のイベントが本学に関心を寄せるきっかけとなり、当日は実際に学芸員の学生たちから大学での学びや学生生活などについて話をすることもできた。

今後も、地域との連携を深め、大学や専門家の「知」を地域と共有・還元しながら、共に地域の歴史発掘や文化醸成に取り組んでいきたい。

参考文献

- ・新垣夢乃ほか、2023「菊坂町会主催『菊坂子ども歴史探検隊』への協力について」『跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書4』p.53-54.

謝辞 菊坂町会のみなさま、テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部のみなさまには感謝申し上げます。また、本活動は生涯学習開発財団の助成を受けて実施した。

菊坂子ども歴史探検隊 「どうやって質屋を守る!? 防災の秘密を探してみよう!」報告

小山風咲・川副早央里・大屋恵実子・磯田みずき・水村美穂・山上真由子・渡邊菜月

1. はじめに

毎年1月26日は「文化財防火デー」に制定されており、それにちなんで、跡見学園女子大学が所有する文京区指定有形文化財である旧伊勢屋質店では2022年度より災害を想定した訓練を行ってきている。2022年度は、跡見「学芸員」in菊坂として活動する学生3名が、火災を想定した消火訓練及び避難訓練を行った(水村・山上・渡邊2023)。

今年度は、コロナ禍が明けたこともあり、学芸員だけではなく周辺の地域住民にも参加してもらい、地域とともに文化財防災を考えるきっかけにしようと、2024年1月21日に「菊坂子ども歴史探検隊～どうやって質屋を守る!? 防災のヒミツを探してみよう!～」を開催した。本稿では、このイベントの開催概要、開催までのプロセス、当日の様子とその成果について報告したい。

---菊坂子ども歴史探検隊--- **参加無料**

どうやって質屋を守る!? 防災のヒミツを探してみよう!

2024年 会場: 旧伊勢屋質店 (東京都文京区本郷5丁目9番4号)
1月21日(日) 14:00~15:30
受付開始 13:30~

主催: 跡見学園女子大学地域交流センター
 共催: 菊坂町会
 協力: 東京消防庁本郷消防署

プログラム(予定)

旧伊勢屋質店を見学しよう! 横口一葉ゆかりの質屋であり、文京区指定有形文化財でもある旧伊勢屋質店。1月26日の文化財防火デーにちなんで、旧伊勢屋質店をどうやって守るのか、災害時に自分自身、そして菊坂地域をどうやって守るのかを考える防災イベントを開催します。

消防士のお話を聞こう! 本郷消防署の消防士からお話を聞き、消火訓練を行います。また後半は、菊坂町会オリジナルの「本郷菊坂かるた」を使った新春かるた大会を開催します。

消防器具を使ってみよう! 子どもから大人の方まで幅広くご参加いただけます。

菊坂町会オリジナル「本郷菊坂かるた」の新春かるた大会

☆高校生以下の方にはお菓子プレゼント☆ぜひ親子でご参加ください!

申込: 右記QRコードからお申込みください。
 申込期限: 2024年1月14日(日) 先着15名
※定員に達した時点で、申込受付を終了させていただきます。
※参加決定された方は、申込されたメールアドレスにイベントの詳細をお知らせしますので、ご確認をお願いします。
※当日は旧伊勢屋質店の一室で開催しております(入場無料)。
 お問い合わせ先: 跡見学園女子大学地域交流センター
 TEL: 03-5941-7420 Mail: d-chik@atomi.ac.jp

写真1: イベントのチラシ

2. イベントの開催概要

本イベントの開催概要は以下の通りである。

- ・ **企画名:** 「菊坂子ども歴史探検隊～どうやって質屋を守る!? 防災のヒミツを探してみよう!～」
- ・ **日程:** 2024年1月21日(日) ※旧伊勢屋質店 一般公開日 14:00~15:30 (受付開始 13:30)
- ・ **会場:** 旧伊勢屋質店 (東京都文京区本郷5丁目9番4号)
- ・ **主催:** 跡見学園女子大学地域交流センター、共催: 菊坂町会、協力: 東京消防庁本郷消防署
- ・ **当日の参加者数:** 跡見学園女子大学学生6名、教員1名、神奈川大学学生1名、菊坂町会など地域住民約30名(子ども含む)
- ・ プログラム内容

【第一部】

①イントロダクション (担当: 学生)

- ・ 企画の経緯と当日の流れについての説明、旧伊勢屋質店という場所についての説明、質屋(日本建築)に見られる防災の工夫(目塗土など)の解説

②「消防士のお話を聞いてみよう!」(担当: 本郷消防署)

・江戸時代などの建物にみられる防災の仕組み災害時の備えや身の守り方についての解説

③消火器訓練 (担当：本郷消防署)

④目塗土の見学 (担当：学生)

⑤消防士ユニフォームの試着体験／記念撮影 (担当：本郷消防署)

【第二部】

・新春かるた大会 担当:菊坂町会 (かるた読み手:学生)
菊坂町会オリジナルの「本郷菊坂かるた」を、グループに分かれて実施

3. 当日の様子

当日は、まず学生から旧伊勢屋質店とはどのような建物なのかを説明したあと、この建物にみられる防災の工夫として「目塗土」に関する解説を行った。土蔵の入り口前にある廊下の床の一部が上げ板になっていて、その板を挙げると床下に土が入った瓶が収納されている。この土が「目塗り土」と呼ばれるもので、火災時に扉の隙間から土蔵内に火が入らないよう目止め用に用意された土で、常に取り替えたり練り直したりして万が一の火災に備えていたようである (旧伊勢屋質店展示パネルより)。その後、消防署の方から、江戸時代など古い建物にみられる防災の工夫や、災害時の身の守り方などに関する解説を行っていただき、その後参加者には実際に消火器訓練に参加していただいた。2024年1月1日に能登半島地震が起きたことから、防災への意識が高まっており、真剣に話を聞く参加者の姿が見られた。

第二部では、旧伊勢屋質店2階で菊坂町会主催の「新春かるた大会」を開催した。今回は、菊坂町会が制作した「本郷かるた」が使用され、学生が読み手を担った。未就学児から中学生までの子どもたちが参加し、わきあいあいと楽しむ子どもたちの姿があった。



写真2：学芸員による解説



写真3：消防士による講和



写真4：目塗り土



写真5：消火器訓練の様子

4. 参加した学生の感想

参加した学生からの感想の一部を以下に紹介する。

- ・地域の方にも評価をいただいた上に、消防士さんにもお話を伺うことができ、大変貴重な経験になった。平日頃から心配をするのではなく、どんな危険があり、どんな行動をとるべきかを知っておくことで、いざというときにそれを思い出すことが重要だと学んだ。
- ・一昨年、昨年に引き続き今年も防災イベントに参加させていただきましたが、良い意味で例年とは違ったイベントとなり大成功だったのではないかと思います。市民の皆さまと旧伊勢屋質店で一緒に防災について考えるという体験はとても貴重でした。消防署の方のお話を聞いて、実際に自分が被災した時にどうしたら良いか、そもそも被災する前にどのような対策をしておくか良いかを学ぶことができました。また、学んだことを自分のものだけにせず家族や友人といった周囲の人たちにも共有することが大切だと感じました。
- ・旧伊勢屋質店の企画展などにも来てくださっている方から、単発で企画が終わってしまうのが寂しかったが、また斬新なイベントをやってくれて感動したとお声をいただきました。地域の人を巻き込んだ学生による企画だったこと、代表者だけでなく全員が消火器訓練をできたことなどいろいろほめていただきました。消防署の方のお力添えも大きかったです。学生主体ということをごここまで評価していただけることは意外でした。もしまた開催するとしたら、消火器体験は継続しつつ、連続参加される方が飽きないようなプログラムがあったらいいと思います。子どもたちも落ち着いて最後まで参加してくれて安心しました。防災について楽しく考えてもらえたなら、大成功だったのではないかと思います。



写真6：かるた大会の様子

5. まとめ

今回のイベントでは、「防災」という要素だけではなく「文化財」や「かるた」など楽しみの要素も抱き合わせるようにし、子どもから大人まで幅広い世代に興味を持ってもらえる企画にすることを心掛けた。当日は旧伊勢屋質店の一般公開日であったこともあり、予想を超える人数が参加してくださった。参加者からは、「楽しかった」「タイムリーですばらしかった」「大変勉強になった」など、非常に高い評価を得た。全体的に見ると成功したと言えるだろう。今後も、文化財を活用し楽しみながら、そして飽きが来ないように新規プログラムも追加しながら、来年以降も防災に取り組む企画を継続して行っていきたい。

参考文献

- ・水村美穂・山下真由子・渡邊菜月、2023「菊坂跡見塾文化財防火デー 避難訓練報告」『ゆかり』4、P.127-129.

旧伊勢屋質店パンフレット制作活動

長根旭美・梅原菜摘・川副早央里

1. はじめに

旧伊勢屋質店では、毎年パンフレットを制作しています。学内や旧伊勢屋質店のほか、都内各所で配布される予定です。昨年とは違い、今回はコンペを開催せずに跡見「学芸員」in 菊坂に所属するメンバー2人で協力して作成しました。イラストデザインと本文内容を互いに分担し合い、地域交流センターの川副先生のサポートと印刷会社との協力のもと制作活動を始めました。

今回のパンフレットのコンセプトは「文豪さんぽ道」です。旧伊勢屋質店の周辺には文京区にゆかりのある文豪の旧居跡が多く残っています。そんな地域の歴史に触れてもらうため、菊坂に立ち寄った人がさらに楽しめるようなパンフレットを目指しました。活動としては、2023年8月からコンセプトや掲載する店舗の打ち合わせをし、対面とオンラインを持ちいて計画しました。それと並行しながら表紙のラフ案を考えていきました。11月上旬にセントラル印刷の森川様を交えて打ち合わせを行い、アドバイスをいただく中で大幅にデザインを変更し、より目を惹く表紙に仕上がりました。下旬には現地取材として掲載させていただく店舗と菊坂の風景を撮影し、現地の雰囲気インスピレーションを得つつ原稿作成を進めました。1月には地図に掲載するスポットの撮影を行い、印刷会社に建物のイラストとデザインをお願いしました。

2. パンフレットについて

今回のコンセプトである「文豪さんぽ道」にちなんで、歴史あるお店やスポットを中心にピックアップしました。今回取材させていただいた飲食店は、「炙ちごや」と「石井いり豆店」です。

また、地図には「法真寺」や「ふるさと歴史館」、文豪に縁のある場所の紹介など、パンフレットを片手に菊坂を散歩してもらえよう工夫しました。

パンフレットの表紙は当時の女学生風のキャラクターがチェキカメラを持って、菊坂



写真1：打合せの様子

の風景を撮影している様子です。ラフ案を提出した際は表紙裏に配置する予定でしたが、制作メンバーに気に入っていただけたので、そのまま表紙として採用する形となりました。地図には建物と文豪のイラストが載る予定ですので、見やすいものになるかと思います。完成しましたら是非一度お手に取ってみてください。

・梅原菜摘 (文学部人文学科1年)

私は今回のパンフレット制作を通して、初めて旧伊勢屋質店や菊坂の街並みをきちんと知りました。

そのため、パンフレットを作るにあたってまず、“パンフレットを通して伝えたいことはなにか”、“旧伊勢屋質店や菊坂の魅力とはなにか”など知るところから始めました。

菊坂周辺は文豪がたくさん訪れたということを知り、「文豪さんぽ道」というコンセプトで旧伊勢屋質店を中心に文豪のいた地を周り、散歩して欲しいという思いを込め、今回作成しました。私は主に“文章を書くこと”を担当しました。初めて知ることが多く、考えに息詰まることもありましたが、制作を通して得たことは本当に有意義であったと実感しています。

私達のパンフレットが文京区並びに旧伊勢屋質店の魅力を知ってもらおうきっかけのひとつとなっていくことを願っています。

4. おわりに

少ない人数での活動でしたが、無事に完成に辿り着き、素敵なパンフレットができました。これはひとえに、快く掲載許可を了承して下さった「糸ちごや」「石井入り豆」の皆さま、デザインのアドバイスや提案をして下さったセントラル印刷の森川様、そして何よりスケジュールの管理や企画案など、常に私達を支えてサポートして下さった川副先生のおかげです。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

2023年度の地域交流関連活動記録

地域交流センター

跡見学園女子大学における「地域交流事業」の運営体制

1. 跡見学園女子大学地域交流センターについて

跡見学園女子大学地域交流センターは、本学に所属する教員や学生が地域交流活動を組織的・積極的に行えるように地域交流活動の支援を行い、そのために必要な環境整備を行うことを目的に、附属教育研究組織として平成31年度より設立されました。（「地域交流センター規程」）

具体的な活動は、下記の通りです。

- ① 地域交流活動の企画立案・実施
- ② 本学の地域交流活動についての情報収集及び成果の公表
- ③ 本学の地域交流活動に対する人的支援・財政的補助
（本学の「正課」「正課以外」、本学教員の地域における調査・研究、本学人材の地域への提供等）
- ④ 地域交流活動への本学施設の開放
- ⑤ 自治体との包括連携協定の推進と協定締結自治体との連携事業の実施・支援

2. 地域交流センター運営委員会について

地域交流センター運営委員会は、地域交流センターの上記の具体的活動に関する事項を審議することを目的に、委員長たるセンター長と各学部より選出された委員および、若干名の専門委員により組織されています。（「地域交流センター運営委員会規程」）

3. 地域交流センター運営委員会開催一覧

令和5年度運営委員会	第1回（令和5年 4月26日〈水〉）	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第2回（令和5年 5月24日〈水〉）	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第3回（令和5年 6月28日〈水〉）	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第4回（令和5年 7月26日〈水〉）	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第5回（令和5年 9月27日〈水〉）	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第6回（令和5年10月25日〈水〉）	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第7回（令和5年11月22日〈水〉）	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第8回（令和6年 1月24日〈水〉）	14時40分～16時10分〈Teams使用〉
	第9回（令和6年 2月28日〈水〉）	14時40分～16時10分〈Teams使用〉

令和5年度 連携地域・企業（提携日順）

跡見学園女子大学 自治体等 協定締結先一覧（令和6年1月現在）

※締結順

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
埼玉県	彩の国大学コンソーシアム友好交流に関わる協定	H13(2001) 10.15締結 H17(2005) 4.1改訂		自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・教育交流 「単位互換」プログラム、教養教育の共有化、リメディアル教育、インターネット等を利用した遠隔事業、「編入生」受け入れ・交換プログラム ・研究交流 学生、教員における研究プログラム ・学生交流 学生交流、「スポーツ・リクリエーション活動」の共同開催プログラム ・教職員交流 FD研究・フォーラム等の開催、事務職員研修 ・地域交流 「公開講座」共同開催プログラム、「生涯学習」プログラム、「地域への便益還元・奉仕活動」プログラム ・その他 入試広報、WBT (Web Base Training)
埼玉県新座市	新座市と跡見学園女子大学との連携協力に関する包括協定	H20(2008) 4.1	H22(2010) 4.10	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉の充実に関する事項 ・教育・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全・回復・創出に関する事項 ・防災に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
東京都文京区	学校法人跡見学園跡見学園女子大学と文京区との相互協力に関する包括協定	H23(2011) 5.17	H26(2014) 3.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施
埼玉県新座市・埼玉県新座警察署	新座市における女子学生安全対策協定	H23(2011) 7.29	H25(2013) 7.28	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・女子学生に対する防犯指導 ・安全情報の提供及び情報交換 ・学生防犯リーダーによる啓発活動への支援
福島県会津若松市	学校法人跡見学園跡見学園女子大学と会津若松市とのパートナーシップ協定	H24(2012) 7.25	H27(2015) 7.24	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究の成果、地域施策の充実及び人材の提供 ・施設の利用 ・インターンシップの実施 ・学習活動支援事業の実施

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
東京都文京区	災害時における母子救護所の提供に関する協定	H24(2012) 9.7			
埼玉県和光市	和光市と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	H24(2012) 11.22	H27(2015) 11.21	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉の充実に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・スポーツの発展と振興に関する事項 ・地域環境の保全、創造に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・人材育成に関する事項
埼玉県新座市	災害時における施設の使用に関する覚書	H25(2013) 1.10締結 H26(2014) 2.13改訂			<ul style="list-style-type: none"> ・新座市内に災害が発生した場合に、本学を避難場所としてグラウンドや体育館の提供及び避難所等の開設を行う ・避難者の安全を確保することを目的とする ・物品資材等の設置や土地の使用に関する事項を追加（平成26年2月13日に再締結）
一般財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会		H26(2014) 6.23	R2(2020) 12.31		<ul style="list-style-type: none"> ・人的分野及び教育的分野での連携 ・オリンピック・パラリンピック競技大会に関わる研究分野での連携 ・オリンピック・パラリンピック競技大会の国内PR活動での連携 ・オリンピックムーブメントの推進及びオリンピックレガシーの継承に関する連携
全国「道の駅」連絡会	「道の駅」就労体験型実習の実施に関する基本協定	H27(2015) 3.10			<ul style="list-style-type: none"> ・「道の駅」就労体験型実習の実施
長野県	学校法人跡見学園 跡見学園女子大学と長野県との相互協力に関する協定	H27(2015) 6.22	H29(2017) 3.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究の成果及び人材の提供 ・学生の就職支援 ・インターンシップの実施
警視庁大塚警察署	災害及び防犯ボランティア等に関する協定	H27(2015) 9.1	H28(2016) 8.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・防災及び防犯等各種広報活動に対する共同活動 ・発災時に文京区が設置する避難所等における災害警備活動
秋田県男鹿市	秋田県男鹿市と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との連携協力協定	H27(2015) 12.21	H30(2018) 12.21	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・人材育成に関する事項
山形県西川町	山形県西川町と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との連携協力協定	H27(2015) 12.22	H30(2018) 12.22	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
群馬県長野原町	学校法人跡見学園女子大学と長野原町との相互協力に関する包括協定	H28(2016) 4.19	H31(2019) 4.19	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・学術研究の成果及び人材の提供 ・施設の利用 ・その他前条の目的を達成するために甲及び乙が必要であると認められたこと
埼玉県三郷市	三郷市と学校法人跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	H29(2017) 3.6	H30(2018) 3.6	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・社会福祉に関する事項 ・学校教育・生涯学習・文化・スポーツに関する事項 ・地域環境に関する事項 ・国際交流に関する事項 ・産業振興に関する事項 ・地域コミュニティに関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他前条の目的を達成するために甲及び乙が必要であると認める事項
富山県立山町	富山県立山町と学校法人跡見学園 跡見学園女子大学との連携協力協定	H29(2017) 5.22	R2(2020) 5.22	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・活力ある地域づくりに関する事項 ・観光振興に関する事項 ・情報発信に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他上記の目的に関して、両者が協議して必要と認められる事項
長野原町	長野原町と跡見学園女子大学観光コミュニティ学部との観光振興プロジェクトに関する覚書	H29(2017) 6.1	H29(2017) 11.19		<ul style="list-style-type: none"> ・長野原町八ツ場地区における調査研究活動への協力 ・学生による調査研究結果の提供、及び研究成果の地域での活用
和光市文化振興公社	公益財団法人和光市文化振興公社と跡見学園女子大学との相互協力協定書	H29(2017) 6.23	R3(2021) 3.31	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・文化更新に関する事業 ・地域コミュニティの発展に関する事項 ・地域文化資源に関する事項 ・人材育成に関する事項 ・その他、甲と乙が相互に必要と認める事項
千葉県いすみ市	いすみ市と跡見学園女子大学における域学連携に関する協定書	R1(2019) 6.1	H31(2019) 3.31		<ul style="list-style-type: none"> ・いすみ市における地域創生をテーマに共同で研究、実践活動を行うことを目的とする
静岡県東伊豆町	東伊豆町と跡見学園女子大学との相互協力に関する包括協定	R1(2019) 11.19	R4(2022) 11.18	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・活力ある地域づくり ・観光振興 ・情報発信 ・人材育成 ・研究教育
株式会社ジャルパック	跡見学園女子大学と株式会社ジャルパックとの連携に関する協定	R2(2020) 2.4	R3(2021) 2.3	自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・教育、研究、文化の発展・向上に関わる相互支援 ・学生・教職員と社員の相互交流 ・人材育成・キャリア形成 ・学生・教職員の研究成果・活動を業務に活かす ・地域社会の発展・活性化

自治体等	協定名	締結年月日	有効期間	期間終了後	協定内容
公益財団法人角川文化振興財団	跡見学園女子大学と公益財団角川文化振興財団との連携に関する協定書	R2(2020) 8.1			<ul style="list-style-type: none"> ・教育、研究、文化の発展・向上にかかわる相互支援に関すること ・学生及び教職員と社員の相互交流に関すること ・本学の人材育成・キャリア形成に資する支援に関すること24 ・学生及び教職員の研究成果・活動と角川文化振興財団の文化活動の成果を互いに活かすこと ・地域社会の発展・活性化に関すること ・その他、相互に連携・協力が必要と認められる事項
エーザイ株式会社	コミュニティスペース運営協力に関する協定書	R2(2020) 9.24			<ul style="list-style-type: none"> ・千石三丁目居場所作りプロジェクト実行委員会の準備・運営するコミュニティスペース（所在：文京区千石三丁目三番七号）への協力（知的資源の提供・人材の派遣等） ・前1項及び2項の目的達成のための相互交流、研究成果・知識の交換 ・その他地域社会の発展・活性化に関する取組み
埼玉東上地域大学	埼玉東上地域大学教育プラットフォーム協定	R2(2020) 12.1		自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・自治体及び企業・団体と連携して、当該地域の少子高齢化問題の解決及び地域活性化の推進に向けた「多様な高等教育の提供」「生活しやすい地域づくり」及び「地域産業の活性化」等の活動を柱として当該地域社会の継続的な発展に寄与することを目的とする
岩手県盛岡市	盛岡市と跡見学園女子大学との連携・協力に関する包括協定	R4(2022) 3.24		自動更新	<ul style="list-style-type: none"> ・産業及び文化の振興に関すること ・交流人口の拡大に関すること ・人材育成及び振興に関すること ・地域課題の解決に関すること など
埼玉県富士見市	包括連携協定	R5(2023) 4.6			<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育、生涯学習、文化・スポーツに関する事項 ・社会福祉に関する事項 ・商業及び観光の振興に関する事項 ・地域コミュニティに関する事項 ・国際交流に関する事項 ・地域の環境に関する事項 ・学術研究及び人材育成の振興に関する事項 ・その他上記の目的に関して、甲及び乙が協議して必要と認められる事項

令和5年度 文京区受託事業

事業名	令和5年度 文の京ゆかりの文化人顕彰事業『朗読コンテスト』
主催	文京区 主管・運営：跡見学園女子大学
日時	令和5(2023)年11月5日(日) 本選13時～16時
場所	跡見学園女子大学 ブロッサムホール(文京区大塚)

文京区ふみ みやこの文の京ゆかりの文化人顕彰事業のひとつで、今年度で12回目となるコンテストである。文京区と連携をして朗読者に発表の場を提供するとともに、区民の文化活動の一層の促進、特に青少年部門においては朗読への関心を醸成することを目的としている。文京区が主催し、本学が主管して平成24年度から開催されているものである。

課題作家と作品

宮沢賢治の7作品(「文京区・盛岡市友好都市提携5周年事業」、没後90年の事業)

グスコブドリの伝記

さるのこしかけ

なめとこ山の熊

やまなし

よだかの星

銀河鉄道の夜

注文の多い料理店

1. 事前録音審査応募総数

340人(一般174名、青少年166名)

※事前録音審査 274名(一般145名、青少年129名)

※審査対象外 66名(一般29名、青少年37名)

※本選出場者数 青少年の部 8名

一般の部 8名

2. 録音審査応募期間

8月21日(月)から8月25日(金)

3. 録音審査

9月7日(木)、8日(金)

NHK財団ことばコミュニケーションセンター

4. 本選観覧者

応募数（含：当日申込）：171名

来場者数：126名

5. 審査結果

賞	青少年の部入賞者一覧		一般の部入賞者一覧	
	氏名	朗読作品	氏名	朗読作品
最優秀賞	小泉以依	なめとこ山の熊	田邊カツ子	グスコブドリの伝記
優秀賞	長井祐香	よだかの星	佐藤悦子	注文の多い料理店
優秀賞	西川怜那	よだかの星	吉岡玲子	よだかの星

※青少年の部は23歳以下の方

6. 審査員

氏名	肩書
広瀬 修子 氏	元跡見学園女子大学教授、元NHKアナウンサー
高橋 淳之 氏	NHKことばコミュニケーションセンター専門委員
上野 義博 氏	文京区教育委員会教育推進部教育指導課 指導主事



本選出場者（青少年の部）



優秀賞（青少年の部）を受賞した
本学心理学部4年生
長井祐夏さんの朗読の様子

事業名 旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)一般公開事業

主催 文京区

受託 跡見学園女子大学

令和5年4月から令和6年3月まで、旧伊勢屋質店一般公開を行った。

令和5年度一般公開日

令和6年3月31日

4	月	火	水	木	金	土	日
							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	29
	30						

月合計6日

10	月	火	水	木	金	土	日
	1	2	3	4	5	6	7
	8	9	10	11	12	13	14
	15	16	17	18	19	20	21
	22	23	24	25	26	27	28
	29	30	31				

月合計4日

5		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30	31			

月合計6日

11				1	2	3	4
	5	6	7	8	9	10	11
	12	13	14	15	16	17	18
	19	20	21	22	23	24	25
	26	27	28	29	30		

月合計5日

6					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29	30	

月合計6日

12						1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30
	31						

月合計4日

7							1
	2	3	4	5	6	7	8
	9	10	11	12	13	14	15
	16	17	18	19	20	21	22
	23	24	25	26	27	28	29
	30	31					

月合計9日

1		1	2	3	4	5	6
	7	8	9	10	11	12	13
	14	15	16	17	18	19	20
	21	22	23	24	25	26	27
	28	29	30	31			

月合計3日

8			1	2	3	4	5
	6	7	8	9	10	11	12
	13	14	15	16	17	18	19
	20	21	22	23	24	25	26
	27	28	29	30	31		

月合計2日

2					1	2	3
	4	5	6	7	8	9	10
	11	12	13	14	15	16	17
	18	19	20	21	22	23	24
	25	26	27	28	29		

月合計11日

9						1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30

月合計0日

3						1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24	25	26	27	28	29	30
	31						

月合計3日

開館日

年合計59日

●令和5年度 旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)一般公開について

年間開館日数 59日

年間来館者数 文京区民556人 文京区民以外862人 跡見学園関係者28人 合計1446人

メディアで紹介された旧伊勢屋質店（菊坂跡見塾）〈紹介日順〉

〈テレビ・配信〉

- (1) BSプレミアムドラマ「家族だから愛したんじゃなく、愛したのが家族だった」
放送日時：2023年7月2日（日）22時00分～22時49分（※ドラマの第8回目）
※撮影場所としての提供

〈新聞・雑誌等〉

- (1) 「文京区観光ガイドブック」2024年版
発行：文京区観光協会
- (2) 「読売新聞社」
①タイトル：TOKYO たてもの探訪 一葉通った時代の面影
（掲載日：「読売新聞」10月7日（土）朝刊）
②タイトル：東京春秋 読書の秋 歴史に触れる
（掲載日：「読売新聞」10月15日（日）朝刊）
- (3) 「文の京わたしの便利帳 2023」
発行：文京区役所
- (4) 「歩く地図 東京散歩 2025」
発行：成美堂出版
- (5) 「東京新聞社」インフォメーション
①タイトル：質屋の記録～見えてくる昭和初期の暮らし
②開催日：2月18日（日）～2月24日（土）12時～16時（最終入場：15時30分）
（掲載日：「東京新聞」1月22日（月）朝刊）

令和5年度 文京アカデミー受託事業

事業名	文京アカデミア講座
主催	公益財団法人文京アカデミー
受託	跡見学園女子大学

文京区内在住・在勤・在学者（15歳以上、中学生除く）を対象として、本学の教員が講座講師を務めた。

1. 文京アカデミア講座前期

- (1) 講師：文学部 横田恭三教授
- (2) タイトル：私も書ける“隷書に挑戦”
- (3) 日程：全7回（5月11日（木）～7月6日（金）10：30～12：00）
- (4) 受講者：20名
- (5) 会場：本学文京キャンパス
- (6) その他：第4回 文の京書道展に受講生の書作品を展示、講師による講評を行った。
（主催 跡見学園女子大学）
会場：大塚地域活動センター オープンスペース
日程：令和5年7月5日（水）10：00 搬入、午後開場～7月14日（金）午前開場、16：30 搬出

2. 文京アカデミア講座後期

- (1) 講師：文学部 アダム・クリストファー准教授
- (2) タイトル：異文化コミュニケーションのための英語
- (3) 日程：全8回（10月13日（金）～12月8日（金）10：30～12：00）
- (4) 受講者：20名
- (5) 会場：本学文京キャンパス

3. 文京アカデミア講座後期Ⅱ

- (1) 講師：木村理子兼任講師
- (2) タイトル：文化の視点から知るモンゴル国の今
- (3) 日程：全4回（2月2日（金）～3月1日（金）10：30～12：00）
- (4) 受講者：30名
- (5) 会場：アカデミー文京 学習室

事業名 文ふみの京みやこ地域文化インタープリター養成講座

主催 公益財団法人文京アカデミー

受託 跡見学園女子大学

文京区の大切な文化的遺産の基礎的知識を、基礎講座と基礎演習を通して習得する。また、グループでの演習を通して調査・研究・発表の方法を学ぶ。講座終了後に成果展を開催した。

4. 文の京 地域文化インタープリター養成講座 (隔年実施)

(1) 講師：文学部 栗田秀法教授ほか

(2) 日程：全15回(10月7日(土)～2月17日(土) 10:00～12:00)

(3) 会場：本学文京キャンパスほか

(4) 受講者：12名

(5) その他：2月18日(日)～24日(土)に旧伊勢屋質店(菊坂跡見塾)にて成果展を開催した。

以上

令和5年度 その他の助成金

事業名 生涯学習開発財団 助成金

テーマ 文化財を活用した郷土学習と企画展実施による生涯学習効果の調査について

副題 旧伊勢屋質店を活用した子ども・住民・大学の連携から

活動一覧

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
文京区菊坂地域での調査活動	跡見「学芸員」 in 菊坂	R5(2023) 5.13(土)～ 5.31(水)	菊坂跡見塾	・旧伊勢屋質店が所蔵する資料の整理・調査活動。関連して周辺地域でも調査活動を行った。
		R5(2023) 6.3(土)～ 6.30(金)		
旧伊勢屋質店所蔵資料調査の見学会		R5(2023) 8.4(金)	テイケイトレード株式会社 埋蔵文化財事業部	・旧伊勢屋質店所蔵資料の写真撮影を専門技術を持つテイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部にて実施した。
旧伊勢屋質店と菊坂周辺地域での調査活動		R5(2023) 8.1(火)～ 8.31(木)	旧伊勢屋質店、文京区菊坂地域とその周辺地域	・旧伊勢屋質店所蔵資料の調査活動を実施した。
菊坂跡見塾での台帳翻刻作業及び「菊坂子ども歴史探検隊」実施について		R5(2023) 8.20(日)	菊坂跡見塾	・午前中に、旧伊勢屋質店所蔵資料の翻刻作業を学芸員が行い、テイケイトレード株式会社の歴史研究の専門家に古文書解読の指導を受けた。午後には、菊坂町会との共催で、「菊坂子ども歴史探検隊」のイベントを行った。菊坂町会の子どもから大人まで幅広い年代の参加者を募り、台帳翻刻作業と民具調査の様子を見学し、作業を体験してもらった。学芸員が作業補助を行い、テイケイトレード株式会社の専門家からは遺物の展示、菊坂町会周辺の古地図を使って、各時代の人々の暮らしや地域の歴史を解説してもらった。

令和5年度 地域交流・企業連携活動（地域・実施日順）

文京区等

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
区内大学学生支援担当者会議	地域交流センター	①② 月1回/通年 ③ 2024(R6) 3.14(木)	①② 各大学、フミコム ③東洋大学	①地域連携ステーションフミコムの呼びかけにより区内大学の地域関係の担当者有志が定例会合を実施・関係性を構築。 ②銭湯振興プロジェクトを共同で実施した。 ③会議参加大学の学生を集めた活動報告・交流会が文京学院大学で開催された。
NPO法人日本成人病予防協会主催の食育講師育成事業による小学校への食育出張事業	ゼミ学生	2023(R5) 4.13(木) } 2024(R6) 3.31(日)	東京都内の小学校	・NPO法人日本成人病予防協会が次世代へと健康の大切さを伝えていく若い世代の指導者を育成するプログラムを実施。 ・昨年度に引き続き、石渡ゼミの学生（健康管理能力検定2級の取得と日本成人病予防協会講師による実施試験に合格した者）が食育講師として、10月以降認定食育講師として都内の小学校で授業を行った。
文京ハッピーベジタブルフェスタ2023	ゼミ学生	2023(R5) 4.20(木)～ 9.13(水)	学内および 文京シビックセンター1階展示室	・文京保健所健康推進課主催の「文京ハッピーベジタブルフェスタ2023」にゼミとして出展した（10年目）。 ・開催日 9月13日(水) 内容:野菜の食育に関するパネル展示、体験コーナー、食育講座など サブテーマ「和食の魅力～おいしさ再発見～」
跡見ひきこもり等地域支援事業	ゼミ学生	2023(R5) 5.15(月) } 2024(R6) 3.31(日)	特定非営利活動法人サンカクシャほか	・各支援団体との協同事業。 ・ゼミ生がボランティアとして若者の居場所に関わった。 ・学生にとっては支援の現場に触れることで、座学で習得した知識を現実的に活用する方法を、その困難さとともに体験することができた。地域社会に関わることで社会性を学び、人間力の向上に繋がった。 ・大学にとっては、地域連携の展開、信頼度を高めることができた。
文京区での銭湯活性化に関する地域活動	ポータル公募学生	2023(R5) 6.1(木) } 2024(R6) 3.31(日)	大黒湯ほか	・文京浴場組合からの依頼を受け、大学生の力によって「浴場を地域の居場所にする」「浴場を若い世代にも知ってもらおう」ことを目標に立ち上げたもの。 ・具体的な活動として 銭湯で行われるイベント内容の案内、営業情報をSNSで発信、定例会を開催した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
文京区コミュニティバスB-ぐる活性化プロジェクト	AGB隊 (跡見ガールズB-ぐる隊)	2023(R5) 5.29(月) ～ 2024(R6) 3.31(日)	文京区民センター ほか	<ul style="list-style-type: none"> ・文京区のコミュニティバスB-ぐるの車内で流す映像制作プロジェクト。 ・ポータルで公募したメンバーで編成された「AGB隊」が2チームに分かれテーマを定めて区内を取材、撮影と編集作業を行った。 ・「B-ぐるバス沿線協議会」との連携。 ・活動を通じて、構成メンバーのチームでの行動力、外部との交渉力、コミュニティへの理解、映像制作・表現力、事業のマネジメント力等が向上した。
小日向台町小学校学習支援プロジェクト	ポータル 公募学生	2023(R5) 6.1(木) ～ 2024(R6) 3.31(日)	文京区立小日向台 町小学校	<ul style="list-style-type: none"> ・小日向台小学校の放課後学習支援およびこどもひろばの有償ボランティア活動である。 ・放課後学習支援では、小学校低学年を対象として宿題やドリルを使った学習支援を行った。 ・こどもひろばでは、小学校全学年および未就学児を対象に、校庭を開放し、遊具の出し入れや子どもたちと遊びながら見守りを行った。
菊坂跡見塾での「菊坂七夕祭り」実施	跡見「学芸員」 in 菊坂 連携先： MIRATZ 本郷第二保育園	2023(R5) 7.7(金)～ 7.8(土)	菊坂跡見塾（旧伊勢屋質店）、 MIRATZ 本郷第二保育園	<ul style="list-style-type: none"> ・園庭がない保育園が多い文京区の実情に対して本学が有する文化財を活用して地域貢献を行うとともに、今回の活動では、川越市内の管理が難しくなってきた竹林の竹を有効活用する試みとなった。 ・菊坂跡見塾の来館者も、子どもたちが作成した竹灯籠や笹飾りを鑑賞し、また七夕の短冊を書いて参加していた。夜間も、地域住民や保育園の子どもと保護者などが展示を鑑賞していた。
第38回文京朝顔・ほおずき市運営への協力・出展	ニューツーリズム 研究会	2023(R5) 7.22(土)～ 7.23(日)	傳通院	<ul style="list-style-type: none"> ・38回目を迎える「文京朝顔・ほおずき市」。本研究会では、例年行われている文京区の祭事である本イベントの運営の手伝いを行ってきた。 ・今年は、コロナ禍を経て3年振りの開催となるが、コロナ禍前と同様、地域の方々と共に活動することで地域活性の支援と協調性の力を養うことができた。
①第4回『文の京書道展』の開催 ②『文の京書道特別展』の開催	文学部 横田恭三教授	①② 2023(R5) 7.5(水)～ 7.14(金)	①②大塚地域活動 センター	<ul style="list-style-type: none"> ①本学の書道を愛好する学生の育成と発表機会の提供 ・本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供 ・本学書道実習受講者および本学書道愛好者で出品を希望する者の書作品の展示 ②本学書道科の認知と書芸術を鑑賞する機会の提供 ・関東を中心とする主な高等学校に対する本学教職課程（書道）の認知 ・文京区との連携による生涯教育推進及び社会貢献

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
株式会社エムアイフードスタイル（クイーンズ伊勢丹）との産学連携による商品開発	ゼミ学生	2023(R5) 7.1(土)～ 12.25(月)	文京キャンパス内・ (株)エムアイフードスタイル本社、 クイーンズ伊勢丹各店舗	・高品位スーパーを中心にフードビジネスを展開する(株)エムアイフードスタイル(三越伊勢丹グループ)と協働し、産学連携プロジェクトとして新たな商品を開発した。
文京まちたいわフェス	土居センター長 地域交流センター	2024(R6) 2.11(日)	跡見学園女子大学 文京キャンパス	①②主催：文京まちたいわフェス実行委員会/文京区まちづくり関係者有志が集う区内地域活動等の発表イベント。 ・文京区まちづくり関係団体によるポスター展示 ・交流イベント（基調講演および交流ワークショップ、音楽パフォーマンス、巨大アート作成等）が行われ約400名の参加があった。 ・コミュニティデザイン学科の学生も運営に協力した。
未来の健康を作る食育プロジェクト2023	ゼミ学生	2023(R5) 7.24(月)～ 12.31(日)	学内および区内の 小学校	・昨年度に引き続き、今年度も学生の考えた食育出張授業を区内の小学校で実施した。 ・子供の食生活改善を目的とした新たなプロジェクトであり、今年度は小学生を対象に、子どもたちとのコミュニケーションに力点を置いた「主食・主菜・副菜の揃った朝食を摂ること」を目的とした食育授業。
大塚小学校ハケ岳移動教室 補助員派遣の件	ポータル 公募学生	2023(R5) 9.25(月)～ 9.27(水)	文京区立ハケ岳高原 学園及びその周辺	・日常的に放課後学習支援活動に参加している本学学生2名に移動教室の補助員としての協力依頼があった。 ・当該学生から応募があり、参加することとなった。期間中は、引率教員を補助し、参加児童の指導などにあたった。
小日向台町小学校 ボランティア (放課後学習教室および こどもひろば)	公募学生ほか	2023(R5) 11.1(水) ? 2024(R6) 3.31(日)	文京区立小日向台 町小学校	・小日向台小学校の放課後学習支援およびこどもひろばの有償ボランティア活動である。 ・放課後学習教室では、小学校低学年を対象として宿題やドリルを使った学習支援を行った。 ・こどもひろばでは、小学校全学年および未就学児を対象に、校庭を開放し、遊具の出し入れや子どもたちと遊びながら見守りを行った。
全国藩校サミット文京大会記念事業『時代まつりin文京』での出店	ゼミ学生 跡見「学芸員」 in 菊坂	2023(R5) 11.3(金)	傳通院	・全国藩校サミット文京大会記念事業『時代支援in文京』が徳川ゆかりの傳通院で開催された。 ・学生が子ども向け縁日に缶バッジ制作と輪投げの出店をした。 ・学生が描いた樋口一葉のオリジナルデザインバッジなどを提供した。 ・歴史をテーマにした地域活性化や地域交流の可能性を検討・実践し、本学所蔵の旧伊勢屋質店の存在、菊坂跡見塾の学芸員の活動紹介も行った。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
大塚仲町町会、菊坂町会、茗荷谷町会ハロウィンイベントのボランティア	大塚仲町町会他 ハロウィン ボランティア	2023(R5) 10.28(土)、 11.5(日)	窪町東公園ちびっこ 広場、 たかざわや、 旧伊勢屋質店	<ul style="list-style-type: none"> 活動期間に各町会でハロウィンイベントが開催された。 学生がイベントの受付やお菓子スポットでお菓子を配布するスタッフボランティアとして参加した。 参加にあたっては、参加学生自身もコスチュームを着用し、地域の子もたちと交流した。
柳町小学校やなぎっこ未来塾学習支援員	公募学生	2023(R5) 12.9(土) ～ 2024(R6) 3.31(日)	文京区立柳町小学校 図書館	<ul style="list-style-type: none"> 柳町小学校地域学校協働本部では、やなぎっこ未来塾と称して、隔週土曜日に図書室で2時間程度、子どもたちの学習支援を行っている。 学生が本塾に支援員として参加し算数のプリントなどを使って学習支援を行った。
春日忌への参加	基礎ゼミ インターン生、 ボランティア学生、 地域交流 センター	2023(R5) 10.21(土)	麟祥院	<ul style="list-style-type: none"> 春日局の追善供養の行事である春日忌は、2018年度より一般公開もされ地域イベントとしてスタートした。 春日忌の運営に関わる会社には、例年、就職課で行っている「ATOMIインターンシップ」や観光コミュニティ学部の「基礎ゼミインターンシップ・学外実習」で学生がインターン等を行ってきた。 インターンの実施および春日忌配布・販売物品の企画制作が行われ、当日は学生が春日忌の跡見学園女子大学ブースの運営を行った。
「いきいきシニアの集い」への書道作品出展	跡見学園女子 大学 書道部	2023(R5) 11.11(土)～ 11.12(日)	文京シビックセンター	<ul style="list-style-type: none"> 文京区高齢福祉課、文京区高齢者連合会主催の「いきいきシニアの集い」へ学生の書道作品を出展した。 多世代交流の機会となった。
礫川マラソン	地域交流 センター	2023(R5) 11.26(日)	文京区内走路	<ul style="list-style-type: none"> 主催：礫川青少年健全育成会の地域のマラソンイベント。 宣伝水「あと水」の提供と学園創立周年事業グッズのひとつポストカードの提供を行った。
茗荷谷町会の餅つき大会	地域交流 センター	2024(R6) 2.18(日)	茗荷谷町会	<ul style="list-style-type: none"> 文京区礫川地区の小石川表町会とは文京朝顔・ほおずき市をきっかけに様々な町会イベントで学生が運営のボランティアを行っている。 同町会主催の「餅つき大会」の運営に、文京朝顔・ほおずき市の運営に協力した跡見ニューツーリズム研究会が参加した。 地域の方々と共に活動することで地域活性の支援と協調性の力を養うことができた。 業務内容 餅つき大会の受付・誘導などの運営支援

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
文京博覧会	地域交流センター	2023(R5) 11.24(金)、 11.25(土)	文京区役所	<ul style="list-style-type: none"> ・文京区シビックセンター地下2階を会場に区内の企業が出展・物販などを行うとともに区内の大学が出展しているイベント。 ・地域交流センターとしてポスター展示と学科関連の資料を提供した。
文化財防災イベント	跡見学芸員 in 菊坂	2024(R6) 1.21(日)	菊坂跡見塾 (旧伊勢屋質店)	<ul style="list-style-type: none"> ・文化庁と消防庁が定める文化財防火デーに合わせて、学生たちが文化財の防災について学んできた内容の実践訓練を行った。 ・消防署による消火器訓練。 ・参加者:本郷消防署、菊坂町会会員とその子供ほか
妊産婦・乳児救護所備品確認訓練	地域交流課 ほか	2024(R6) 1.31(水)	文京キャンパス	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度は、備品確認訓練として、文京区防災課職員、文京区地域担当職員を中心に備蓄品の確認訓練を行った。
企業地域連携推進ネットワーク会議	地域交流センター	①2023(R5) 7.18(火) ②2024(R6) 2.7(水)	①株式会社図書館流通センター ②株式会社新興出版社啓林館東京支社	<ul style="list-style-type: none"> ・区内企業と地域活動団体の連携事例紹介 ・意見交換 ・区内企業が本業を生かして地域団体とどう連携しているかについて事例紹介を通じて知り、今後の取り組みのヒントが得られるような機会が提供された。
大塚青少年健全育成会「中学生文化祭」運営スタッフ	公募学生	2024(R6) 2.17(土)～ 3.31(日)	文京区立茗台中学校	<ul style="list-style-type: none"> ・大塚青少年健全育成会が企画する「中学生文化祭」が3月24日(日)に開催された。この活動では、本学学生が中学生文化祭の企画立案・調整、当日の運営を担うスタッフとして参加した。学生たちは企画段階から参加し、複数回の打ち合わせを経て、文化祭当日の企画・運営に携わった。

新座市等

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
新座市障害者地域活動センターふらっと収穫祭ボランティア	地域交流センター	2023(R5) 7.26(水)～ 7.27(木)	新座市障害者地域活動センターふらっと	<ul style="list-style-type: none"> ・本団体は、利用者の自立・社会参加をサポートする地域の拠点としての役割を担い、様々な活動を行っている。 ・本団体主催の「ふらっと収穫祭」にて、物品販売の学生ボランティアを行った。
新座子育てネット ①春ひろば・ ②夏ひろば・ ③冬ひろば	地域交流センター	①2023(R5) 4.4(火) ②2023(R5) 7.28(火) ③2023(R5) 12.23(土)～ 2024(R6) 1.5(金)	①あたご・菅沢集会所 ②野火止5丁目集会所 ③池田前原集会所 ほか	<ul style="list-style-type: none"> ・新座子育てネットの行う「にいざ子どもの未来 包括連携プロジェクト」の一環で行っている。小学生の長期休暇期間の「子どもひろば」事業に地域交流センターの呼びかけで学生がボランティアで参加した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
わこうキャンパス会議	ゼミ学生	2023(R5) 8.3(木) ～ 2024(R6) 3月	和光市中央公民館	<ul style="list-style-type: none"> ・和光市の中央公民館を若者が来やすい場所にするための方法を考えるワークショップの企画・運営を行った。ワークショップは計3回、地元中高生を対象として同公民館で実施した。
市内3大学学生と市長との懇談会	地域交流センター	2023(R5) 11.14(火)	立教大学新座キャンパス	<ul style="list-style-type: none"> ・新座市では市民から市政に対する意見・提言を頂く広聴制度を設けている。 ・この制度の更なる拡充を目的として、市内3大学の在籍生が、市政に関する意見、提言等を行う「市内3大学学生と市長との懇談会」が開催され、本学の学生も発表を行った。
にいざみんどの未来フォーラム	地域交流センター	2024(R6) 2.27(火)	新座市民館	<ul style="list-style-type: none"> ・「にいざみんどの未来 包括連携プロジェクト」3年間の活動報告と、未来に向けてみんなで考えるフォーラム。 ・学生が発表者として登壇した。

その他の地域

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
花の実園 第5回さくらまつり2023 ボランティア参加	ゼミ学生	2023(R5) 4.2(日)	社会福祉法人習愛会花の実園	<ul style="list-style-type: none"> ・花の実園が主催する「さくらまつり」に学生がボランティア参加をして交流の場から学ぶことで、社会福祉施設と地域社会の関係について考察するきっかけを得ることができた。
鳩ヶ谷商工会主催の地域イベント（南鳩ヶ谷スプリングフェス）への参加・協力	ゼミ学生 +学科1年生	R5(2023) 4.29(土)～ 4.30(日)	南鳩ヶ谷駅前広場	<ul style="list-style-type: none"> ・「南鳩ヶ谷スプリングフェス」への参加・協力を実施した。商工会が主催となり、中心メンバーである若手の地元商工業者が企画し子どもコーナーの運営を行った。 ・具体的にまちづくりやコミュニティデザインの担い手として地域住民（商工業者）がどのような意識でどのようにかかわっているかを、対話や活動の姿を通して学ぶことができた。
天王洲カナルフェス春フェスへの参加	ゼミ学生 2～3年生希望者	R5(2023) 4.21(金)～ 4.23(日)	一般財団法人天王洲・キャナルサイド活性化協会	<ul style="list-style-type: none"> ・観光を専門とする教員の知見を地元に戻元することと併せ、学生達の観光政策の実践の学びの場として観光まちづくりに関する様々な会議への参加、産学協同のイベント企画の提案等を行い、4月末に実施された天王洲の春のイベントに参加した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
農林水産省 農林漁業発イノベーション推進事業(地域活性化型)補助事業 山形県西村山郡西川町大井沢 地域づくり活動計画策定・実証事業への協力	ゼミ学生	R5(2023)7.15(土)～ R6(2024)3.31(日)	文京キャンパス(会議等)・山形西川町大井沢(現地ワークショップ支援等)遠隔会議システム(Zoom利用)	<ul style="list-style-type: none"> ・土居ゼミナールと山形県西川町大井沢との協働事業。 ・住民組織が中心となり、農水省の補助事業が採択され、今後3年間をかけて地域づくり経学の策定都、実証事業を行うもの。 ・コミュニティデザインの実践の格好の機会ととらえ、本事業に協力した活動を展開した。地域づくり計画のワークショップの運営協力、実証事業の企画や実施の協力を行った。
天王洲カナルフェス夏フェスへの参加	ゼミ学生	R5(2023)7.28(金)～7.30(日)	一般社団法人天王洲・キャナルサイド活性化協会	<ul style="list-style-type: none"> ・提携先の「天王洲・キャナルサイド活性化協会」は全国的に知名度を向上させ観光庁も特に他地域の手本として注目している団体である。 ・観光を専門とする教員の知見を地元に戻元することと併せ、学生達の観光政策の実践の学びの場として観光まちづくりに関する様々な会議への参加、産学協同のイベント企画の提案等を行った。 ・「パナソニックグループ」の最新技術を用いた観光DX・空間価値向上技術を活用した観光コンテンツの開発や「アートと水辺の街 天王洲」の新たな魅力づくりを行った。
雛のつるし飾り制作体験会	ゼミ学生	R5(2023)7.29(土)	昭和女子大学(三軒茶屋)	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和女子大学に、東伊豆町役所の職員、二子玉川高島屋の担当者、昭和女子大学教員・学生、白梅学園の学生、本学の学生が集まり、東伊豆町の伝統文化である雛のつるし飾りを作製した。 ・9月末に東伊豆町でのフィールドワークを実施する予定であり今回は事前学習の良い機会となった。 ・東伊豆町の方々をはじめ、他大学の学生たちとの交流の場ともなり、視野が広がる機会となった。
農林水産省 農林漁業発イノベーション推進事業(地域活性化型)補助事業 山形県西村山郡西川町大井沢 地域づくり活動計画策定・実証事業への協力	ゼミ学生	R5(2023)9.8(金)～9.10(日)	山形県西川町大井沢	<ul style="list-style-type: none"> ・土居ゼミナールと山形県西川町大井沢との協働事業。 ・住民組織が中心となり、農水省の補助事業が採択され、今後3年間をかけて地域づくり経学の策定都、実証事業を行うもの。 ・コミュニティデザインの実践の格好の機会ととらえ、本事業に協力した活動を展開した。今回は大井沢地域づくり計画策定に向けて、大井沢例大祭に参加し地域の魅力を学生が体験し、現地の方々発信内容について検討を行うワークショップに参加した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
東伊豆町フィールドワーク	ゼミ学生	R5(2023) 9.23(土)～ 9.24(日)	静岡県東伊豆町	<ul style="list-style-type: none"> ・塩月ゼミでは、静岡県東伊豆町と本学2019年に11月に地域連携協定を締結して以降、ゼミ生の有志により地域活性化事業に携わってきた。 ・今回の現地調査は、昨年度から継続実施の「オリジナルカクテルレシピ開発事業」という産官のコラボレーションによる地元の特産品のミカン「いずのはる」を用いた新たなカクテルに関し、現地の旅館やホテル棟への説明や挨拶を行った。 ・現地をはじめて訪れた学生のために、東伊豆町の観光資源を視察した。
静岡県東伊豆町の産官学地域活性化事業	ゼミ学生ほか	R5(2023) 7.1(土) ～ R6(2024) 3.31(日)	静岡県東伊豆町	<ul style="list-style-type: none"> ・塩月ゼミでは、静岡県東伊豆町と本学2019年に11月に地域連携協定を締結して以降、ゼミ生の有志により地域活性化事業に携わってきた。 ・現地調査では、東伊豆町の観光資源の視察、雛のつるし飾りの発信と継承、および特産品を用いた商品開発事業を実施した。
盛岡市との地域連携協定に基づく、もりおか短角牛プロジェクト現地調査	ゼミ学生	R5(2023) 6.17(土)～ 6.18(日)	岩手県盛岡市内	<ul style="list-style-type: none"> ・令和5年度もりおか短角牛プロジェクトの実施に向けて、視察、現地事業者等との打合せ、聞き取り調査等を実施した。 ・木材町よ市（視察） ・肥育農家（牛舎視察）、意見交換 ・放牧場（視察） ・事業者（レストランオーナー）意見交換
上富良野町 地域資源調査	ゼミ学生	R5(2023) 7.7(金)～ 7.9(日)	北海道上富良野町内	<ul style="list-style-type: none"> ・上富良野町およびかみふらの十勝岳観光協会の事業の一環として、都市に住む学生の目線で、地域資源を見て、体験し、地域資源の評価や改善点について提案を行った。 ・帰京後、地域情報や観光情報の発信ツールとなる動画等の基礎素材の作成を行った。 ・地域活性化を目指す自治体や観光協会の取り組みに関わることができ、地域課題の一つである交流人口の増加に向けての取組を学ぶことができた。
むつ市シティプロモーション推進に向けての地域資源調査	ゼミ学生	R5(2023) 8.20(日)～ 8.22(火)	青森県むつ市	<ul style="list-style-type: none"> ・むつ市のシティプロモーション推進事業の一環として、都市に住む学生の目線で、地域資源を見て、体験し、地域資源の評価や改善点について提案を行った。 ・帰京後、今後、シティプロモーションのツールとなる動画等の基礎素材の作成を行った。 ・地域活性化を目指す自治体の取り組みの一端を伺うことができ、シティプロモーションという新しい行政の役割を学んだ。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
文京区学生と創るアグリノベーション事業		R5(2023) 9.2(土)～ 9.4(月) R5(2023) 9.9(土)～ 9.11(月)	岩手県盛岡市内	<ul style="list-style-type: none"> 盛岡市との地域連携協定に基づき、「文京区大学生と創るアグリノベーション事業」の一環として、もりおか短角牛をテーマとする農業活性化、地域活性化を目的に実施した。 地域飲食店と連携し、新しいもりおか短角牛メニューの開発と、消費者モニター調査の実施のほか、もりおか短角牛の魅力の一つである牧野における飼育方法の見学、健康志向や肉質に意識の高い消費者などによるモニターツアーを実施した。 関連の関係者との打合せ、事業実施後の意向把握などを行った。
文京区学生と創るアグリノベーション事業		R5(2023) 11.25(土)～ 11.26(日)	岩手県盛岡市内	<ul style="list-style-type: none"> 盛岡市との地域連携協定に基づき、「文京区大学生と創るアグリノベーション事業」の一環として、もりおか短角牛をテーマとする農業活性化、地域活性化を目的に実施した。 現地での協力農家に対して、事業の報告会と今後の意見交換を中心に実施した。時間をかけてじっくりと懇親的に話を聞くことがなかったため、学生にとっても本音の意見や気持ちを伺うことができた貴重機会となった。
東伊豆町フィールドワーク	ゼミ学生	R6(2024) 1.13(土)～ 1.14(日)	静岡県東伊豆町	<ul style="list-style-type: none"> 観光デザイン学科塩月ゼミでは、静岡県東伊豆町と跡見学園女子大学が令和元（2019）年11月19日に地域連携協定を締結して以降、ゼミ生の有志により地域活性化事業に携わってきた。 今回の現地調査では、昨年度から継続して行ってきた「サッポロビール×跡見学園女子大学×東伊豆町 オリジナルカクテルレシピ開発事業」という、サッポロビール株式会社と東伊豆町と本ゼミとのコラボレーションによる地元特産品のミカン「いずのはる」を用いたカクテル（ノンアルコールビアを含む）開発に関し、新たに協力をお願いする現地の旅館やホテル等への説明や挨拶、および地元特産品等についての情報収集を行った。 その他、現地に初めて訪れる学生のために、様々な東伊豆町の観光資源を視察した。

件名	活動主体	実施期間	実施場所	実施内容
農林水産省 農林漁業発イノベーション推進事業(地域活性化型)補助事業 山形県西村山郡西川町大井沢 地域づくり活動計画策定・実証事業への協力	ゼミ学生	2024(R6) 2.24(土)～ 2.26(月)	山形県西川町大井沢	<ul style="list-style-type: none"> ・土居ゼミナールと山形県西川町大井沢との協働事業。 ・住民組織が中心となり、農水省の補助事業が採択され、今後3年間をかけて地域づくり計画の策定と、実証事業を行うもの。 ・コミュニティデザインの実践の格好の機会ととらえ、本事業に協力した活動を展開した。今回は大井沢地域づくり計画のうち、来年度の取組みについて最終検討・確認を行うフォーラム及びワークショップに参加した。大井沢囲炉裏文化体験に参加し地域の魅力を学生が体験し、現地の生活文化の理解を深めた。
和光市中央公民館、坂下公民館、南公民館三館合同主催およびTJUP共催による食育講座「バナナうちで元気な子～生活リズムを整えよう～」	ゼミ学生	2024(R6) 2.17(土)	和光市南公民館	<ul style="list-style-type: none"> ・公民館三館合同主催およびTJUP共催による食育講座を開催した。講師は、マネジメント学部の石渡教授とゼミ生（「大学生食育講師」の有資格者）4名が登壇した。

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 『ゆかり』に関する規程

第一条 この規程は、跡見学園女子大学学則第一条の二第3項に基づき、地域交流センター年次報告書『ゆかり』（以下『ゆかり』という。）の発行と編集に関する必要な事項を定める。

第二条 『ゆかり』は、原則として毎年一回発行する。ただし、必要な場合には、臨時号や合併号を発行することができる。

第三条 『ゆかり』に成果を発表することができるのは、原則として跡見学園女子大学（以下「本学」という。）の専任教員とする。ただし、以下の者は、地域交流センター長（以下「センター長」という。）が認める場合には、成果を発表することができる。

- 一 本学兼任講師
- 二 本学事務職員（学芸員・司書等）
- 三 本学に在籍する学生
- 四 本学の地域交流活動に関与する者
- 五 地域交流センター運営委員会（以下「センター運営委員会」という。）の議を経て、センター長が許可する者

第四条 『ゆかり』の編集及び発行については、地域交流センター（以下センターという。）がこれを行う。

第五条 投稿を希望する者は、センターが指定する期日までに「投稿申込書」に必要な事項を記入の上、届け出るものとする。また、原稿は、センターの指定した期日までに提出することとする。

第六条 原稿を依頼する者に対し、センターは「原稿依頼」を送付する。

第七条 投稿原稿は、センター運営委員会において審査を行い、採否を決定する。ただし、必要に応じて、投稿原稿の内容に関わる専門家に意見を徴することがある。

第八条 採用原稿が多数にのぼり、全編の掲載が困難な場合には、センター運営委員会が協議し対処する。

第九条 掲載原稿の著作権は執筆者に属し、センターは編集著作権を持つものとする。掲載原稿の複製権及び公衆送信権を含む著作権は、大学が参加するインターネット上の論文公開システムの中で無償公開されることを前提としたうえで、原則として執筆者に帰属する。それぞれの執筆者が学術的寄与のために複製または転用等を行う場合は、これを妨げないものとし、また、センターに許諾を求めることを要しないものとする。ただし、転用等を行う場合は、その内容が『ゆかり』に掲載済である旨を明記しなければならない。

第十条 この規程を実施するに当たり、必要な細則を定めることができる。

第十一条 この規程の改廃は、センター運営委員会の議を経て、センター長がこれを行う。

附 則 本規程は、令和3年4月1日より施行する。

ゆかり 跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書5

発行日：2024年3月31日

発行者：跡見学園女子大学地域交流センター

〒112-8687 東京都文京区大塚1丁目5-2

電話：03-3941-7420

印刷：セントラル印刷(株)

ISSN：2435-516X

跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書 5

ゆかり

「ゆかり」巻頭言	小仲信孝
地域交流活動の新たな展開の模索 —2023年度跡見学園女子大学の地域交流活動の概況—	土居洋平
特別寄稿 埼玉県富士見市 跡見学園女子大学の学生に期待すること	星野光弘
特別寄稿 菊坂町会と跡見学園女子大学との 地域連携活動報告と、今後の連携活動に期待すること	川口伸久
特別寄稿 跡見学園女子大学との取り組みと、跡見生に期待すること	盛田元博
跡見学園女子大学におけるTJUPの取組みについて —TJUP(埼玉東上地域大学教育プラットフォーム)活動報告—	照沼 愛
跡見学園女子大学の地域交流活動の現状について —アフターコロナにおける現状分析—	川副早央里
特集 アフターコロナにおける地域交流活動	跡見学園女子大学地域交流センター
第4回「 ^{ふみ みやこ} 文の京書道展」開催報告	横田恭三
菊坂跡見塾所蔵資料調査報告(4)	川副早央里・山上真由子・新垣夢乃・ 磯田みずき・大屋恵実子・黒木真悠・ 小玉采奈・鈴木みづき・関鈴菜・ 中川大資・長根旭美・弘真生・渡邊菜月
質屋の記録 ～見えてくる昭和初期の暮らし～ 企画展開催記録	黒木真悠・川副早央里・新垣夢乃・関鈴菜・ 渡邊菜月・磯田みずき・小山凧咲・ 長根旭美・弘真生・小玉采奈・鈴木みづき・ 大屋恵実子・中川大資・渡辺恵未
菊坂子ども歴史探検隊 「発見されたうつわの破片は何時代のもの!？」報告	川副早央里・新垣夢乃・磯田みずき・ 黒木真悠・長根旭美・弘真生
菊坂子ども歴史探検隊 「どうやって質屋を守る!? 防災の秘密を探してみよう!」報告	小山凧咲・川副早央里・大屋恵実子・ 磯田みずき・水村美穂・山上真由子・ 渡邊菜月
旧伊勢屋質店パンフレット制作活動	長根旭美・梅原菜摘・川副早央里
2023年度の地域交流関連活動記録	地域交流センター
跡見学園女子大学地域交流センター年次報告書『ゆかり』に関する規程	